
星の丘学園戦記

えるつう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の丘学園戦記

【Nコード】

N5845J

【作者名】

えるつう

【あらすじ】

ちよつとした未来

大きな変化を遂げた世界で 君は何のために生きている？

そんな世界とは無関係なようで 実はしっかり繋がっている…そんな星の丘学園では 今日も何かが起こる…？

この物語は そんな学園で青春を謳歌する少年少女たちのちよつと

した”戦記”だったりする

学園祭編完結までは毎日更新でしたが 現在不定期更

新に…泣

ブローグ | 世界はいま

ちよつとした未来

世界は大きく4つに分かれていた

南北のアメリカ大陸を中心に
環太平洋に形成されている国家

通称 A P U

ヨーロッパロシアを含み
旧E Uを中心に形成されている国家

通称 E E U

極東ロシアを含む
アジア一帯に形成されている国家

通称 A C

最後に

どの3大国家にも属さない小国が中東に幾つか存在している

世界の統一化 近代化が進む一方で
世界は3大国家が互いを牽制しあう
いわゆる冷戦状態にあり

加えて

治安の悪い中東国家の内戦問題や
大国に対するテロ行為

さらに

完全に砂漠化したアフリカに住んでいたいわゆる砂漠難民の受け入れ

世界各地の環境問題など

世界規模の大きな問題を抱えている

かつて日本と呼ばれていたここも
現在はAPUの一部で
日本区と呼ばれている

かつて国土の大半を占めていた山地は
現在およそ15%まで減り
街路樹と住宅が交互に並ぶ町並みになり
全世界でも指折りの近代化を遂げていた

この物語は
そんな日本区のとある街にある
そんな世界情勢とは関係ないよう
で密接な関係をもつ一風変わった
学校での

少年少女たちのちょっとした”戦記”である

学園祭準備編 — はじまりの夢

暑い

そしてまぶしい

最初に思ったのはそれだった

そもそも ここはどこだ？

気が付けば

俺はかげろうがゆらめく
学園の屋上に居た

まだ夕方なのに
学園が静かなのは
一体なぜなんだろう？

そもそも—

なぜ俺はこんなところに？

屋上は基本的に解放されているが
誰も好き好んで行くような場所ではない

そりゃそうだ

特に何か面白い物があるわけでもなく
ただ殺風景に
フェンスが佇んでいるだけなのだから

まあ ときどき
カップル共が
いわゆる午後の甘いひとときを過ごしていたりするが――

少なくとも俺は
そんな奴らを冷やかす為に屋上に行くほど暇を持て余していない
とりあえず
いまもただ殺風景な屋上がそこにあった

…と思った

いつのまにか

俺の足元にはひとつの影が伸びていた

影の持ち主は

俺に背を向けて

夕日をバックに佇んでいた

格好から

学園の女子生徒みたいだ

すると

「いめんね

急に呼び出して」

ふと夕焼けの中の少女が口を開いた

「話したいことがあってさ」

そう云って振り返る少女

夕日で顔がわからない

でもどこかで聞いたことがあるような

そんな声だった

「あのね…」

やっぱり聞き覚えのある声

思い出せないのがもどかしい

そんな俺をよそに

少女は思ってもみなかった台詞を口にした

「いきなりだけど…」

わ 私と…

付き合ってくださいっ—!!」

いきなりの告白に

俺の心臓はハンマーで殴られたように跳ね上がった

や まあ

ほんとにハンマーで殴られたら
とてもじゃないが平気でいられない

あくまで例えだ

まあ

それくらい衝撃的だったってわけで…

ふと彼女の方を見ると

彼女は

右手を俺の方へ差し出して

下を向いていた

その手は

小刻みに震えているように見えた

えっと…

なんだ？

とりあえず

この手を俺が握れば

それは俺と彼女が

付き合うことになるんだろうな

断る理由なんて…

そんなものは当然なかった

いまだに

彼女の顔が見えないため
彼女が誰か思い出せずにいたが

聞き覚えのある声だったし

告白してくるくらいだから
きっと元々仲のよかった人なんだろう

そう俺は解釈していた

だから俺は

彼女の期待に応えるため
自分の右手を

震える彼女の右手へ伸ばした

…その瞬間だった

「えつと…」

はい 長谷川君」

「…へ？」

我ながら実に間抜けな声が出た

目を開けると

そこには見慣れた風景が

教室だった

あれ…？

さっきまで確か屋上に居たような―…

顔を上げると

教壇の上から俺を見つめていたクラスの委員長と目が合った

そうか！

わかったぞ！！

「委員長…

俺のこと好きだったのか」

わざと感情を込め

あたかもドラマや映画で俳優がセリフを云うような感じで云ってみた

「えっ…？

え ええっ！？」

一瞬の静寂

そして次の瞬間には
教室が笑いで包まれた

うーん

本当に期待通りの反応をしてくれるとは

さすが委員長

その潤んだ瞳が可愛い

「あー…」

委員長は顔を真っ赤に染め俯いている

ちよつとやり過ぎたかな？

そう思つた瞬間

何か殺気のようなものを感じた

やばっ

そういえば…

刹那

「長谷川？

なにをふざけたこといつてるの？」

トーンの低い冷静な声

あからさまに殺意が籠ってる

その声を聞いて

俺は一気に目が醒めた

あ そういえば

あれは夢だったのか…

そんなことを考えていると

「長谷川？

ちゃんと聞いているのかしら？」

再び心臓を握り潰すような声

いつのまにか

教室から笑い声はおろか
すべての音が消えていた

副委員長だ

気の弱い委員長に代わって
実質クラスを仕切っている

その人の皮を被った鬼は

教室のドアにもたれ掛かっている

うーん

女子とはいえ威圧感たつぷりだな

そんなことを思いながら

クラスの裏のボスを見ていると

「何かいいたげね
なにかしら？長谷川」

心を読まれた！？

「いえっ

何でもありませんっ」

そして見事に裏返る俺の声

再び教室に笑いが

教壇の委員長の顔は
まだ真っ赤なままだった

「また居眠りか？」

隣から声

俺の悪友の武田
通称”タケ”だ

「うるせ

寝る子は育つ　だ」

「はいはい

でもいまは寝ない方がよくね？

副長御立腹だから

寝てたら一生成長できない体にされっぞ？」

笑いながら

あたかも他人事のように云ってくる

や　まあ他人事だけど

…ってか

副長って一体どこのヤクザだよ

と

心の中でツツコミを入れておく

そんなことを口にした次の日には
きつと俺のちんまりとした葬式が行われるだろうからね

それはさておき

タケの云うことにも一理ある

いま寝たら一生起きれない気がする

ドアの近くから

いまだに殺気を感じるのは

何かの気のせいだと自分に言い聞かせる

さつき目が醒めたとはいっても

正直疲れですぐに眠くなる

さすがに二度目は俺の命が危ない

「そうだなー

目薬ないか？

目が冴えるような目薬」

「目薬はないが

塩酸ならあるぞ？

それとも硫酸がお好みだったかな？」

今度は背後から声

これまた悪友の渋谷
通称”バカ”

こいつはバカで十分だ

いや むしろ

バカに失礼なくらいだ

成績はなぜか優秀だが
言動がすっ飛んでる

この前なんか

副委員長を眠らせるとか云って

麻醉銃を懐から取り出したくらいだ

とりあえず

とにかくすっ飛んでる

「目が冴え過ぎて何も見えなくなるわ
んなもんいるか」

バカは相手にしない主義だ

それでもこいつは
なにかと俺を巻き込むけど

「それは残念だ」

全然残念そうにない様子で言う

「じゃ セロテープ
まぶた貼り上げるから」

冗談で言っ ててみる

「ガムテープじゃダメか？」

流石バカ

「そんなことしたら
長谷川の眉毛と睫毛が全部抜けっぞ？」

タケのツツコミもどこかネタだ

「両面テープもあるが？」

「別に二重でパッチリ可愛くなりたいわけじゃないんだからさ…

ってかなんでそんなん持ってたんだよ」

妥当なツツコミを入れておく

「普通の人間はもしもに備え
両面テープを持ち歩くものだぞ？」

残念ながら

そんな普通は存在しない

そもそも

もしもの備えに両面テープって

どんなもしもだよ

と

心の中でツツコミをいれる

と云うか

いつからお前は普通の人間になったんだ？

まあそれは言わないでおく

…というか俺たち
なにか忘れてないか？

ふと前を見ると

委員長が涙目で俺を見つめていた

…ヤバイ
可愛いんだけど…

見惚れていると
再び殺気がドアから

それを俺は左へ受け流す

「ぐはっ!!」

受け流した先のタケに450のダメージ!!

「…ってなんで!？」

タケのナイスツッコミ

副委員長に0のダメージ

タケは敗北した…

「タケは使えんなあ…」

俺が呟く

「お おかしいだろー…」

タケが泣きながら机に突っ伏す

…あ

また委員長放置してた

委員長の瞳は

いつ涙が溢れてもおかしくないほど潤っていた

一応謝るか

「あの いいんちー…」

キーン コーン

あ チャイム

馬鹿やってる間に

もうこんな時間になってるし

「じ じゃあ…

また…明日に ぐすっ」

罪悪感だけが残った

…でもやっぱ

委員長には涙目が似合うな

とか思ってみたりして

学園祭準備編 | 実は偉かった

ちなみに今日は終業式

本来なら

明日から夏休み

…のはず

だけど

このクラスは―

いや

どのクラスも

夏休みの真っ最中にある学園祭の準備―クラス発表など―のために
毎日教室に行くわけだ

ちなみに

うちのクラスは

まったく云ってもいいほど話が進んでいない

まあ理由は…

ご察しの通りだ

ともあれ

表向きには明日から夏休みだ

「ふうー……」

俺は帰る支度をする生徒を横目に大きな溜め息をついた

俺も寮に帰りたいが

そういうわけにもいかない

鞆を背負った俺は

昇降口へ向かう生徒とは逆方向に歩き始めた

「ふう」

俺はとある教室の前で止まる

普通の教室よりかなり大きいそのトビラと
その横に提げてある板の文字を見る

附属生徒会室

読んで字の如くだ

別に

悪さをして呼び出されたわけではない

でも

いつもこのトビラの前で
少なからず緊張する

「さて…と」

俺はトビラに手をかけた

ガラガラー

「失礼しまー…」

「遅ーーーーい!!!」

怒鳴り声と共に

高速で何かが飛んでくる

それを俺は後ろへ受け流す

ドカッ

壁に1050のダメージ

壁に亀裂が…

壁は戦闘不能になった

…って

そもそも壁って戦闘可能なのか!?

や そんなことはどうでもいい

壁を戦闘不能に追いやった犯人の第2撃が来る！！

???の攻撃

” 理不尽な命令 ”

「貴様 罰として今日からこのユキ様に一生仕えろ
そして崇める！！」

なんと傲慢な

しかし

俺に0のダメージ

俺の攻撃

” 会長権限 ”

” 無条件降伏 ”

「会議始めるから

ユキは静かに席に座る」

「ぐっ…貴様…」

ユキは敗北した

「卑怯だろ！！」

ユキの見事なツッコミ

ふっ…

世の中権力なくしては生きていけないのだよ

こいつはユキ

附属の生徒会の副会長

どこぞクラスの副委員長と性格が微妙に被る
血の気の多い可愛いげのないヤツ

まあそんなこと云ったら今度は何が飛んで来るかわからないから云
わないでおく

ちなみに

さつき壁を戦闘不能にした凶器は
どうやら消しゴムみたいだ

恐るべき剛腕

ユキのせいで

生徒会室の前の壁は

開校7年目にして

14回補強工事をしている

まあそんなことはどうでもいいか

「ふうー」

無意識に溜め息をつき

椅子の隣に鞆を降ろすと

「でもハセ君遅いよー

私と同じクラスなのに」

と
正面から声がした

クラスメイトで同じ生徒会役員のサヨ

ごく普通の女の子だ

「まさに重役出勤ですね 先輩？」

今度はサヨの隣

2つ後輩のまひる

純粹無垢

天然なのかときどき言動がぶっ飛ぶ

この前は

俺とふたりっきりの生徒会室でなんの前フリもなく急に脱ぎはじめ

「先輩とだったら…」

とか言い出すしさ

まあなんだ

ユキとまひるが濃いから

サヨが隠れてる

そんな感じの附属生徒会メンバーだ

まあまだ本当は何人も居るけど

このメンバー+1が主で附属生徒会は動いている

その+1は今日は来てないみたいだ

まああいつは本業があるからな

まあいいや

えーと

話がズレすぎたが

俺はこの附属の生徒会長だ

…や 本当だから

「なにぼーつとしてるの？
会議始めようよーハセ君？」

あ そうだった

「そだねー
といっても

特にやることあったわけ？」

「学園祭の対策でしょ 先輩？」

あ そうだった
↑

「今年はどうなるかなー？」

ここの学園祭は一風変わっている

「去年は放送室が占拠されたって聞きましたよー？」

と まひる

「体育館も占拠されたよね……」

と サヨ

「去年は本校の鬼畜生徒会長が関わらなかったから生徒共が好き放題やりやがったからな」

今度はユキ

そう

ここの学園祭は激しい
とても激しい

理由は簡単

脳天気な学園長だ

一番インパクトのある
一番学園祭を盛り上げたクラス・部活・個人に賞を与えるなんて云
ったからもう大変

毎年毎年

生徒会・風紀委員・保健委員連合（通称生徒会あるいは役員）
V・S・

暴走生徒集団（通称暴徒）
の激戦が繰り広げられている

ちなみに

クラス副委員長のあいつ
サトミやタケ、そしてバカを筆頭に
我等が附属3年2組は
優勝候補No.1だ

…まったく
俺とサヨが生徒会だったのに

むしろ当日は
毎年敵だといわんばかりにやってくれる
（まあ去年の途中までは俺もあっち側だったんだけど）

けど
相手はうちのクラスだけじゃない

生徒会連合は

附属本校合わせて約140人

対する暴走生徒集団は全生徒

一部うちのクラスの委員長みたいな”いい子”も居るが
文字通り一部にすぎない

とにかく

無勢に多勢

以前

学園長にクレームを云って見たが「君たちは若いよねー
青春だねー」

はっはっはー」

とぬかしやがった

「とりあえず

今年こそ園長シメル？」

ユキが物騒なセリフと共に立ち上がる

こいつは本当にやりかねない…

まあ実際

学園長をシメようにも

学園長に会わなければ無理な話で

ユキが学園長に会わなければ問題がなく―…

「やー やってるねー」

タイミング良く

間の抜けた声が響く

ちよつと待て この声は…

声に反応するように

ユキの目が光った

「…えーんちよー？」

や ヤバい

ユキの目つきが獲物を見付けたそれに！？

ユキのターン

ユキは自分の鞆へ手を伸ばした

俺のカウンター

” 会長指令 ”

俺はサヨにサインを出した

” プラン Y3 ”

すかさずサヨは自分の上着のポケットに手を伸ばし
小型スイッチのボタンを押した

ユキに200のダメージ！！

ユキは鞆を抱えたまま気絶した

ミッション

学園長を守れ

を クリアした!!

その間

ほんの2・64秒

「新記録更新ですね 先輩？」

「そ そうだな…」

もし仮に誰か目撃者が居たなら
きっと悲鳴をあげていただろう

そりゃ突然女の子が鞆を抱きしめたまま気絶したのだから

だが

これはここではよくみるものだった

去年の暮れ

生徒会メンバーがユキに贈ったブレスレット

一見ただの装飾品なそれは
サヨが持っているスイッチを押せば
7段階の電流が流れる仕組みだ

普段流している電流はもちろん気絶する程度だが…

ちなみにだが
いまだにユキはブレスレットのこの機能に気付いてないらしく
今回みたく暴走しては気絶させられている

その証拠に

今回の発動で計724回だ

…まあ

ブレスレットの話はおいておこうか

こんな光景を目の当たりにした学園長は
「学園祭 楽しみだねー」
とだけ言って去って行った

一歩間違えればユキに血祭りにされていたのに
余裕があるのか
ただのバカなのか

学園長はお決まりの日の丸扇子を扇ぎながら生徒会室を去った

…ってか

一体何をしにきたんだ!?

そんなツツコミを

心の中でいれていると

「先輩―

今回もユキ先輩の鞆の中がいろいろ凄いですよー」

とユキの鞆を覗きながら

まひるが言ってきた

さて

毎回恒例となりました

ユキのドキドキ（はあと）荷物チェックのコーナーです

そんなコーナー知らない？

大丈夫大丈夫

お兄さんに任せなさい

1 品目 鞭

「…ハセ君
また鞭だね…」

「…うん」

「これで7個目ですね…先輩」

まあなんだ

最近ユキは鞭にハマってるらしい

2 品目 荒縄

「これは…
初めてじゃない？」

「初めてだね…」

「これって何に使うんですかねー？」

これでロウソクでも出てきたら
もうアレしか考えられないよな…

3 品目 ハイヒール（右足だけ）

「そうきたか!？」

「そうきたかーって

どうきたんです 先輩？」

「まひるちゃんは知らなくてもいい世界の話だよ……」

「そうですかー

残念ですー」

いやいや 残念じゃないから!!

まひるは純粹でいてくれ!!

…とか

心の中で思ってみた今日この頃

4 品目 水筒

「ハセ君

中身は水かお茶かな？」

「普通水かお茶だろ？」

せいぜい予想斜め上を行ってもスポーツドリンクだろ」

「ユキ先輩に普通や常識は通用しませんよ 先輩？」

「うつ…そ そうだね

「じゃあ確かめるか」

というわけで

紙コップに中身を出してみたところ

サスペンスドラマかなんかの誘拐犯がハンカチに染み込ませていそうな薬品の臭いがした…

5 品目

「……………！？」

「ハセ君

これ…拳銃！？」

「大丈夫です 先輩

ゴム弾ですよ これ」

……………いやでも

ゴム弾も悶える程痛いつて聞いたことが…

いまさらながら

ユキが恐ろしくなってきたよ…

6 品目 ダンディーなサングラス

「……………」（サヨ）

「……………」(俺)

「似合いますかー先輩？」

俺とサヨは苦笑いしかできなかった

まひるはそのダンディーなサングラスをかけて鏡の前でキメポーズをとったり

いかにもなセリフを吐いたりしてみたりで「機嫌だった

…っか

ユキがこんなサングラスをかけたら
ただの狂暴な変質者でしかないな…

「今回はこれだけみたいですわねー」

「また磨きがかかってるね…」

「そうだな…」

んじゃ　これらは没収」

「そつえば

没収したものってどうしてるの？」

「え？」

ほら　ゴム弾なんて役立ちそつじゃん？
暴徒鎮圧に」

「はうあー!!」

ないすあいであですね 先輩」

「言う なるほどね」

…何と言うか

生徒会メンバーはドSの集まりだったりする

「さて…と

ユキが気絶したせいで今日は話が進まないし
お開きにしない ハセ君？」

「そだな

ユキをどうする？」

俺は気絶してる凶悪犯を見た

「放置でいいんじゃないんですか 先輩？」

…純粹無垢だからこそ
まひるって本当怖いよな…

「じ じゃあ今日の会議は終了
片付けしよっか」

そう俺が云つたと同時に
生徒会室の扉がまた開いた

…が

今度は学園長ではなく
なんと俺の彼女だった

学園祭準備編 | 贅沢な立ち位置

「先輩の彼女

本当に可愛いですよー

さすが学園3大美少女ですー」

彼女が去ったあと

まひるが口を開いた

そう

おもいつきり自慢だが

誰もが羨む俺の彼女は

学園3大美少女のひとりだ

さらに自慢すべきは

なんと告白は向こうから

あれは確か半年前だったな

どうだ 羨ましいだろ？

とか思っていると

「ほらハセ君

ぼーっとしてないで片付けしないと

彼女待たせちゃダメでしょ？」

そうだった

さっき彼女がここに来たが
とりあえず屋上で待ってるから
とだけ言って出ていってしまった

あんまり片付けが長引くと申し訳ないんだった

…そういえば

どこか元気がなかったような

体調でも悪いのだろうか？

「もー

先輩フラれちゃえばいいのになー」

まひるの不意打ち

俺に100のダメージ！！

俺は倒れた

「ちょ　ちよつと
なに縁起でもない……」

「そうすれば私が慰めてあげるのになー」

再びまひるの不意打ち
俺は復活した！！

…って

何かちがーう！！

「ほらハセ君 遊んでないで片付ける
まひるちゃんもハセ君で遊ばないの」

「えー

別に遊んでないですよー
私は…本気ですから…」

頬を赤らめながら呟く

「はいはい

その辺にしとくの」

しかしあっさりサヨに流されてしまっていた

「ううー」

…俺放置？

「はい 片付け終わり
ハセ君は早く屋上に行く
私たちは寮に帰ろうか」

なかは強引なサヨの合図で俺たちは解散し
サヨとまひるは寮へ

俺は屋上へとそれぞれ歩みを進めたのだった

学園祭準備編 | 夢を見る者 見せる者（前書き）

物凄い勢いでいまさらですが

基本的に場面が切り替わる毎を一章扱いにしているので一章が結構短かったりしますが勘弁してください笑

暑い

そしてまぶしい

屋上のドアを開けた感想だ

先に来ていた彼女は
沈みゆく夕日を眺めていた

「…ごめんね
急に呼び出して」

それは
どこか聞き覚えのあるセリフだった

夕日を背に佇む彼女

そのせいで表情はよくわからなかった

肩が震えているように見えたのは気のせいだろうか？

「…話したいことがあってさ」

それは今日見た夢と
同じシチュエーション
同じセリフだった

…だけどどこか引っ掛かる

何かがあの夢とは違う

相手の雰囲気とか―

それに

あの夢は確か…

…そうだ

俺が告白され―

「…引っ越すんだ 遠くに…っ」

それは

今日の夢との違いを決定付けるひとことだった

「…………え？」

もしかしたら

声にならなかったかもしれない

それだけ彼女の言葉は

俺を動揺させていた

そんな俺を前に彼女は言葉を続ける

「もう 長谷川君とは…」

後半はもう聞き取れなかったが
言いたいことはわかった

そりゃそうだろう

この学園の生徒は全員寮生活
遠くに越すとなると

もう会えなくなると云って間違いはないだろうから

いいたいことはいろいろあったが

思い浮かぶ言葉はどれも俺の口から言葉として発されることはなかった

「その…」

学園にはいつまで…居るの…？」

やっとの思いで紡ぎだした最後の希望

「…今日まで」

その希望も虚しく散った

あまりに急すぎる

あまりに残酷すぎる

あまりに虚しすぎる…

だつてさ

これからだろ？俺たち

これからが楽しいんじゃないか…！！

「ごめんね…」

なかなか言えなくて…」

彼女は両手で顔を覆っているため
声がしっかりと聞こえない

でもわかる

俺と彼女は半年間ずっと一緒にいたのだから

「……………っ!」

俺は奥歯を噛み締める

もうどうにもならないとわかっているのに…

ふと彼女が歩きだす

一歩

二歩

ゆっくと

そして立ち止まる

俺の正面で

俺は何も云えず
何もすることができず
ただ立ち尽くす

相変わらず逆光のせいで
この距離になっても顔は見えなかった

だけど

彼女の頬に

光る一筋の雫があつたのは見間違いないはずだ

彼女は俺を抱き寄せた

次の瞬間

ほんの一瞬だが

俺の唇に何かが触れた

俺から一歩さがった彼女は…笑っていた

表情は見えなかったけど
俺には笑ったように思えた

俺の彼女との最初で最後のそれ――実質俺はファーストキスだったが
――は涙の味がした

いつのまにか日は落ち
辺りは薄暗くなりつつあった

はるか頭上で
一番星が輝いていた

まるで
ひとりになった俺をじっと見つめるように

細長い月が現れていた

まるで俺を嘲笑うかのように…

学園祭準備編 | タイプはそれぞれ

「はふうー…」

寮の自分の部屋

お世辞にも広いとは言えない部屋のベッドの上で
俺は盛大に溜め息をついた

この学園の生徒は全員
学園の隣の寮で生活してる

というか

学園と寮が渡り廊下のような感じで繋がっている

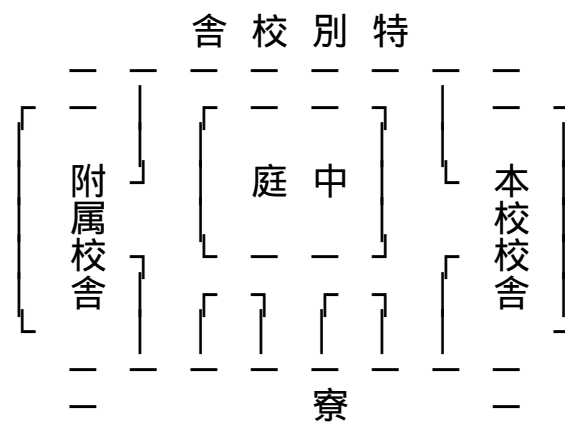
まあ

生徒数がなかなかだから
その横幅は高速道路並
4車線分くらいあるんじゃないか？

ちなみに

学園祭などのクラス発表で出店をやるクラスの半分くらいはこの渡り廊下―というか中庭―に店を出す

ちなみにこんな感じ



…ふう 疲れた

改めてになるが

この学園は本校と附属で構成されている

附属で3年間過ごし

本校で4年間生活する

いわゆる附属が高校

本校が大学つてとこかな？

とにかくそんなだから

生徒数はハンパない

そして俺は附属の生徒会長

本校にも別で生徒会長が居て

そいつが総生徒会長となってる

学園祭などの全校イベントでは
当然附属と本校の生徒会は――もちろん風紀委員と保健委員も――手を
組む

それでも全校生徒を相手にするには人手が足りないが

…正直

いまの俺には

そんなことはどうでもよかった

「ふー…」

屋上での出来事のあと

俺はしばらくして部屋に戻った

そして気付いたら寝ていた

起きたら

すでに外は真っ暗

10時を回っていた

先程

学食で遅い夕飯をひとりで済ました

食べた　ではなく　済ました　だ

他の生徒が居なかったからか

それとも雰囲気の違いに気遣ってくれたのか

学食のお姉さんがチーズケーキをサービスしてくれた

お姉さんといろいろ話した気がするが

上の空だった俺は

正直何を話したのか覚えていない

…ひとりになりたい気分だったから

それでもお姉さんは元氣のない俺を励まそうとしてくれていたように思えた

「んんーっ」

そして部屋に帰ってきていまに至っているというわけだ

「ふうー…」

溜め息と同時に

俺は再びベッドに倒れ込んだ

こういう時は寝て忘れよう

それが一番だ

明日も学園祭の準備と生徒会があるから
早く寝たいのも本当

寝不足で今日みたいな恥はかきたくないからね

「さて…っと 寝ますかな」

そう呟いて

明かりを消した瞬間

ピンポン

インターホンが鳴った

…どうやら今日の俺はとことんついていないらしいな

「会長 居るか？」

ドアの向こうから男の声

一瞬でも傷心の俺を慰めてくれる女神様の降臨を期待した俺は単なるバカでしかないようだ

んで えーっと

この声は…

「本多だ」

そうそう 本多

いっこ下の生徒会役員で

特に親しい数人のうちのひとり

今日の会議に来なかった＋1はこいつだ

まあドアの前でいつまでも待たせるのはよくないな

「ちょいまち いま開ける」

俺は自分のIDカードをドアの隣にあるカードリーダーに通す

ガチリ

鍵の開く音がした

…無駄にハイテクだよな

「今日は会議に行けず申し訳なかった」

部屋に入るなり本多は口を開いた

「や 別にいいよ
特に何もやってないし」

事実だ

やったことと言えば
ユキを気絶させてそのまま放置したぐらいだ

… あ 放置しっぱなしだ

まあいいや

「で こんな時間になんだ？」

俺の部屋に誰かが来るのは珍しい

まして本多なんて
過去にほんの数回あったくらいだ

「ふっ…」

傷心の会長のツラを拝みにな」

唇の端を吊り上げ

いかにもなにやけ方をしながら半ば予想通りの言葉を発した

さすが本多

情報が早い…

本多の役割は主に裏方

情報収集

妨害工作

兵器開発 などなど

おかげで俺が別れたのも早々に知っているみたいだ

こいつの情報網

侮れんな

…と話を戻そう

「…流石に情報が早いな」

「ナメてもらっては困る」

…誰もナメてねえよ

「それはそうと
思った以上にへこんでない様子だな
期待していたのだが…残念だな」

「まあこんなんでへこんでられねえよ
明日から忙しいしな」

実際かなりへこんでますが…

自分で言うのもアレだが
ポーカーフェイスにはある程度自信がある…つもりだ

「で 本当は何をしに？」

とりあえず話を戻す

「いや だから

傷心の会長のツ―」

「じゃあ用は済んだな？

とつとと帰れ 俺は眠いんだよ」

いつまでも本題に入らない本多にキツイひとことをお見舞い

「ぐっ…」

本多に精神的ダメージ！！

…と思ったら

「ふふっ…

相変わらず清々しいな」

…そうだった
こいつDMだった

「気持ち悪いな…」

「そう褒めるな 照れるだろ」

…しかもお約束だ

「…はあー」

溜め息しか出ないぜ

「…仕方ないから本題に入ろう」

何が仕方ないのかサッパリわからんが

「明日の会議は何時からだ？」

すぐくまともな内容だった！！

「今日と同じだろ？」

午前はクラス 午後から会議」

そう俺が言つと

また本多は不敵な笑みを浮かべた

「夏休み初日からこぞって全員スパイ活動か
それもなかなか乙だな」

…あ

明日から夏休みだった

生徒会側がクラスに行ったって邪魔者扱いされるだけだな

なにせもう始まっているのだから

「すまん ミス

じゃ 午前9時に生徒会室だな」

「ふっ 了解した」

別れたダメージか
ちよつとボケてるみたいだな…

「それだけか？」

「ああ

今のところは な」

「そうか じゃ明日な」

「ああ 邪魔したな」

短い挨拶を済ませ マゾ本多は帰った

… っ て云うか

毎回思うけども

俺のが先輩なんだよな…

本多のあの堂々とした態度
策略家のような口調
そしてなによりその実力

…正直味方でよかったよ

「んんーっ」

大きな伸びをしてベッドに倒れ込む

気が付けば
すでに日付は変わっていた

「ふうー 今度こそ寝ますかな」

電気を切り
目をつむった

やはり疲れていたのか
思った以上に早く意識が遠ざかる

しばらくして
静かな部屋に
静かな寝息だけが響いた

学園祭準備編 | 夢が繋いだ想い

…ここはどこだ？

茜色に染まる空

佇むフェンス

吹き抜ける風

…屋上だ

しかしなぜだ？

俺は自分の部屋で寝てたはず…

「
… ああ 夢か」

そつえば最近 よく夢を見るな

昔は全然見なかった気がするのに…

「
… またこの夢か？」

夕方の屋上

立ち尽くす自分と

夕日の中にいる少女

居眠りの最中にも見た夢だ

少女が自分に向き直る

「ごめんね 急に呼び出して」

やっぱり 同じ夢だ

「話したいことがあってさ」

話さなくてもわかってるよ

「あのね…

いきなりだけど…

わ…私と

付き合って下さい…！…！」

そういつて頭を下げ
右手を突き出す少女

昼間の夢はここで終わったんだよな

…それにしても

この妙な既視感は一切…？

俺はこの先を知ってる気がする…

無意識に俺の手が伸びる

少女の右手を包み込む

少女が涙ぐんだ顔を上げる

俺ははっとした

周りの気温が下がった

俺の視界が歪んだのは次の瞬間だった

最後に見えた少女の笑顔が妙な既視感の正体を物語っていた

季節は…冬だった

目覚めは思った以上に悪い
というかむしろ盛大に最悪だった

真上に突き出した握りしめたままの右手は力無く宙をさま迷っていた

もちろんその手には何も…

「……………!!」

…あった

俺は飛び起きた

恐る恐る拳を開く

ジャラリというチェーンのこすれる音

「…これって」

リングが通っているネックレス

春に彼女と一緒に街へ行ったとき買ったお揃いだ

俺のリングにはイニシャルのR・Hが―…

…ない

そこに刻まれていたのは

A・S

紛れも無い
彼女のイニシャルだった

周りは静寂に包まれている

「いつか」その時」が来たら交換しようね？」

「その時」がいつのことなのか考えてもみなかった

もしかしたら彼女は最初からこうなることをわかっていたのかな……？

それとも――…

「……………っ！」

シートに染みがひとつ ふたつ

やがて大きくいびつな図形が出来上がった

「…綺麗サッパリ忘れようと思ったのにな
そうだな… 忘れられるわけねえだろ…畜生が…っっ!!」

思い出したよ 彼女の言葉を

気付いた このリングがいま俺の手元にある意味を

—ずっと一緒だからね—

そうだ そうだったな…

「ああ…ずっと一緒だ
当たり前だろ…?
俺たち…」

好きだったんだ

お互いのこと 好きだったんだから…

「…うう…つく…」

嗚咽を堪えて立ち上がる

俺にはやることがある

この学園で

「忘れねえよ…絶対にな」

窓から差し込む光を受け
胸元で金色が輝いた

学園祭準備編 | いつもの朝

感傷に浸るのはほどほどにして俺は身支度を済ませた

A M 5 : 3 0

寮で生活している学生の起床時間にしては早過ぎる

おそらくまだ

普通の生徒は起きていないだろう

しかも夏休みだ

まあ

夏休みに入っただからといって

徹夜でゲームとか

一晩中青春してたりとか

ある意味学生らしいヤツらは起きていても不思議じゃないが……

当然といえば当然だが
さすがに寂しい光景が広がっている

A M 6 : 0 0

一部の生真面目で早起きの優等生ヅラした生徒が起き始める時間

きっちり詰めれば
収容人数1000人を軽く超す学食には
ひとりの学生しか居なかった

正確には
ひとりの学生と
数人の学食の従業員しかいないだ

「ふうー…」

こういう日は静かにひとりで朝食をとるのが俺の普通だ

こういう日とは

彼女と別れた翌日

という意味ではない

今日から本格的に学園祭の準備が始まる

—つまり

今日から”戦争”が始まる

そういう日だからだ

これは俺が生徒会側になる前からの習慣だ

学園祭やクリパなど

それらの準備期間の始まりの日をひとりで迎える

今日の朝食はフレンチトーストとストレートティー（夏だけどＨＯＴ）を注文したはずだけど
ヨーグルトとイチゴジャムがついてきた

受け取るとき

例のお姉さんがウインクしてきたから

このヨーグルトとイチゴジャムは

お姉さんから俺への差し入れかなんかだろう

その証拠に

トレーの上に

「がんばれよ 生徒会長^{はあこ}」

って書いてあるメモが乗っていた

嬉しいけど

勝手に注文してないものを出しちゃって大丈夫かな？

とか思ったけど

せっかくだから頂こうと思う

ジャムが二つ乗ってるのは

俺がロシアンティーを好きということを知ってるからかな？

それに

ヨーグルトでひとつ

紅茶でひとつジャムを使うほど俺が甘党だということも知ってるみたいだ

まあ他の生徒とズレた時間にひとりによく学食に来ているから覚えられているのだろう

俺がロシアンティーを飲み終えた頃には
学食は随分賑やかになっていた

ふと時計を見ると

短針はちょうど7を過ぎた辺りだった

俺はトレーをカウンターに返し学食を後にした

学園祭準備編 — バカと天才はなんとやら

キュツキュツと

シューズが廊下を擦る音だけが響く

丁寧に磨きあげられている廊下のみ発することを許された音

それはどこまでも響き渡っていた

普段気にならないこの音が響き渡るのは

いつもならそれを掻き消す雑音がいまは存在していないから

7時半

こんな時間——しかも夏休み初日——の廊下を歩く人間などほとんど居ない

例外は

実際にシューズの音を響かせている俺

…それと

「こそこそついてくるなよ」

俺は振り返りもせず歩いたまま静まりかえった廊下に言い放つ

「ふっ 流石は会長
と言ったところだな」

姿と気配を消して俺の数m後ろをついてきていたマゾ本多ぐらいだ

「相変わらずだな 本多」

再び振り返りもせず
人間離れた能力を有する後輩に言う

「ふっ… それより…だ

”例のブツ”は完成した」

いつのまにか真横にならんでいたマゾ本多が話を振った

「早いな…」

まだ頼んでから一週間じゃねえか？」

いくらこいつの技量でも

このブツをつくるのに二週間はかかると思っていただけに驚きだ

「いや 正式には6日と7時間18分だ

そして早いのも当然だろ？」

寝る間も削って作業に明け暮れたのだからな」

そんな詳しい時間は知らんが

とにかく予想以上の素晴らしい働きだ

というか寝る間を削る必要性なんてないのに…
無駄に頑張ったこいつに敬意を表すよ

そして隈ひとつないその目の下の機能を俺にもわせる

「とりあえずお疲れ　よくやった」

「当然だな」

本多の仕事のひとつ

それが”兵器開発”

まあ

兵器と言っても物騒なものではない

…まあ時々ある意味物騒なもの―高性能な手枷や振動数のハンパない電動マッサージ機とか―を作ったりしてるけど

（才能の無駄遣いというか　使い道を間違えてるというか…）

とにかく今回頼んで造ってもらったのは変に物騒な物ではない

”例のブツ”を手渡される

知らない人が見ればどこかのキャリアの新モデルのケータイか多機能携帯端末にしか見えない

もちろんそのすべて―小型液晶画面からネジ一本まで―が本多お手製

さらに洒落たことにケータイでいう二ツ折タイプではなくスライドタイプ

…相変わらず妙に凝ってるな……

「しかし 俺は相変わらず会長が羨ましい」

かしゆかしゆスライドで遊んでいると
突然マゾ本多が意味不明の台詞を云う

何の脈絡も無しに だ

「急になんの話だ？」

とりあえず聞いてみる

「いや それは…」

なぜか顔を赤らめ

視線を宙に漂わせたと思ったら

”例のブツ”をチラ見して

また目を逸らして…

（意味わからん　とうとう壊れたか？）

そう思いながらも絶賛かしゆかしゆ継続中の”例のブツ”をふと見てみる

「……………」

相変わらずマゾ本多がなぜか”例のブツ”の液晶にチラ見を繰り返す

頬を赤らめて

「…ん？」

待受画面がなぜかユキになっていた

しかもなぜかサディスティックな笑みを浮かべている画像

いかにもといった感じの不気味な笑い声が聞こえてきそうなほどだ

この笑みには恐ろしいくらいに鞭とか蠟燭とか…

…そんなアイテムが似合いそうだ

「はあ…」

俺にや理解らんな

そもそもあんな凶暴女のどこがいいんだよ？」

そついつてふと思った

マゾだからか

「…そこがいい」

うつとりとした声で呟くマゾ本多

こいつもうダメだ…

みてくれは中性的で決して悪くないから黙ってりゃモテそうなのに…

性格に難アリ

いや 性癖にか

「もったいねえよな…」

俺の零した素直な感想も聞いておらず

ひたすら自分が蹂躪される妄想をぶつぶつ呟きながら俺の隣を歩いている

「はぁ…」

生徒会メンバーのキャラの濃さに改めて頭が痛くなってきた

言動がちよっと（？）危ない天然少女（もしかしたらすべて演技かもしれないが）

サディスティックでアクティブな少女

なかなかのイケメンで頭脳明晰なマゾ

そして……至って普通の少女

……あれ？ひとりだけ……？

…まあいつか

しばらく歩いていると 目的地が見えてきた

… 附属生徒会室だ

学園祭準備編 | 攻めも守りも

「さて…」と

みんなを待つかね」

「そうだな」

今日は附属の生徒会側の全員会議

いつものメンバーだけだと無駄に広いこの部屋も狭く感じれるほどになる

とはいえ

まだ集合時間まで1時間弱ある

…さすがにひまだ

本多とは仲が悪いわけではないが話が弾む相手でもない

というか共通の話題がない

確かに俺は割とSだが

男をいじめて快楽を得るような人種じゃない

さすがにそこまで人道から外れてはいない…はずだ

「んー　さすがにひまだなあ…

俺ちよつと飲み物買ってくるよ

お前は何か飲むか？」

無難なところを攻めてみた

…誰だいま”攻め”で反応したヤツ

過剰反応だぞ

…こほん

気を取り直して立ち上がった瞬間だった

ブツン

何か音がした

ザッ ザー……

「…!？」

「なっ　なんだっ!？」

それは部屋の片隅から聞こえてくる

その正体は…

「てっ　テレビかぁ…驚かせやがってよ」

ふうー　と安堵の息を漏らした

「…っ　テレビ!？」

何を安堵のため息なんてついているんだ俺は!？

「ああ　そうだ」

本多が冷静に相槌をうつ

「このテレビって…確か壊れて…」

「ああ そうだ

おまけにコンセントは抜いてある」

「だ だよな…」

コンセントの抜いてある壊れたテレビが急に点いて砂嵐を映し出している

しかもなかなかの音量で

…結構うっとうしい

「気味悪いなあ… ブッ壊すか？」

俺がそう提案すると…

「あー ちょっと待ってよー!!」

砂嵐に混じって誰かの声がスピーカーから流れてきた

「…えっ!？」

驚きで漏れる俺の声

「あれ?ちゃんと聞こえてるかな?

あーあー マイクテストー

てすてすー

あーあー 聞こえてるー?」

スピーカーから小馬鹿にしたような声が響く

「何なんだこれ？」

「さあ？なんのつもりだろうかね　あの野郎」

あの野郎？

あ　そういえば…

聞いたことのある声だなあ…

誰だっけ？

そんなことを考えていると

「OKかなー？

えー　こほん

やあやあ　附属生徒会の重鎮　長谷部君と多田君！！
ご機嫌いかがかね？」

「長谷川と本多だよ…総会長…」

「…わざとだな」

そつだ 声の持ち主は学生のトップ

つまり本校の生徒会長だ

通称総会長

最高にして最低で最強の戦略家で策略家

勝利の為には手段を選ばず 他の生徒はすべて――暴徒ですら――思い通りに動く手駒として操る

まさに軍師

実際 決戦当日は本校生徒会室に引きこもり
ひとりでチェスの駒を弄り 不敵な笑みを浮かべながら戦場で戦う
生徒会側の駒に指示を出している（本多調べ）

安楽椅子探偵気取りですかコノヤロ

だがしかし 誰も奴に文句を言えない

なぜなら――

いままで一度たりとも敗北がないからだ

勝率10割!!

そして開校当時から生徒会長を務めているために生徒会側の勝率も10割……と言いたいが

以前一度だけ他の生徒会役員がその態度にブチ切れたことがあり
総会長がまったく――生徒会側にも暴徒側にも――干渉しなかった行事
があった

そのとき生徒会側が惨敗し 総会長の実力を改めて痛感したため誰
も文句を言わなくなった

ということがあった

実力は本物だから

「ふっ 総会長殿がいったい俺達に何用か？」

いつのまにか壊れているはずのテレビの画面には収まりかけの砂嵐の中に総会長が映っていた

両肘を机につき

口の前で手を組み

あたかも偉そうにしている

本多がそのカメラ視線の目を睨み挑発するような口調で壊れたテレビに言い放つ

総会長にこんな減らず口を叩くのはきつと本多くらいだろう

「テレビに言っ たって仕方なくね？」

俺がツッコミを入れると

まるでさっきの本多の台詞が聞こえたかのように盛大に鼻で笑い

いますぐ本校の生徒会室まで来たまえ

とだけ言っ て画面から消えた

同時に画面の砂嵐も消え

再びのブツンという音を合図に生徒会室は再びの静寂に包まれた

「…一緒に飲み物買いに行くか？」

「…ああ そうだな」

お互い立ち上がり 附属生徒会室を後にした

総会長の第一手が
学園祭という盤上に
いま打たれた

「失礼します」

「失礼する」

俺たちは

本校生徒会室のドアをノックし 開けた

パン パン！！

ドアを開けた途端に耳障りな音と僅かな紙吹雪が俺たちに襲い掛かった

「……………はい？」

状況がイマイチ…

いや まったくわからない

…クラッカー？

何かおめでたいことでもあったか？

俺と本多が来たというタイミングだぞ？

…俺と本多はデキてないぞ？

「さあ 今回の主役のお出ましたよ」

部屋の一番奥からさっきの聞いたばかりの声

どことなく…いや

おもいつきり楽しそうな口調だった

本校生徒会室は無駄に広い

普通の教室より一回り…いや

二回りほど広いそれは100人の生徒を収容しても狭いとは感じない

…が 今回ばかりはそうは言えない

「うわっ…」

そこには

本校・附属の生徒会役員 風紀委員 保健委員といった生徒会側の
生徒が全員集合していた

その数およそ170人

当然その中にはもちろん…

「貴様 このユキ様より遅いとは
まったくもっていい度胸じゃ…」

「もー 遅いですよ先輩ー」

「ハセ君　おはよー」

「あ　ああ…おはよ」

いつもの面子も揃っていた

というか

いったい何事ですかな？

本校生徒会室に全員集合しちゃってさ

…まさかこの総会長に限って団結式みたいなのは絶対やらないだろうしー

「さて　と…これで全員だし
団結式といこうか？」

「えっ！？　ほんとに！？」

「嘘だよ　めんどくさい
…君は相変わらず面白いね」

周りから笑い声が漏れる

ああ…
やっちゃった…

「さてと
主役が登場したし いい加減本題に入るよ？」

なんか軽くスルーされたな…

総会長も相変わらずだ…

「…って 主役！？
俺たちのことですか？」

まさかほんとに俺と本多で男同士の禁断でアツい青春ストーリー開幕！？

「ふっ 違うね
君だよ 長谷川君」

「え？ いや…だから」

「君だ と言っているんだ
本多君も ではなく 君
君たちじゃない」

「あ はい…」

「ってことは 俺だけが主役？」

「…よかった

本多と愛を語らずに済みそうだ

「…って 主役って？」

すると総会長は

呆れたようにため息をついた

「だからそれをいまから話すんだよ
話が進まないからしばらく黙っていてくれるかな」

そう言いながらさっきのテレビで見た格好のままの総会長は
いかにもインテリな眼鏡越しに威圧感をたっぷり放ってくるんだから

俺はただただ黙って何度も頷かざるをえないわけで…

当然そんなやり取りを見ている人たちの何人かが笑いをこぼす

畜生…

170人の生徒の前で曝し者にされてる気分…

…っつか実際曝し者が

「さてと

いいかな諸君？」

総会長が話を進めようとした途端に空気が変わった

影響力は絶大だ

生徒会室から音という音がすべて消えた

「諸君も知つての通りあと一ヶ月程で学園祭だ」

総会長は表情ひとつ変えずに話を進める

「当然恒例の”戦争”が勃きるだろう
だがしかーし だな

私を含む有能な本校4年生は今年度卒業だ
つまり来年度は優秀な私たちはいないのだよ
ここまででは理解できるかね 長谷川君？」

「あ ああ…」

「じゃあ続けようか
さて…と

新総会長は新4年生が就くのが世間一般至極当然
…だがしかし だな
あいにく彼らは無能だ」

総会長の容赦ない台詞に本校3年生のほとんどが俯く

総会長はそれを一瞥しただけで話を続ける

「まあ…

手駒としては使えなくもないかなあ？」

フォローのつもりかただの追い撃ちか…

本校3年生の大半はバツの悪そうな表情で俯くだけだ

「要はな…頭の回るヤツがいらないんだよ
そんなヤツらが総会長になったところで…結果は言わずもがな
だ
ろ？」

確かに

いまの総会長だからこそ暴徒は鎮圧できている

いまの本校3年生じゃ正直相手にならないだろう

それは以前

総会長が両軍に干渉しなかったときに全員が痛感したことだ

いまさら意見する人間は誰もいない

「そこで…だ

単刀直入に言おう

君には次期―つまり二代目の総会長に就いてもらいたい」

「…―つて ええ!？」

いきなりそんな―」

「まあ待ちたまえよ

…君は非常に素晴らしい戦歴の持ち主だ 良くも悪くもね」

「は はあ…」

「”戦争”を誰よりよく理解しているだろうし

とっさの判断力もあり 型破りな手段も取る

まさに私の理想だよ」

そう言つて俺を頭からつま先まで舐めるように見る

ありえないくらい居心地が悪かった

「だがしかしだ

新本校1年生が総会長就任となると当然反対意見が出るだろう
一応 年上には年上なりのプライドがあるだろうからねえ
ゴミクス程度のプライドがね」

嘲るように言い放つ

「…じゃあどうしろと?」

総会長は口元に笑みを浮かべてさらっと言った

「私は今回の学園祭
一切干渉をしないことにした」

「—え!？」

それじゃ指揮官は!？」

「それを君に任せるんだよ
この場にいる駒はそれに納得している」

「それって…」

「そうだ!!」

君がこの170余りの駒を操り 見事生徒会側の完全勝利を演出してみせる!!

クズキレみたいなプライドしか持っていない無能で可哀相な上級生共に二代目総会長はお前以外ありえないことを奴らの腐りきった脳ミソに叩き込んでやれ!!」

「でも…っ」

「なんだ 不安か？尻込みしちまうのか？

この私が見込んだお前はこの程度か!？」

貴様は役立たずな上級生ども以上のゴミクズなのか？」

「くっ…!!」

そんなことは…」

半ば脅迫チックな台詞を浴びせられたじろぐ

しかし総会長は容赦なく続けた

「…当然だが

失敗 敗北はすなわち君に総会長は務まらないことを自ら公表する

のと同じ

そんなんではゴミどもは君を認めないぞ？」

「そりゃそうだけど……」

さっきからあの総会長が畳み掛けるように喋っている

どこか芝居がかった——しかも圧力的な——それは迫力十分だ

「だがしかしだ

私の思うに二代目の総会長に相應しい器の持ち主は君以外いなくて
ねえ……」

両手を軽くあげ

お手上げのポーズをとる

ひと呼吸置いた総会長の表情はまさに知将のものだった

「さて 君の答えを聞こう

君に挑戦する勇氣は……勝利を収める自信はあるか……！」

その表情は

俺がどのような回答をするのかお見通しだった

「ハセ君本当に大丈夫なの？」

「そうですよ先輩ー
大丈夫なんですかー？」

総会長の芝居がかった演説が終わってすでに30分が経っていた

俺たちは本多を除いたいつものメンバーと学食で作戦会議という名のお茶会をしていた

というか

俺以外は朝を食べてなかったらしく ブランチといったところだ

この時間帯なら生徒は少ないし 学食が混む時間帯にはもう生徒会会議を始めたかったから俺も夕方まで腹がもつように少し食べてる

「ってかさ アンタなんかに務まるようなことじゃないって理解ら

なかったの？

完璧挑発だったじゃん

なに見事に挑発に乗ってんのよ」

3人ともさっき本校生徒会室での出来事について色々言ってくる

結局俺は今回の学園祭で指揮を執る

「うるさいぞ ユキ

あんだだけ挑発されれば誰だって断れねえよ

それに俺にだってプライドってもんがなあ……」

「プライド？

はっ そんなもん池の鯉にでも食わせた方がよっぽど有意義ね
いますぐ池に飛び込んでこれば？」

「そんなもんって言うなよな……」

相変わらずユキはキツイぜ……

「でさあハセ君

挑戦をうけたってことは

なにか秘策とかあるの？」

正直んなもんねえよ

だけど精一杯の見栄をはってみる

「当然だろ？」

俺を誰だとおぼっ…」

見事 盛大に噛んでしまった…

「せ 先輩…」

そんな俺を見て

健気な後輩が不安そうに俺を見つめる

… ちょっとドキドキ

そしてユキからの罵倒は左へ受け流す

「や でもまあなんとかなるっしょ？」

一瞬の静寂

それを打ち破るサヨのため息

…はい 本当にすみませんでした

いきあたりばったりですみません…

「やっぱりこんなヤツに総会長なんて務まんねえに決まってるよ」

ユキは相変わらずだ

いや まあいまのは俺が悪いんだけどね

「でも…

私はそんな先輩でも好きですから 安心して下さいっ！…」

そして何故か愛の告白を受ける俺

この可愛い後輩はしれっと嬉しいことを言ってくれる

…っつか最近かなり積極的じゃない？

でも俺には…

自分の胸元のそれに目をやる

…今朝決心したところだ

「ハセ君…？どうかしたの？」

急に黙った俺をサヨが心配そうに見つめる

「…ふん どうせろくでもないことを考えてたんだろ」

ユキには鼻で笑われ 変な言い掛かりまで付け加えられる

もちろんろくでもないことなんて考えてない

確かに叶う望みがとてつもなく薄い夢でしかないのかもしれないけど…

俺は無意識に胸元の金色を握っていたが――

「…って あー!!」

先輩― もうこんな時間ですよ!!
早く食べないと遅れますうー!!」

時計を見ると

会議開始 15分前

俺の前には伸びかけのきつねうどん

ほとんど食べてない…

「もーハセ君がなんかぼーっとしてるから」

「――って俺のせい！？」

「当たり前だ 早くしろマヌケ」

確かにぼーっとしていたが
ユキにそこまで言われる筋合いはない

「マヌケだと！？」

「……ってかお前も食ってねえじゃん！！」

「パンは持ち運びできるだろ バーカ！
バーカ バーカ 単細胞！！
単細胞長谷川！！」

「……お前は小学生かつ！！」

や もういい
こいつは無視だ

早く食べないと…

「バーカ アホ マヌケー
早くしないとうどんがメタボになるぞ」

正直うつとうしい…

…っ てかうどんがメタボってなんだよ!!

「あははっ ざまあみやがれってんだ
こんなんだから学園三大美―いつ!？」

… お前が何を言おうとしたのかはよくわかった

だがな 勘違いするなよ

まだ終わっちゃいないんだ

約束したんだ…夢の続きを一緒に見るって

だからユキが言い終わるまえに左手が動いた

それは半ば怒りに近い感情だ

(サヨ プラン Y・6)

すかさずサヨが胸ポケットの中のスイッチを押す

その時間

わずか0・4秒

俺とサヨの連携は相変わらずなかなかだ

そんなこんなで

ユキの体にいつも以上に強い電流が流れた

まあ自業自得だろ

…こんな強い電流下手すりゃ死んでるぜ

まあユキだから最悪明日には起きるだろう

「さて 行くか」

俺は食べかけのきつねうどんのきつねを机に突っ伏してるユキの頭に乘せた

「そ…そうですねー先輩」

さすがのまひるも少しビビってるみたいだ

…まあ 当たり前か

その後例の学食のお姉さんに聞いた話だが――

ユキは結局深夜2時に目が覚めたらしい

おまけに

乾ききつたきつねの髪飾りのせいで髪にダシの匂いが染み付いていたとか

ふっ　　ざまあみやがれ――！

「さてと

ユキ以外は全員いるみたいだね？

んじゃ始めようか」

予定の時刻には当然全員が本校生徒会室にいた

いやー 優秀だなあ

というか

俺たちが一番最後だったし

「長谷川総会長代行！

ユキさんはなぜいないんですか？」

何も知らない本校の生徒会役員が手を挙げ尋ねてきた

「まあなんだ

疲れてたみたいだから休んでもらってるよ

ユキがいない方が効率もいいしね」

とりあえず

休んでもらっていることに間違いはない

正しくはは強制的に休ませてるだが

「は はあ……」

少し戸惑ったような返事が返ってきた

まあユキがない方が効率がいいのはみんな理解の上だろう

何かと話が逸れるからな

「あ そういえば

長谷川総会長代行なんて長ったらしい呼び方なくていいよ？
もっとテキトーでいいからさ」

正直堅苦しいのは苦手だ

「はい

では”代行”でよろしかったでしょうか？」

結局堅苦しい呼び名だった

「あーもうなんでもいいよ

それとそんな丁寧な口調じゃなくてもね」

「ですが…」

…ああ もう面倒だ

これも初代総会長独裁の副産物

血も涙もない総会長は

巷では”鬼畜”だったり”ヒ○ラー”だったり”毛○東”なんて呼ばれるくらいだ

”敵意”と”恐怖”からそんな名が付いた総会長

例え生徒会側の人間だろうと畏怖される

結論として

生徒会側の人間でさえ総会長には怯えて活動しているのだ

…だが

俺は生徒会側の人間をそんな縦社会の下層の住人にするつもりはない

かといって

ここで”もっとフレンドリーに接しろ”と”指示”しては同じこと

彼ら自身が変わらなくては意味がない

つまりすべては彼ら次第だ

「まあいいか

んじゃ本題に入りますかね」

170人の生徒相手に話すのは緊張するなあ…

しかもいまからは話すだけじゃなくちゃんと指示を出さないといけない

俺が次期総会長に相応しいことを証明するためにも

「で ハセ君
まずは何するの？」

サヨに尋かれた俺は
声高らかに言った

「まずは…」 ロッテ”を組んでもらう」

「……………はい？」

誰かが思わずこぼした本音

「…えっ？」

あれ…？
なにこの空気？

「せ 先輩ー
” ロッテ ” っ て 何 ですかー？」

まひるが静寂を破った

ナイスフォローだ まひる！！

「 ロッ○リアですかー？
ハンバーガーでもつくるんですかー？味で勝負ですか？
それともまんまロッ○ですかー？
お口の恋人ですか？」

… まひるはひとりで勝手に混乱していた

さっきのはフォローでも何でもなかったのか…

余計恥ずかしいわ…

「要は…ペア…のことですよね 代行？」

「ああ… そのつもりだけど…」

優秀な役員が今度こそフォローをしてくれた

心から感謝です…

「だっ だったら最初からそう言うてくださいいよぉー…」

顔を赤く染めながら
まひるが抗議をしてきた

取り乱したのが恥ずかしかったみたいだ

この絵もアリだな！！

…じゃなくて

「いや だって…」 ロツテ” って響きがかっこよくない？」

再び静まり返る

… あ あれ？

「先輩…

どうでもいいですよ」

呆れられたみたいだ

「いや でも…

だってほらせつかくなら—」

「はいはい ペアでいいよね
んで どうやって決めるの？」

サヨが俺の言葉を遮る

もうなんでもいいや…

「過去の記録・記憶をもとに最も互いに組みやすく最も力が発揮されるであろう組み合わせを考えてきてある」

自信満々に言う

俺だってやる時はちゃんとやるんだぞ!!

「そんなのいつ考えたの？」

ハセ君が指揮を執るのが決まったのって1時間前じゃん？」

なぜか鋭いサヨ

「や さっきの自由時間とかで…」

「私たちとお昼食べてたじゃないですかー」

まひるまで!?

うわーん ひどいや…

「ええーい

文句があるなら組み合わせを見てからしろってんだよー!」

と言って

用意してあったノートパソコンのマウスをいじり生徒会室の壁をスクリーンに見立てて映写機で組み合わせを映し出した

しばらくみんなそれを見ていたがふとサヨが口を開いた

「凄い…確かに理想的な組み合わせかも」

サヨの台詞に何人も頷く

「そりゃそうだろ　なんたって」

「本多君がいるからね」

再びサヨが俺の台詞を掻き消す

「本多君ならこの程度朝飯前でしょ?」

サヨが珍しく悪戯な笑みを浮かべた

「まあな」

本多はさらっとそれを肯定する

「ほらー」

サヨがしてやったといわんばかりに言ってくる

畜生…

これを作ったのは本当に俺だぞ！！

本多にも多少手伝ってもらったけど

「だが 俺は今回データを手渡し 会長の指示通り組み合わせ表を制作しただけだ

組み合わせは会長がすべて10分とかからずに組み上げた」

ナイスだ本多ー！！

本当にお前が仲間でよかったよ…

「そ そうなの？
やるね ハセ君…」

サヨが驚いたように言う

ふっ これが実力さ

「そんなことより先輩―
その”ろって”が4つくっついて大きな塊になってるのはどういう
ことですかー？」

そっ そんなこと！？

俺に100の精神的ダメージ！！

ま…負けるものか…！！

「それは”隊”
実際の指示はロットナンバーと合わせて”B2〇〇”といった感じ
で出すから」

アルファベットが隊を表し数字がロッテナンバー

ひとつの”隊”に”ロッテ”が4つ

つまりA 1 A 2 A 3 A 4

B 1 B 2 B 3 B 4

みたいな感じ

「なんでそんなことを？」

いい質問だよ その君！！

「それはだなー

”ロッテ”ひとつで片付く仕事もあれば”隊”が幾つも動かないと鎮圧できない事件もあるだろ？

つまり様々な状況にすぐに行動・対応できるようにするためだよ」「

周りからは納得の声

「さて それじゃお待ちかねの質問タイムだ」

しかしなかなか誰も手を挙げない

さつきは色々言いたげだったみんなだがあらかた納得みたいだ

だが本多が手を挙げてた

「制作時にも思ったが なぜ俺が組まねばならん？
諜報活動の邪魔だ
それくらい理解してると思ったが――」

「あー 問題ねえよ」

俺は半ば不機嫌に言う本多の言葉を遮った

「見ての通り 本多はユキと組んである……が
ユキは足手まといだろうから当日はいまみたく寝ててもらう
実質お前は単独行動でどの隊にも含まれない
あくまで表記の上でこうしてあるだけだ
これでいいだろ？」

「ああ 十分すぎる説明だ」

しかし本多が複雑な表情を浮かべる

……多分ユキと組みたかったのだろう

さて 他に意見は…

「ハセ君は誰と組むの？」

サヨだった

「俺も基本は単独行動をとろうと思う
指揮を執るつもりだからね」

「じゃあ私は誰と組むの…？」

「……………は？」

その質問はかなり想定外だった

学園祭準備編 | セは竜 パは鷹（後書き）

タイトルですが

本文中にロツテが出てきましたが自分は中日とソフトバンクファンです

というアピールでした

「……へ？」

どういうことだ？

「だから 私は誰と組むの？
スクリーンに私の名前無いよ？」

「…うそっ！？」

…あ 本当だ

おかしいなあ…

いつもならサヨはユキと組んでいるから今回も—
って ユキは今回寝てもらうんだった

「ごめん 忘れてた」

「えーっ ハセ君ひどいよお」

やほんと すんません

とっ…とりあえず進めよう

「えーと…」

全員組んであるから…俺と組むか？」

まあ女子生徒を単独行動させるのは危ないしね

「えっ…！？」

私ハセ君と組むの…？」

「あ いや…」

俺とが嫌なら―」

「いつ 嫌な訳ないでしょ…！！」

珍しくサヨが大声を出して
みんな少しびっくりした

「そ　そう？
じゃ　他にはー？」

辺りを見渡すと
まひるが必死に手を挙げていた

うーん
必死さが可愛い

…　というか
質問があるヤツは俺の身内ばっかかよ

「先輩ー
本当はサヨ先輩と組みたかったんでしょ？」

…　はい？
いきなりなんでしょ？

意味がわかりませんが

「そんな小細工までして…
私だって…私だって先輩と…」

そういつて俯いて黙ってしまった

周りからの視線が痛い…

…俺悪いことした？

まひるは容姿良しスタイル良し（B 8 4 W 5 1 H 7 9 本多調
べ）

性格も可愛いから

男子には大人気みたいだ

三大美少女の抜けたひとりの穴埋めはまひるが最有力候補だとか（
本多調べ）

…というか

ほんとに俺はなにか悪いことをしましたか？

相変わらず男子共の視線が突き刺さる

とっ…とりあえず機嫌取りを―

「えと…

あとでそーすせ〇べいあげるからさ…？」

大好物で釣る作戦

はたして…！！

「…二人分ですからね」

にやり 大成功！！

相変わらず男子共の視線は痛いがあえて無視

激しく盛大に絶賛無視だ！！

…んじゃ 気を取り直し

「次に 各”隊”の戦争当日の特殊行動分担を発表する」

「特殊行動分担…？」

近くにいた女子生徒が尋ねる

「当日の特殊な行動 具体的に言うと救護 潜入 実行 護送の全部で4つだ」

救護は発生した怪我人の応急処置がメイン

…まあ怪我人を運ぶのは教師だ

潜入は口コミ等で入った情報をもとに行動を起こそうとしている暴徒の詳細を探る部隊

本多みたいなその道に通じた人しかできない 危険度が高い部隊だ

つまり人数は少ないがエリート

まあ偵察の上位ランクみたいな感じかな？

実行は暴徒を取り押さえる部隊

最も多い人数がこの部隊になる

最悪骨折など大怪我を負う生徒も少なくない

ちなみに生徒会側は鎮圧・防衛手段として状況に応じて様々な“凶器”の使用が許可されていたりする

もちろん死なない程度の凶器だが

護送は捕まえた暴徒を“監獄”へ文字通り護送する部隊

ちなみに“監獄”の場所等の詳細はごく一部の生徒会役員しか知らない

護送される暴徒も 目隠しに耳栓 手足に手錠の状態で“棺桶”に入れられ担ぎ込まれるらしく 詳細を知る者はいない

ちなみに俺も詳しくは知らない

まああとは司令部の俺で全部隊かな

まあ

これは当日の役割であって当日までは役割に関係なく様々な指示に従ってもらうけど

「…よし これで全”隊”の特殊行動分担の発表が済んだな？」

そういつて辺りを見渡す

大丈夫そうだ

「じゃあ早速各”ロッテ”毎に見回りに行ってもらおう
担当区域を発表するぞ」

さっきからサヨ達に配ってもらってる特殊イヤホンマイクが各”ロッテ”に行き渡ったところで担当区域を発表した

「よし じゃあみんな気をつけて各持ち場に行ってくれ 解散!」

俺は声高らかに初日の指示を出した

「―って ハセ君 ”アレ” は？」

”アレ”…？

またなにか忘れてる？

…あゝれゝ

「…ああ ”アレ” を忘れてた」

サヨがため息をつく

呆れたように顔を見合わせる生徒もいる

なんで初日からこんななんだろう…

この一ヶ月本当に大丈夫かなあ…

とか いまさら思っても手遅れだよな…

「はあ…　なんかごめん」

俺の声が虚しく消えていった

学園祭準備編 | 金がほしけりや暴れる!!

ここの生徒は全員IDカード（たいてい略してIDと言う）を持っている

寮の鍵や学食等の支払い 出欠確認など学園の至るところでIDを使う

もし持っていないと学園での生活が不自由極まりない

というか常に肌身離さず持ち歩くのが原則だ

だから全生徒はそれを持ち歩く

だが

もうひとつ肌身離さず持ち歩かなければいけない理由がある

この学園で最も特徴的なルール

毎月各生徒はそれぞれ”お小遣”を受け取る

それは学食や購買部での買い物だけでなく
実際に街に出掛ける際の現金にもなる

問題はここからだ

毎月の”お小遣”は生徒によって金額が違ふ

その月の成績が優秀な成績は多く貰え
成績の落ちた成績は減額

だがそれだけではない

生徒会や暴徒にはボーナスがある

といつてもやはり実力主義で結果主義

無能な役員は全然貰えないが―有能な役員はがっぱり

暴徒も同じだ

派手な騒ぎを起こせばがっぱり

そして捕まれば派手にやらかしたただけがつつり減額

つまり役員はいかに暴徒を捕まえるか

暴徒はいかに派手にやらかし 逃げ切るかがポイントだ

そして暴徒行為にはある程度得点が決まっている

捕まった暴徒は派手さの得点から捕まったペナルティを引いた分が
自分の持ち点になる

要は点数が増えもする運転免許証のようなものだ

一連の流れは

暴徒を捕獲

←

IDを携帯型リーダーで読み込む

←

暴徒行為の度合いに見合った点数を加算しペナルティーを引く

といった流れだ

具体的な数値をあげると

例えば100点分の暴徒行為をしたが捕まった場合10点も手元に残らない

一見暴徒不利とみえるこの制度だが

逃げ切れば大金が手に入る

上の例なら100点がすべて持ち点になるわけだ

ちなみに

学園イベント時に減点を喰らった生徒は例え減点1だろうと”監獄”行き
イベントが終わるまで出られない

余談だが俺の知ってる最大の減点は352・074点

どうやら教室を7つほど吹き飛ばしたらしい

ダイナマイトでも作っていたのだろうか…？

…謎だ

…とまあ話は膨らんだが
”アレ”とはその携帯型カードリーダーのことだ

「各”ロッテ”1つずつ持って行ってくれ
いつものところにしまっているから」

そして捕まえた暴徒に食らわせた減点の一部を捕まえた役員が（何人も役員で暴徒を捕まえた場合はその人数分で割っただけ）貰えるシステム

つまりお互い必死だ

「了解です」

「じゃ 今度こそ解散!!」

10分後

本校生徒会室は静かだった

それはまるで嵐の前触れのような心地悪い雰囲気に包まれていた

現時点でこの学園祭にあのような結末が訪れることを想像した者は

ひとりとして存在しなかっただろう

俺たちの戦争は ついに始まった

「で ハセ君

私たちは何をするの？」

とりあえず校内を散策してる俺とサヨ

「基本的には各ロッテからの報告をもとに指示を出す って感じかな？」

何か事件や異変等に出くわした役員は俺に報告をすることになっている

「特に報告がなければ？」

まあそんなことはこの学園のイベントにおいてありえないが

「このまま2人でランデヴー」

「…え ちょ ハセ君」

「や 冗談だよ」

だが…

いつもならすぐに不審物や不審な生徒の報告が来るのになぜか今日は20分経つても一切そのような報告は無い

初日だから暴徒も大人しくしてくれる—というわけもなく 毎年初日から事件があつたりするのだが…

なぜか静かだ

嵐の前の静けさじゃなきゃいいけど…

すると不意にサヨが口を開いた

「こうしてハセ君とゆっくりするのも久しぶりな気がするよね?」

「そうか？」

わりといつも一緒にゆっくりしてるような気がするけど」

クラスも同じだし一緒にいる機会が多いと思う

「そうじゃなくて

ハセ君とふたりつきりになるのが　だよ」

いたずらっぽい笑顔を浮かべるサヨ

…そう言われるとそうかも知れない

俺は去年編入してきたが

この学園のシステムに苦労する俺―実際は全然別の理由で俺は荒れていたのだが―にいろいろとよくしてくれたのはサヨだった

去年の間は何かあればサヨに頼っていた―というか何かとサヨが構ってきたが

この学園に来て一年経った今俺は附属の生徒会長にまでなっていた

いまでも色々と助けてくれるサヨだが

去年と比べ俺がサヨを頼る回数が減った分たしかにふたりになる機会も減った気がする

「確かにそんな気がするなあ
でも急にどうした？」

するとサヨは目線を逸らし
なんでも
と呟いただけだった

再びの沈黙

微妙に気まずいような空気が流れる

…それを破ったのは後方から聞こえた声だった

「よお お二方
今日もアツいですなあ？」

冷やかしにしか聞こえないそれを真に受けたのか サヨの顔はこころなしに紅くなったように見えた

「もう渋谷君 何言ってるのよ？」

まだ顔の紅いサヨが取り繕うように言う

「バカがなんの用だ？」

俺はため息混じりに強大な敵に問い掛ける

「バカとは失礼ではないかM y同志長谷川よ」

いまはお前の同志などではない
というかむしろ敵だ

と 心の中で毒づく

「…まあ 今日は挨拶に来ただけだ」

「挨拶だと？」

…どうせまた何か企んでるんだろ？」

「本当だとも！！」

挨拶を…次期総会長殿に ね」

そういうことか

「さすがバカ
無駄に情報が早いな」

「はーん 褒めるなよ」

右手を挙げ 照れたように言う

というか褒めてねえよ

「そして挨拶ついでにひとつ情報だ」

「情報だと…？
やっぱり何か企んでるんじゃないか？」

「ふっ そろそろ俺の仕掛けた時限装置が作動する時間だ…」

「…は！？時限装置だと！？」

するといままで静かだったイヤホンから生徒の焦った声が飛び出してきた

「だ 代行っ!!」

特別棟3階の蛇口がいきなり壊れました…!! 水が止まりません!」

「…はあ!?! 蛇口!?!」

「ではさらばだ M Y同志長谷川よ
はーっはっはっはー」

「ちょ… 待てバカ!?!」

「待てと言われて待つような渋谷ではないぞ!?!」

いちいちありきたりな返しをするな!!

というか蛇口壊すって小学生のイタズラかよ!!

『代行！！どうしましょう！？』

あーもうめんどくさいなあー！！

「とりあえず教師に連絡しといてくれ
俺は犯人を追う！！」

『了解です』

畜生…こんな幕開け嫌だ…

「ハセ君！！早く追いかけるよ！！」

「あ ああ…」

サヨに急かされ
俺たちはその場を離れた

…精神的にキツイぜ

学園祭準備編 ― 愛してまゐす!!

「ふーっはっはー」

その程度か？次期総会長殿！」

バカが颯爽と廊下を駆ける

『代行!!同じく2階のトイレからも水が溢れかえってきています
!!』

『なっ…なぜか急にスプリンクラが作動!!
廊下中が水浸しに…!!』

…最悪だ

バカひとりに初日から掻き回されてる…

そしてとことんなまでの水責め(?)

相変わらず敵に回すと厄介だ…

こいつが味方だった頃はどれだけ頼もしかったことか…

…しかし いまは敵なのだ!!

本気で捕まえる!!

「B3 本校棟2階西階段を封鎖だ!!」

マイクに向かって叫ぶ

『り…了解ですっ!!』

そしてB3の声が聞こえた

相変わらず俺とバカとの追いかっとサヨつこは続いていた

附属棟3階から始まったそれは本校棟2階へ移ってもなお続いている

「はっ！！その程度でこの俺を止めれるとも思ってたか！？
甘い…！！甘すぎるぞ長谷川！！
そう 例えるなら―」

「止まれっ！！！」

先程指示を出したB3の二人がバカの前に立ちほだかる

「ぬっ…！！！」

「はぁ… はぁ…
追い付いたぞ… 渋谷」

俺とサヨで後方
B3の二人で前方を抑える

「…まったく 初日から何やってんだよ…」

「挨拶だ と 言わなかったか？」

にやりと渋谷の口元に笑みが浮かぶ

「まあいいや…」

さつさとIDを出せ

現時点で減点40をくれてやる」

「おいおい…いきなりそんなにはあんまりじゃないのか？」

「反省の色が見られないからな」

「なんと…!!」

こんなに反省してるというのか!？」

まるで棚〇が名台詞を吐くときにするように両手を左右に広げアピールする

…どこがだ!？」

すべての言動において反省してる様子が絶賛見当たらん

「まあ嘘だがな ははっ」

ははっ

じゃねえよ!!

と心の中でツッコミをいれる

「…いいから早く出せ!!」

「仕方ないな…」

そういつて渋谷はズボンのポケットに手を突っ込んだ

「これで…よかったかな!!!!!!」

―パチン

「なっ…!?!」

渋谷はポケットから取り出した何かを廊下に叩きつけた

その瞬間眩しすぎる閃光が弾けた

「はーっはっはっはー

だから甘いと言ったのだよ!!

例えるなら…そう!! マッ○スコ―ヒ―だ!!」

「ち 畜生!!

待てバカヤロー!!」

意味のわからない例えをさらっと流し
いまにでも逃げようとする渋谷に叫ぶ

「ふっ…仕方ないな…7秒だけ待とう

………よし7秒だ

ではさらばだ!! また会おうぞ!!

はーっはっはー」

顔を押さえる4人を嘲笑うようにして―というか実際嘲笑って―
バカは逃げ去った

「ハセ君…目が…」

「くっ…3人とも大丈夫か…?」

俺も顔を押さえながら3人を気遣う

「しばらくすれば大丈夫かと…」

B3の片方が言う

確かにこの程度 時間が経てば回復するだろう

「は ハセ君… きゃっ!!」

「うわっ!？」

—ドスン

何か俺の足に引っ掛かり 何かもと俺はバランスを崩しその
まま廊下に倒れ込む

…というか声からして何かとはサヨだろう

「代行?どうしましたか？」

幸か不幸か4人とも目をやられてるのでB3の2人は状況を理解していないみたいだ

「は ハセ君？」

サヨの吐息が顔にかかる

…相当顔同士が近いみたいだ

そういえば倒れ込んだときに俺の唇に柔らかい何か触れたような…

「ハセ君？」

…気のせいだよな？

「あ ああ…立てるか？」

「うん …んしょつと」

サヨが立ち上がる

続いて俺も

うーん 役得？

「いまからどうしますか？」

B3の片割れが問い掛ける

「目が治るまでこの場で待つしかねえな…」

「ですよね…」

いまみたいなハプニングに見舞われないようにもね…

まあいろいろとおいしかったかもしれないが

…そう いろいろと

ま まあ…とりあえず他の役員に指示を出すか…

「あー 一連の悪戯の犯人の渋谷に逃げられた
とりあえず見付け次第確保してくれ
逃げられたら深追いはするな
悪戯の後始末は…まあ教師共に任せとけ
以上 活動が続けてくれ」

「ふうー…」

結局1時間後に目は治った

渋谷の悪戯は計9ヶ所で鬱陶しい被害を出した

そしてすべて水絡み

俺の初采配

開幕戦（？）は黒星がついた

学園祭準備編 | 愛してまゐす!! (後書き)

タイトルの意味わかった人いるのかなあ…? 笑

学園祭準備編 | コーヒー紅茶赤ワイン(前書き)

気付いたら20話ですか…

時が経つのは早いですね笑

学園祭準備編 | コーヒー紅茶赤ワイン

「畜生…渋谷め ナメやがって…」

P M 1 0 : 0 0

俺はひとり遅めの夕飯を学食でとっていた

こんな時間になった理由はもちろん――

バカが色々やらかしてくれたせいできまで生徒会の副責任教師の説教をつけていたからだ

あのうすらハゲめ…

2時間も説教しやがって…

説教の内容も内容だよ

お前に指揮官は早い！！

から始まり 最後には

お前は紅茶ばかり飲んでるせいでステインで歯がくすんだ色になるから気をつけろ！！

だもんな…

意味わからんぜ…

ちなみに今日の夕飯はガーリックトースト2人前
そしてアイスのストレートティー

うすらハゲになんと言われようと…俺は紅茶が好きなんだ！！

とまあサクサクのガーリックトーストを食べながら今日の反省をしていると声がした

「お向かい……………いいですか…？」

顔をあげるとクラスの委員長がいた

「お 珍しいな？まあ別にいいぞ」

「あ ありがとう…」

普段はPM9：00を過ぎると部屋からでない委員長（本多調べ）
が俺の向かいに座る

「委員長も夕飯か？」

「あ… う うん…そう」

委員長の前にはタマゴサンドとフルーツ牛乳

子供っぽい委員長にぴったりのそれだった

「おいしいんですよ…？」

俺の目線に気付いた委員長が上目遣いで言った

相変わらず委員長の上目遣いにはドキドキしちゃうな…

「……………?？」

委員長が不思議そうな顔をする

とっ…とりあえず話題をかえないと

「そ　そういえば…こんな時間に夕飯なんて珍しくないか？」

よし　妥当なところだろう

「え…と

学園祭でのクラスの出し物が決まったので生徒会に企画書を出しに行っただんですが…

生徒会室に会長さんがいなくて…」

いつのまにか委員長は涙目だ

「それで　ずっと待ってたの？」

小さく頷く委員長

なんか俺が泣かせたみたいだ…

おかしいな…

いつもなら総会長は生徒会室に居るのに…

そう思ってすぐに俺はあることに気付く

「あつ…！！委員長ごめん」

「……………？」

委員長は涙目のまま首を傾げる

「俺が今回総会長代行なんだった」

つまり各クラスの企画書のチェックは俺の仕事だ

「……………？」

相変わらず委員長の頭上にはクエスチョンが浮かんでいる

「えーと まあ…紆余曲折ありまして…
とりあえず俺が企画書をチェックする人です」

「……………そ そうなの…？」

ようやく委員長は理解したらしく
俺の方を見ながらフルーツ牛乳をひとくち口に含んだ

…ってか だったら俺ずっと生徒会室に居なきゃダメなのか…！！

うわ…面倒くさ…

といつかひまじゃん

「あー いま企画書持ってる？」

持つてるならいまもらっよ」

両手で持つてるタマゴサンドを口にくわえたままふるふると首を振る

小動物みたいな可愛らしさ全開だ

「部屋に…持って行っ…ちゃったよ…」

口をもふもふさせながら喋る委員長

…俺はこの小動物を部屋に持ち帰りたいよ

まあそれはいろいろとためだから頭を撫でて我慢する

なでなで

「……………」

なんだろう

この人は天然なのか!?

おどおどキャラ+天然か!?

なんだその超強力な組み合わせ…！！

「……………」

いかん 委員長を放置しっぱなしだった

「じゃあさ

いまから委員長の部屋に行って企画書を受け取るよ」

「え… えっ…？」

俺の台詞を聞いて急に慌てる委員長

あ そっか

夜遅くに女の子の部屋に行くのはまずいか…

「まだ…タマゴサンド食べてるの…」

そこか！？

慌てた理由はそこなのか！？

ほかに問題はないのか…！？

「や もちろん食べ終わってからだぞ？」

「あ……なら……はい……
お願いします……」

委員長はタマゴサンドの最後の一切れを口に入れた

「学食のタマ……タマゴサンドは……
タマゴたっぷりでおいしい……ん……ですよ」

……しっかりと食べ終わってから喋って下さい

まあ可愛いから許されるけどさ……

というか可愛いから許すけどさ

「……………?」

本日何回目のクエスチョンですかね？

「……………」

と思ったら委員長は俺の手元を見ていた

「あ 悪いな

もうすぐ食べ終わるから」

「あ……いえ……」

それでも委員長は俺の手元に釘付けだ

「もしかしてこれ食べたいのか？」

俺の食べてるガーリックトーストを一切れ差し出してみる

「……………いいの？」

あ…欲しかったのね

「ガーリックトーストだぞ？」

安全のため確認をとる

何の安全かって？

そりゃこんなちっちゃくて可愛い子に変なものは餌付けできないからね

「…好き」

………へ？

いまなんて…？

「ガーリックトースト…
好きだから…」

あ ガーリックトーストの話か

…そりゃガーリックトーストの話だしな

というか

委員長これ好きだったのか

ちよつとどころかかなり意外だ

俺から受け取ったそれを委員長は食べはじめる

サクサク…

サクサク…

サクサク…

だめだ…

やっぱり頭を撫で回したくなるぜ…

なでなで

「……………」
「？」

+ 上目遣いですか

お願いだからやめてください 理性が飛びます

そんなことを思いながら俺は最後の一切れを食べ終えアイステイー
を飲み干した

ちょうど委員長も食べ終えたみたいだ

…が

パンクズが口の周りにいっぱい付いている

やっぱり天然なのか…!?

「委員長…付いてるぞ…」

そう言っただけ俺はハンカチで口の周りを拭いてあげた

「……………!?!」

「あ……………」

委員長は驚いたみたく俺の手をがっしり掴んだ

顔が真っ赤だ

「い」ごめん……」

さすがにまずかったかな……？

「あ　あり……がとう……」

「えっ？」

声が小さくて聞き取れなかった

委員長の顔は

さっきより紅くみえた

吸い寄せられそうな……

そんな表情だった

委員長ってこんなにも可愛かったんだな…

「部屋…行こうよ…」

「あ ああ…」

委員長の 捉え方によっては”お誘い”にしか聞こえない台詞で俺は我にかえる

学食のカウンターのところでいつものお姉さんがにやにやしていた

…いやいや

別にお姉さんが想像してるようなことはありませんよ!?

そう目で訴えたつもりがいかにも

”頑張れ!!”

といったジェスチャーが返ってきた

や だから違いますって…

ふと委員長長の横顔を見るとどこか楽しそうな表情をしていた

学園祭準備編 ― コーヒー紅茶赤ワイン（後書き）

それでも長谷川の歯は白く輝いてます

こんなところで主人公補正です笑

ちなみに作者もコーヒーや紅茶は大好きです
↑

だから毎日必死に歯磨きしてます…

皆さんも歯磨きを怠らないようにしてくださいね？笑

学園祭準備編 | 時代は競泳水着だ!! (前書き)

タイトルはこの前友達が言っていた名言(迷言?)です

決して作者の心の叫びじゃないですよ!!

学園祭準備編 | 時代は競泳水着だ!!

「ちょっと待って下さいね…
ん…しょっと」

委員長が内ポケットからIDを取り出し ドアに取り込まれている
カードリーダーにIDを差し込んだ

ピッ という電子音のあとに ガチャ と 鍵の開く音がした

「せっかくだから…
あがって…いつて？」

ドアを開けた委員長が俺を促す

「あ ああ…」

言われるがまま部屋に入ると予想以上の光景が飛び込んできた

「なんつーか…

かわいいな 委員長」

「ふえ…！？」

驚いた声をあげる委員長

「あ 部屋がだよ 部屋が」

委員長が驚いた理由に気付いた俺は訂正した

「あう…」

びっくりした…よ」

さて 俺が予想以上って思った理由はというと

壁紙やカーテンはピンクやオレンジといった明るい色で統一されて
おり

さらに机やベッドの上には幾つものかわいらしい動物の人形が整列し
て座っているからだ

とても整頓されたかわいらしい女の子の部屋だった

…メルヘンチック？

と 感心して部屋を眺めていると

「は 恥ずかしい…から
あんまり見ないで…下さい…」

うーん

シチュエーション次第では勘違いしそうな台詞だな

ついこの部屋に来た本題を忘れそうになるぜ

「あ ごめん」

だが残念ながら夜のお楽しみのために委員長の部屋に来たわけじゃない

「んじゃ 企画書はどこ？」

単刀直入に切り出す

「あ はい…これです…」

委員長は机の上に置いてあった紙を一枚俺に手渡した

「喫茶店…？」

その紙の一番上にはそう書いてあったが…

「…って なんで場所がプールサイドなんだ!？」

喫茶店なら普通に教室でやればいいのに

「武田君たちが 夏だし プールサイドがいい…って」

「…武田君”たち”？」

なんか嫌な予感が…

「うん…」

武田君と渋谷君とサトミさんが」

「ちよっ…あいつらが提案したのか!？」

「え…？そ　そうだけど…」

嫌な予感的中

あの我がクラスの誇れない祭バカ3人衆の提案した企画

しかもプールサイドで喫茶店

絶対何かやらかす気だろ…

「脱いだり…しないよな？」

「ふえ!？し　しないよ!!…多分」

多分!？

おいおいやめてくれ…

「水着とかも勘弁だぞ…？」

スク水 白スク 競泳水着 e t c …
みたいな感じにみんな違う水着にして…

…絶景かな絶景かな

…まあ個人的にはアリだが学園的にはダメだからな

残念だ

「あんま酷いと生徒会の制圧対象になるからな？
というか俺とサヨが生徒会なんだからあんまり派手なことやめてくれ…」

「あ あう…」

まあ気の弱い委員長に云ったって仕方ないか

委員長に止められるような祭バカ3人衆じゃないしな…

「まあ…一応企画書は受け取るよ」

「あ う…うん」

「んじゃ 用事はこれだけだしそろそろ帰るよ」

あんまり女の子の部屋に長居しちゃ色々とまずいだろうしね

もう夜もいい時間だし

「え…もう…行っちゃう…の？」

「えっ…？」

声が小さくてあまりよく聞き取れなかった

「な なんでもない…よ…！」

委員長は少し顔が紅くなっていた

「そうか？じゃあまたな委員長
おやすみ」

「あつ お…おやすみ」

俺は部屋を出てドアを閉めた

前を向くと同時にオートロックのかかる音がした

「私も…もう少し…
もう少し頑張らないと…な」

委員長の呟きが虚しく響いた

学園祭準備編 | 絶対領域は男のロマン

「改めて見ると…相変わらず意味不明な企画が多いな…」

俺とサヨは本校生徒会室で あれから一週間ちよいで集まった企画書を改めて確認していた

「ハセ君…これ…」

そういつてサヨが手に取った一枚の企画書

クラスは本校1ー4

企画名

『ドキドキ！？ハラハラ！！メイド喫茶』

紹介文

『学園内でもレベルの高い美少女達による甘あゝいひとときをあなたへ』

「…要注意だな」

「…ハセ君が絶妙な笑顔なのは私の気のせいかな？」

しまった…！！

伝説のポーカーフェイスとまで謳われたこの俺がメイド喫茶ごときで…

「きつ 気のせいだよ…！」

ささ 次っ 次行こう…！」

「へえー気のせいかなぁ

…追加料金でイケナイご奉仕だつてよ？」

「ぶっ…！！

こっ これはぜひ追加料金を払ってみたいとな

…って別にイケナイご奉仕をしてほしいわけじゃないぞ…！」

内容次第では営業中止命令を出さざるを得ないからな…！」

それにはやはり総会長代行である俺が直々に確かめなければな…！」

サヨがじと目で俺を見る

…そんな目で見るなよお…

そりゃ気になるじゃんか!!

メイド喫茶だぞ!?

全世界共通の男のロマンじゃねえか!!

「…さ 次いこうか」

何事もなかったようにサヨがもう一枚の企画書を差し出す

うう…男のロマンが…

まあ仕方ないからその企画書を見してみる

生物部の企画書

そういえば部活での企画もあつたな

「えーつと…生物部Presents!!
ありとあらゆる生物の解剖ショー?
…気味悪っ!!」

「でもほら これとか凄そうじゃない？」

サヨの指差す先を見ると

「目玉は天然本マグロの解剖ショー（の予定）」

解体ショーならぬ解剖ショーですか

しかも予定って…

手に入らなかったら中止なのかな？

…というか本マグロを買う予算なんてあるのか！？

しかも天然って…

…釣るとか？

いや…ま まさかね…

…というかもっと無難なのはないのか!?

そう思いながら企画書漁っていると

「露店系…

焼きそばにフランクフルト

この辺は真面目みたいだな?」

「あ でも その辺も…あんまり真面目じゃないっぽいよ?」

…は?

真面目じゃない焼きそばやフランクフルトがどこにあるんだよ

さすがにこれらは無茶のやりようがないだろ?

そう思って企画書を見直すと…

「『激辛焼きそばと激甘焼きそば
あなたはどっち?』

…いやいやいや 普通の焼きそばにしよっぜ…」

というか激辛はある程度予想がつくけど…
激甘って何なんだ！？

ソースが練乳？

野菜の代わりにフルーツとかか？

…そんなの食いたくねえよ

で フランクフルトは…

『ボディビル部による”男のフランクフルト”』

いや…何か間違ってる…

”ボディビル”と”男”と”フランクフルト”って単語が組み合わ
さると吐き気がするのは何故なんだ…！！

ってかボディビル部なんてあったのか！？

初耳だぜ…

ってか結局まともな企画は無いんか…

「どこも個性的だね…」

サヨも苦笑いだった

そんなこんなで企画書チェックは順調(?)に終わった

「さてーと

企画書の再チェックも済んだし俺達も見回りに行く？」

そういつて立ち上がるとタイミングよく生徒会室のドアが開いた

メイドさん…いいですよね↑

というかゴスロリ系が好きなんですよね

このスペースを利用して語ろうかと思ったんですが誰も聞きたくはなさそうなんでやめときます笑

でもリアルでゴスロリ少女に出会ったときは少々感動しました

というか…高校の友達でした

そのときなぜか視界が滲んだのをいまでも鮮明に覚えてます

あゝゴスロリ系が好きとは言いましたが…
いわゆるロリコン
幼女趣味ではありませんからご安心を

ちなみに自分も私服は基本的に白と黒で統一してます

…ほんとどうでもいい話だな笑

これからもしばらくは頑張って毎日更新で行く予定なので
未熟者ですがよろしくお願いしますね

「なんだ 本多か」

生徒会室に入ってきた本多は一枚の紙切れを机にたたき付けた

「おい 急にどうしたんだよ？」

そんな俺のセリフには答えずただひとこと

「…相当ナメられてるぞ」

とだけ言った

なんの事だかさっぱりだったが本多が持ってきた一枚の紙を見て不本意ながらも納得がいった

「ハセ君 これって…」

「…宣戦布告とは いい度胸じゃねえかよ」

その紙には

『長谷川附属生徒会長に告ぐ

学園祭の生徒会指揮権を直ちに現総会長に返還せよ

我々は貴様のような雑魚が指揮する生徒会に一切興味はない
怪我したくなければ退け

退かぬなら今後一切手加減はしない

暴徒部』

と あった

ちなみに暴徒部というのは表向きには存在しない部だ

生徒会側に対抗するために組まれたレジスタンスのようなものを
みんな暴徒部と呼んでいる

「畜生…完全にナメやがって…」

「…まあ当然だろう」

誰がどう見てもいまの生徒会は渋谷ひとりに玩ばれている
暴徒は退屈でならんのだろう」

「くっ…!!」

確かに本多の言う通りだ

あれから毎日のように渋谷は鬱陶しい悪戯を仕掛けてくる

はつきりいつてそれに生徒会は対応できてない

渋谷ひとりの独壇場に他の暴徒の出る幕もない状況だ

つまりこの宣戦布告は出番のない暴徒が痺れを切らして総会長を出せと言っているわけだ

くっ…どうすれば…
いったいどうすれば…？

俺とあの総会長との違いっていったいなんだ？

総会長と同じあんなやり方でしか暴徒は鎮圧できないというのか…？

俺は…嫌だ…！！

あんなやり方だけはやりたくない！！

だったらどうすれば…！？

「ちょっと…腹こしらえてくるよ…」

そう言って立ち上がる

悩むなら学食が1番だ

サヨが何かを言おうとしたが本多が制止した

…二人とも気遣いありがとな

サヨの不安そうな視線を背中に受け俺は学食へ向かった

「ふう……」

生徒会室から逃げるように学食へ来たものとてもじゃないが食欲がない……

あんなものまで送り付けられるとは……

これはもうプライド云々の問題じゃない

俺の意地ってモンをナメきつた暴徒共に見せ付けてやりたい

けど……どうやって……？

カラン と

目の前のアイスティーに浮かぶ氷がグラスを叩く音が響く

それは他の生徒の喧騒に掻き消されずに俺の耳に響いた

いまこの世界に俺と目の前のグラスしかないような―そんな錯覚に陥っていた

…その錯覚も　いまは聞きたい声に掻き消されたが―

「どうしたというのだ？同志長谷川よ
このようなところで油を売るとはとうとう降参か？」

「…敵方のトップの前にこのこと現れるとは　お前も墮ちたな
渋谷」

「それを言うなら仮にも生徒会側のトップがこんなところにひとり
で無防備に絶賛鬱状態になっている方が悪いのでは？」

「ちっ…」

ああ 渋谷の言う通りさ…

「おい 長谷川ー

せっかく親友の俺らが励ましに来てやったのにそれはないんじゃないの？」

「なんだ タケも居たのか」

こいつ 久しぶりに会った気がするな…

「俺には気付いてなかったのかよっ！！
それって酷くねー？

酷くね？長谷川ちゃん」

「寄るな キモいぞ」

「ガーン！！

せっかく励ましに…」

「はいはい ありがとな
俺ならこの通り大丈夫だから」

「…虚勢を張るとは　そこまで堕ちたか　同志よ」

「…なんとも言えよ
所詮俺は負け犬だ…」

「長谷川…」

「見損なつたぞ…!!
いつたい俺の知っているMY同志はどこへ行つたのだ!？」

「…いまの俺はお前らとバカやってた頃の俺じゃねえんだよ」

でも…確かにこんなのいつもの俺じゃない…

そんなことくらい…わかつてるのに

「なにを言うか…!

俺と…!武田と…!

校内を共に駆け回り生徒会のぐず共を相手に暴れ回った日々を忘れたのか…!

目の前の物事だけを考えて後先考えずに無茶を繰り返す…!
それがお前の真の姿ではないのか!？」

「……………」

ああ…そういえば…

あの頃は楽しかったな…

目の前しか見えてなくて…

バカやタケと無茶苦茶やってさ…

校内駆け回って

そのときが楽しけりやなんでもよくて

後先考えずに無茶してさ…

…後先考えずに？

目の前のことだけ…？

目の前の…こと…

いま 俺が やるべきこと…

「……………」

カラン と

再び氷がグラスの中で踊る

その音で俺の中の何かが目を覚ましたような気がした

忘れていたあの頃の自分

おもむろに立ち上がると椅子が派手な音を立てて倒れた

「長谷川…？」

タケが何か言った気がしたけど何て言ったのか気にならなかった

「はっ…俺も堕ちたな…」

俺はひとこと呟いて歩きだす

「…ありがとよ」

喧騒もなにも聞こえない

ただ さっきのバカの台詞が俺の脳内を駆け巡り 心を埋め尽くしていた

「なあ渋谷…これでよかったのか？」

「無論だ

奴が本気にならねば張り合いがなくて困る」

「ははっ まあな

ま 当日は俺も暴れたいしさ」

「安心しろ 武田

もう奴は本気になったから当日は楽しめろぞ

お前が最高に目立てるようなシナリオも用意済みだ」

「おう サンキュー

まああいつが本気になっても勝つのは俺達だけだな」

「なにを 当然だろ？」

「…で 渋谷」

「どうした？」

「これどうするよ？」

「ふむ アイスティーか
残すのももったいないから飲んでしまえ」

「だよな ラッキー」

賑やかな学食に武田がアイスティーをすすする音が響いた

学園祭準備編 | 以心伝心？（前書き）

実は今回500文字ジャストです

毎回短くてすみません

学園祭準備編 ― 以心伝心？

「あ…ハセ君…」

生徒会室に戻ってきた俺を見てサヨが声を漏らした

その手には憎き宣戦布告の内容が書かれた用紙

俺は無言でそれをサヨの手からひったくり盛大にビリビリに破り捨てた

「は　ハセ君！？」

突然の俺の行動に驚いたサヨが悲鳴に近い声をあげる

「サヨ　先に見回りに行つててくれ
用事が終われば俺もすぐに行くからさ」

「え…　あ　うん　わかったよ
でもハセ君　用事って…？」

「すぐにわかるよ

じゃ 俺 行ってくる」

「あつ…行っちゃった…

…でもなんか元気出たみたいでよかった…

…よし 私も行かなきゃ」

「仕方ないな…俺も行かねば」

「本多君も見回り行くの？

珍しいね」

「役員総動員にもしないとちとキツイぞ？」

「えっ？なんの話？」

「…そのうちわかる

他の役員にも連絡いれとけ

俺は先に行くからな」

「あ うん 待ってよ」

『…その約3分後だったかな？』

校内放送でハセ君が暴徒の勝負を真っ向から受けて立つことを宣言

それから2時間くらい暴動に近いお祭り騒ぎになった校内を鎮圧したのは言うまでもなく私たち生徒会側のメンバー

ほんとに後先考えてないんだから…

でもまあいつものハセ君に戻ったみたいだからとりあえず一件落着かな？

とか思っちゃう私でした

(サヨの日記より抜粋)『

学園祭準備編 | 以心伝心? (後書き)

関係ないですが

本日(2/17)大学入試の合否発表があり見事(?)合格しました

来年度から(このまま無事にいけば)大学生です

未熟な自分ですがこれからもよろしく願いします

学園祭準備編 | 世界は動き続けるから

『朝のニュースです
先日世界中を―…』

「ん…朝か…」

いつも通り いつものニュースキャスターの聞き慣れた声で目を覚
ます

今日も平凡な一日が始まるのだろう

…誰もがそう思いベッドから出るのだが決して平凡に一日が終わる
とは限らない

『日本区だけでなく世界中の経済にも甚大な被害が及ぶと予想され

各政府は「……」

ニュースによると

日本区に本社を置く某一流企業が倒産を宣言

世界規模での経済損失が予想されるとか

きつと誰もがいつまでもこの企業が世界で指折りの大企業として名を轟かせ続けるのだとそう思っていただろうに……

それでも倒産した

企業の社員にとってそれまで平凡だった日々が嘘のように一変するのだろう

いままで当然だったものが当たり前のように当然でなくなる

良くも悪くも世界は動き続ける

いままでの当たり前が当たり前でなくなる

それは誰にだって訪れるかもしれない

いつ訪れるかさえわからない

…はたしてそれを不幸だと思うか？

俺は…思わない

少なくともいまは

世の中は不公平 平等じゃない

そして世界は 運命は 時に残酷だ

しかしそれは万人に共通する

だから決して自分が世界一不幸だと嘆いてはいけないと思う

その変化を―運命を受け入れることができるかどうか

そしてその運命を乗り越えることができるかどうか

運命に立ち向かえるかどうか

昔の俺はまだまだ子供だった

不幸を嘆き あらゆるものを壊してきた

でも いまなら少しだけ…

「ふう…支度するか」

俺はそれを「運命を受け入れることができた気がする

周りのおかげで な

「さてと…今日の朝食はどうするかな？」

俺は時間を確認し 部屋を後にした

「お前はまた紅茶か
日本男児ならば日本茶を飲まんか!!」

「うるさいな…
パンには紅茶だろうが」

なんで俺は朝っぱらからバカに文句を言われなければいけないんだ
…?

「そうだぞ長谷川―
パンだけじゃ栄養が…」

「なんだ タケも居たのか」

「いや 気付けよ!!
つてか俺の扱い酷くね!? 酷くね長谷川ちゃん!!」

「まあ… タケだしな」

「同感だ 所詮武田だからな」

「お前ら…友達を大事にしようぜ…」

へこむタケを横目に俺は朝食のガーリックトーストを頬張る

「そつえばだが…前もそれを食べていたよな？」

それを見た渋谷がなんの脈絡もなく切り出す

「ん…？んっ
前っていつだ？」

とりあえず飲み込んでから聞き返す

「2週間ほど前の夜だな」

「2週間ほど前って言われてもなあ…
わりと頻繁にガーリックトースト食ってるし」

「お前の主成分はガーリックトーストかよ…」

「見誤るなよタケ 主成分は紅茶だ!!」

「威張って言うなよ…」

「まあ話を戻そうか
委員長と一緒に学食で食べていただろう？」

「…あー…ああ
そんなこともあったっけか？
…ってかなんで知ってたんだよ!!」

しかし渋谷は意味深な笑みを浮かべるだけだ

するとへこんでいたはずのタケが勢いよく起き上がった

「おい長谷川!!
お前委員長と一緒にメシ食ったのか!？」

そしてなぜか胸倉を捕まれる俺

… why?

「あ ああ… そうだけど…?」

「くーっ!!」

なんで俺を誘わなかったんだよ!!」

今度は肩をがっしり掴まれ身体を揺らされる

なんでといわれてもなあ…

別に俺が誘ったわけじゃないし

「それだけではないぞ 武田!!
そのあと長谷川は委員長の部屋に入っているのだ!!」

なっ… バラすなよ!!

「な なんですとー!!」

今度はタケが頭を抱えながら自分の身体をくねらせている

…気持ち悪う

というか渋谷はなんで知ってるんだ…？

「とりあえず落ち着けよ…」

「落ち着いていられるか！？
抜け駆けしやがって畜生！！
いつからだ！？いつからお前と委員長はデキていたんだ！！」

両手で机をバシバシ叩きながら叫ばないで下さい…

紅茶がグラスの中で波打ってるよ…

あ こぼれた

というか周りの視線が痛い…

ってかデキてるって…

話が飛躍しすぎだろ…

渋谷はこっちを見ながらニヤけてるしよ…

「そんなんじゃないよ…
ちよつと用事があつただけだから」

「くそっ…あの委員長がよもや長谷川の手に堕ちるとは…
いったいどんな手段を使つたんだ!!」

聞いちゃいねえよ…

「ゴリ押しか!?!言葉巧みにうまく誘い込んだのか!?!それともその指先で…」

「いい加減黙れ」

「ぐあっ…」

脳天に拳をくれてやった

タケはそのまま机に突っ伏した

「お前もいい加減にしてくれよ……」

「なに　ほんの冗談じゃないか」

お前が冗談のつもりでも

タケみたいな奴が本気だと信じ込むからやめてくれ……

「……だがこれだけは言っておこう」

「ん　なんだ？」

「お前にその気がなくとも向こうはお前をどう思っているのか考えたことはあるか？」

「…どういうことだ？」

「…やれやれ

これだから鈍感呼ばわりされるんだ

考えてみる お前の周りにいたい美少女が何人いると思っているんだ？」

「はあ…美少女ねえ…」

「…まあいい

だが 中途半端はいかんぞ
誰も幸せにならん」

「あ ああ…」

珍しく渋谷が真面目だ…！！

変なきのこでも食べたのか…？

「それともうひとつ」

「な なんだよ？」

「背後には気をつけろよ」

「はあ…？」

「いつ刺されるかわからんからな」

刺されるって…！！

俺何か悪いことしたか！？

「…鈍感とは時に罪作りだな」

悪いがまったくわからん…

「まあよい 用は済んだからな
ほら起きろ武田」

渋谷が揺するがタケは起きない

すると渋谷はタケの耳元で何かを囁き…

…一瞬でタケは起きた!!

「え ちょ…おい!!」

「はっは!!長谷川!!
ぜってえ負けねえからな!!
委員長は俺のもんだ!!」

「…まあ委員長はお前に微塵も興味を抱いてないがな」

「がーん」

そして再び戦闘不能になるタケ

…なんなんだ？

「お前…何を言ったんだ？」

「なに 委員長はまだフリーでお前にもチャンスがあると言っただ

けだ」

「そ　そうか…」

そして現実を突き付けられて燃え尽きたと…

ああ…哀れなタケ

ガーリックトースト1枚恵んでやるよ

机に突っ伏してるタケの右手にそれを握らせた

…完璧だな

「では俺はこの辺で失礼するよ
まだいろいろと仕込みをせねばなんのでな
さらばだ　長谷川よ!」

そう言い終わるが早いか　バカは颯爽と去っていった

あんま派手なことは控えてくれ…

「…というか こいつどうしようっ」

机に突っ伏したままのタケを一瞥

1 放置

2 いたずらを加えて放置

3 叩き起こす

よし 2でいこう!!

さて…どうするか？

あ そうだ!!

カウンターで紙とペンを借りてきた

キュッキュッ

そしてそれを背中に貼り付ける

「…で　いつか？」

『そこのお嬢ちゃん　近づくと孕ませるぜい？ぐえっふえっふえ』

やばい…完璧だ…

さて…朝食もったしさっさと見回りに行きますかね

学園祭まであと1週間ちよつとか…

このまま平凡に迎えられるかな…？

…努力次第だよな

「さて…んじゃ行きますか」

俺は紅茶を飲み干し 立ち上がった

このあと 背中に貼紙を貼ったまま校内をふらついていたタケは生徒会副担当教師のうすらハゲに見付かり夜まで説教を受けたとか

ちよつとやり過ぎたかな…

まあいいか タケだし

「…ふと 思っただけだよ」

早めの昼食をとるためにいつものメンバーと学食へ移動してる最中にふとユキが口を開いた

「最近時間が進むのがすごい早いというか…」

気付いたらいつの間にか寝てて起きたら夜中になってるみたいなことがよくあるんだけど…なんでかしら?」

なんでかしら?と言われてもねえ

そりゃ俺たちが強制的に気絶させてるわけですよ隊長

というかいつになったら気付くのやら…

「さあ? お前疲れてるんじゃないか?」

まあバレても困るから適当にごまかしておく

「確かに最近学園祭の準備で忙しいけど…」

冗談はよしてくれよ

実際お前は何もやってないじゃないか！！

邪魔だし面倒だし

だからいつもタイミングを見計らって気絶させられてるじゃないか

というかほんとによく死なないよな…

「ここ数週間があっという間だったわ」

そりゃそうだ

毎日何時間も気絶してたんだから

「でも少し不思議なのよね」

「不思議？何がだよ？」

とりあえず適当に相槌をいれておく

まあ何を聞かれようと適当にごまかすんだけど…

そろそろ気付く頃か…？

「なんか時々身体中に電流が流れるような感覚に襲われるような気が…」

まじかよ…ほんとに気付いちまったのか！？

俺たちの間に緊張が走る

できれば学園祭当日までは気付かないでいて欲しかったんだが…

「ゆ ゆゆゆユキ先輩！！」

そ そそ それって病気とかじゃないですか！？？」

ちょ…まひる…

ごまかすつもりなんだろうけどテンパリ過ぎて逆に怪しいって…!!

というか演技下手だな…

「そ そうだよ…!!

たっ たた 体調崩したら大変だしね!?

ねえハセ君!!」

サヨも演技下手なのかよ!!

「あ…ああ…」

おいおい…

こりゃバレたな…

ああ…

当日どつやってユキの身動き封じようか…

畜生…余計な仕事増やしやがって

「そうよね…

病気だったら怖いよね…」

ほら気付いて―…あれ？

気付いて…ない？

って えっ！？

信じてた――！！

どれだけ鈍感なんだユキは…

や まあ好都合なんだがな…

さすがに哀れだ…

「体調悪いんだったら休んでこいよ
お前がいなくなる分はみんなでカバーするからよ」

とりあえず優しい言葉をかけておく

まあそもそもユキの仕事なんて最初から存在しないけどな

「…長谷川がそこまで言うなら休んできてもいいわよ…」

「よし みんなのためだ!!
ぜひ休んでこい!!」

「なんで私が休んでみんなのためになるのよ?
…まあいいわ 休んでくる」

そう言い残して

ユキは寮の方へとひとり歩いて行った

ユキが角を曲がった途端に3人がガッツポーズを決めた

さらばお荷物 また会う日まで

学園祭準備編 ― やんやんでれでれ？

「もう少しでバレそうだったね」

「ほんとですよ先輩―

私たちの名演技のおかげですよ？
感謝してくださいっ！！」

名演技じゃなくて見事な”迷”演技だったよ…

「はあ…

あんな演技で騙せるのはユキとタケくらいだよ」

「あーっ 先輩

なんでそういうこと言っんですかー？

せっかく私たちのおかげでごまかせたのに」

「大根役者が何を言うか！！

むしろバレるところだったよ

というか普通の人間ならバレてるよ！！」

「もー いいじゃない

結局バレなかったんだからさ」

サヨもどこか得意げだった

「はいはい……」

そういつて俺は紅茶を口に含んだ

今日はマイナーなキャラメルティーだ

好き嫌いが分かれるこれはあまり人気商品ではないらしい

「って先輩 また紅茶ですかー？

カフェイン摂りすぎですよ

夜眠れなくなっちゃいます」

「しかもまたパンだし…

ハセ君バランス悪いよ？」

サヨが俺の手元を見て言う

「いーんだよ　おいしいんだからさ」

実際にここのパンはおいしい

それに学食のお姉さんと結構親しいから予約すれば好きな時間に好きなパンを焼いてくれる

俺の特権だ

「それにハセ君はやけに学食のお姉さんと親しげだよね？」

「ん？　ああ　そうだけど？」

ちょうどサヨがその話題を出した

しかしこれがどうやら禁止ワードだったみたいだ…

「ちよつと先輩！！」

誰ですかその”学食のお姉さん”って！！

先輩とどういう関係なんですか!!」

なぜかまひるが叫ぶ

学食の生徒が一斉にこっちを見る

あれ…?

なんか似たようなことが今朝にもあった気がするんだけど…

「まひるちゃん落ち着いて!」

サヨが落ち着かせようとする

「これが落ち着いていられますか!?
どの女ですか!!」

私の先輩に手出ししようなんて考えてる女は!!」

「ちょ 急に何を言い出すのさ!」

さすがの俺もこれには焦る

というか視線が痛い…

「えっ そうだったの!？」

サヨが驚きの声を上げる

というか勝手に納得しないで下さい

ああ…周りの視線が痛い…

「先輩!!どつちなんですか!？」

私とその女 どつちが1番なんですか!？」

私ですよね?もちろん私ですよね!？」

私だと言ってください!!」

普段からは想像できないくらい興奮状態(?)のまひるは机をバンバン叩いている

…お願いだから落ち着こうか?

「学食のお姉さんは まあ…ちょっと親しいだけだし…」

「ちょっとですか？」

ほんとにちょっとですか？」

「や えっと…結構…かな？」

気圧されて正直に答えてしまう俺

「どつちなんですか！！」

はつきりしてくださいよ！！」

これは…ちょっと大変なことになったかもな…

サヨの何気ないひとことから始まったからか サヨはいかにも申し訳なさそうな表情をしている

参ったな…

紅茶を飲みながら頭をかいていると助け船は意外なところからやって来た

遠くで爆発音が響いた後にイヤホンから響く生徒会役員の声

『代行！！附属生徒会室付近で爆発が発生した模様
至急応援をお願いします！！』

「…マジかよ！！仕方ない 行くぞ！！」

しかしこの状況から脱出できるため
内心ありがたかった

「あつ まだ返事聞いてないですよー！！」

「ほら 仕事仕事」

「あつ…先輩…」

思わず駄々をこねるまひるの手を取り席を立つ

まひるの顔が真っ赤になっている

「サヨも行くぞ」

「…私の手は握ってくれないんだね」

「ん？ 何か言ったか？」

イヤホンから聞こえる他の役員の声のせいでよく聞こえなかった

「…なんでもないよーだ」

サヨは少し拗ねたように言った

「ほら先輩早く行きましょーよ!!」

いつの間にか上機嫌になっているまひるに手を引っ張られる

「あ ああ……」

まひるが俺の手を握ったまま学食を駆ける

なんだかさつきと立場が逆転したみたいだ

「次は絶対にはつきりと私が1番だっって言ってもらいますからね?」

まひるはどこか楽しそうにそう言った

…俺に選択権はないのか?

まあどうせ俺は曖昧にごまかすんだろうけどな…

そう思いながら胸元で揺れる金色を握った

『結局爆発騒動の原因は花火

だがしかし

花火部の証言によると昨夜から今朝にかけて部室から花火が盗まれ
その花火の一部が今回使われたとのこと

また今回使われなかったが盗まれた花火の中には結構特殊なものも
あるとのこと

きたる学園祭に向け一層の警戒が必要になりそうだ

一連の騒動の犯人は暴徒部であると推測される

明日からはその裏付けも行うことになりそうだ

（本多の手記より抜粋）
『

学園祭準備編 ― やんやんでれでれ？（後書き）

なんか気付いたらまひるがヤンデレ風味になってきてるような…

そんな予定じゃなかったんだけどね笑

まあこれもアリかな？
↑

「ったくよお…なんでこの忙しい時期に…」

当然誰も俺の独り言に答えてはくれない

夕焼けが綺麗に空を色付ける時間帯

俺はなぜかひとりで寮の屋上目指して階段を上っていた

「夕飯食べようと思ってたのにな…
ほんとタイミング悪いぜ畜生…」

20分ほど前に俺は夕飯を食べるためひとり学食へ向かっていた

すると廊下で数人の生徒と話をしていた教師になぜか呼び止められ
こう言われた

『悪いけどさ 寮の屋上に行つてきてくれないかな?』

話はこちらだ

その教師に相談していた生徒たちの部屋は寮の最上階らしい

そしてここ最近屋上で物音がしている気がするので不気味に思つて
教師に相談していたところだった

そこでたまたま通り掛かった俺は見てきてくれるように頼まれた

というわけだ

ちなみに

寮の屋上は基本的に立入禁止

だから余計不安だとか

本来 普通の生徒のＩＤで開けることのできる鍵は自分の部屋と自分の教室 自分の部活の部室や更衣室くらいだ

教師や俺のようなごく一部の生徒会役員は学園の敷地内すべての鍵を開けることができる

… まあ解錠した記録が残るから―例えば俺が女子更衣室にこっそり忍び込むことはできても俺が解錠したことがバレバレなわけで―悪用はできないけどな

「さて… 着いたか」

ちなみに俺は一回も寮の屋上に来たことはない

… だって用事がないし

なにが好きでわざわざ殺風景な寮の屋上に来にやなんのだ？

こんなところに来るやつはよっぽどの物好きしかいねえよ

…あと暴徒か

いや でも寮内での暴徒行為は数少ない禁止項目だ

それを破ると…一般社会で言う極刑

誰も破ったことはないが 破ればおそらく数ヶ月”お小遣”がなくなるだろう

…つまり食事すら摂れなくなる

だからまあここに暴徒はいないだろうな…

…というか鍵がかかってるから普通の生徒じゃここに入れないしな

ピッ という電子音のあとに鍵の開く音がした

「さて…何がでるかな…？」

最悪ただ野鳥が巣を作ってるだけかも知れない

そしたらあの教師に俺の夕飯を奢らせてやる！！

ギィ… と扉が音を立てて開く

そこには…ただ綺麗な夕日と赤く染まりつつある空があるだけだった

「…やっぱ誰も居ねえじゃん」

ため息混じりの呟きが空しく夕焼けに溶けた

「よっしゃ 今夜は奢りだあー…って 待てよ…あれはなんだ…？」

屋上の片隅に寮の部屋より少し大きいくらいの建造物

…しかも明かりがついてる！！

誰か居るのか…！？

とりあえず近付く

「……………」

静かだ、物音はしない

でもやっぱり明かりがついている

…突入するか？

それとも応援を呼ぶか？

「…いや 突入だ」

俺は誰にも聞こえないくらいの声で呟いた

このときはすっかり夕飯のことを忘れていた

ドアノブに手をかけ そつと回した

「……………ん？」

ドアの向こうに側はなぜかもう一枚ドアがあり
ただ狭いだけの空間だった

「……………んん？」

そしてなぜか小さな靴がちょこんと置いてあること以外その空間に
は何もなかった

…って 小さな靴！？

子供？いや…女子生徒か？

とりあえずもう一枚のドアの先が気になったのでその先に行くことにした

ドアノブを握り 回す

「……………」

今度はなぜか望遠鏡が俺を出迎えてくれた

絶賛意味不明だ

「望遠鏡…？」

吸い寄せられるように部屋の中に進む

念のため靴は脱いできた

その部屋は予想通り普通の部屋より広がったが…

部屋の片隅にある望遠鏡だったりよくわからない物のせいで普通の部屋とあまり変わらない広さに感じられた

「暴徒部のアジト…ってわけでもなさそうだな…」

よくわからない物とかがあるが 暴徒部のアジトというより…普段から誰かがここで生活しているような雰囲気の部屋だな

「結局ここはなんなんだ…？」

独り言を呟き 頭をかくと

この部屋に入る前に小さな靴があったことを思い出す

「靴…ってことは…誰か居るんだよね？」

サイズの女子生徒が

そう思っふと足元に視線をやると――

「…って えっ！？」

そこには…なぜか手があった

というか女の子が仰向けに倒れていた

床に

…なぜかバスローブ姿で

盛大に意味不明だ

よし 状況確認をしようか

生徒の依頼で屋上に来た

屋上には誰も居なかったが明かりのついた建造物があったので潜入

建造物の中には望遠鏡や よくわからない物とかがあり誰かが生活
してるような雰囲気もある

いま俺の足元にバスローブ姿の女の子が倒れている

確認終了

盛大に絶賛意味不明だ

「
…おい 大丈夫か？」

とりあえず声をかけてみる

…反応無し

呼吸は？

「
…ちゃんとしてるな」

大きな胸が規則正しく上下している

…大きな胸が

…バスローブ1枚(?)で隠された大きな胸が

いかにいかに…

そんな場合じゃない

とりあえず目のやり場に困ったから顔をよく見てみる

「見たこと…ないよな?…っ!？」

近くにあった机に手をつく

一瞬めまいがしたからだ

そういえば夕飯食ってないからなあ…

「まあいいか

とりあえずさつさと帰りたいけど…」

再び顔をよく見てみる

童顔だけど…寮にいるんだから15歳以上だよな？

…胸の発育も素晴らしいし

…いかにいかに

どうしても意識が胸にいつちまう

身体をよく見てみる

身長は…まひるより低いんじゃないか？

線が細くて―胸がやたら大きい

胸もまひる並だな…

「…合格」

…………俺はいつたい何をしてるんだ？

「とっ とりあえず…風邪ひかないようにしてやらないとな…」

さすがに夏とはいえバスローブ姿で床に倒れてちゃ風邪ひいてもおかしくないしな

というかよく見たら髪がまだ湿ってるような…？

湯上がり？

…まあいいや　とりあえず何か掛けてあげないとな

…とは言え　周りに適した物がない

女の子の物と思われる服を見付けたが…さすがに俺が着せてあげるわけにもいかないしな

かといってこのまま放置も色々とマズイ

…そう　色々とマズイ

「…タオル乗っけとくか？」

服の近くにあったタオルを2枚ずつ女の子の胸部と下半身にかける

…これで胸部と下半身を何度もチラ見しなくてすむ

「……………俺はいつたい何やってんだ…？」

ふと自分がバカらしく思えた

…というかバカだ

目の前には仰向けで倒れているバスローブ姿の女の子

胸部と下半身だけ不自然にタオルがかけてある

「…はあー」

いったいどうしたらいいんだ…？

…いつそ何も見なかったフリをして立ち去るか？

あ ダメだ

俺が屋上の鍵を開けたことが記録されちゃってるじゃん

退路 無し

「どっしょよ…？」

俺は悩み続けていたが…俺の意思とは無関係に時間は流れる

そして俺の悩みは…時間が解決してくれた

「ん…っ ふぁ…っ
」

…えっ まさか

「んっ…ふぁ？おにーさん…誰？」

そっ 最悪の展開を迎えて

…よし もう一度状況確認を試みようか

頼まれて屋上の様子を見に来た

しかし誰も居なかった

そのかわり謎の建造物を発見

建造物の中には望遠鏡やらよくわからない物やらがいっぱい

そして俺の足元でバスロープ姿の女の子が仰向けで倒れていた

そして女の子が覚醒

確認終了

現状 修羅場度MAX!!

「おにーさん誰？」

ぼんやりとした表情の女の子は再び同じ問いを俺にした

「えっ…と

と通りすがりの旅商人でして…」

とっさに出たバレバレな言い訳を言いながらもみてをしてみた

自分の予期せぬ出来事への対応能力の低さに我ながら涙が出るよ…

「どこかで会ったことがあると思ったら おにーさん旅商人なのかあ
たいへんだねえ？」

…そしてまさかそのままボケられるとは思っても見なかった

「悪い 「冗談だ」

「そーかあ 「冗談なのかあ
るーは綺麗な絨毯が欲しいなあ」

そして満面の笑みで盛大にボケる

「いや だから 旅商人じゃないよ…」

この子は話を聞いていないのだろうか…？

「えっ 絨毯ないのお？

あっ でも絨毯なんて置く場所ないやあ
あははっ」

聞いているのか
理解出来てないのか
ただのバカなのか

とりあえず会話は成り立ってないようだ

「そういえば　るーって君の名前？」

「そうだよお

るーはるーなのっ」

よく見ると女の子の瞳はルビーのような輝きを持ち　髪はアッシュ
ブロンド…と言うのかな？
とにかく生粋の日本人ではないようだ

まあいまでは珍しくない

日本がアメリカなどの環太平洋の国々との共同国家になってからも
うずいぶんと年月が経っている

国際結婚という言葉も既に死語に等しいほど使われない

いまでは国際結婚が当然
といった世界だからだ

とは言えその瞳と髪は特徴的だった

きつとるーという名前もルーシーとかルイスとかそういう感じの名前なんだろうな

「…で 君はここでなにをしてるの？」

…バスローブ姿で

「えつとねえ 寝てたよお？」

寝てたのかい！！

てっきり気絶とかなんかだと思ってたよ

なんか心配して損した気分…

「…で　なんでバスローブ姿なの？」

至極当然の問い掛けを試みる

「るーがバスローブ姿？」

…あ　ほんとだあ　えへへ？」

どうやらバスローブ姿だということを忘れていたらしい

まったく意味がわからん

そして警戒心がまったくない

「それでさあ

結局おにーさん誰だっけえ？」

顎に手をあて考える仕種をする

…なぜか振り出しに戻ってしまった

「…俺は附属生徒会長の長谷川って言うんだけど」

もうめんどくさいから素直に話した

「せーとかいちょお？

生徒会長！！

だからどうかで見たことあると思ったのかぁ？」

語尾が疑問形なのはなぜ？

そして勝手に納得しているし…

…感覚がよくわからんよ

「…やっと見付けた」

「ん？いまなんて？」

しかし彼女は俺の言葉をまったく気にする様子もなく

「生徒会長って大変だよねぇ？」

と尋ねてきた

「まあ…そうだけどさ」

「じゃあるーがお手伝いするよぉ!!
何かあったら頼ってねっ」

「あ…ああ」

話が急展開過ぎてついていけない…

なんなんだこの子は…?

「あっ!!」

「どうかしたか?」

「お腹すいたぁ!!」

…さいですか

そうだね 俺も君のせいで盛大に空腹だよ…

「おにーさんもお腹すいたのぉ？」

俺の表情を読み取ったのか 彼女が尋ねる

「まあ…夕飯食べてないし」

学食に行こうとしてたところを捕まったからね

「じゃあねえ…るーがご飯作ってあげるよぉ」

「…え？」

「だからおにーさんは
そこに座って待っててねえ？」

そう言って部屋の奥に消える

だがしかしBut無視してとりあえずついていく

「わぁ びっくりしたよお
待っててって言ったのにい」

振り返ったるー子（勝手に命名）が驚く

「や まぁ気にするな
というか 料理ってここで？」

いったいこの部屋はなんなんだ…？

「そうだよお？」

いつもーはここで飯作ってるのぉ」

いつも…ここで？

「…そもそも この部屋って何なの？」

ストレートに聞いてみた

「この部屋？」

「ーの部屋だよぉ？」

「ー子の部屋？」

少女はさらっと言った

「ーはこの部屋で生活してるのぉ」

少女は作業を続けながら言った

「ーはねえ…星が好きなのぉ」

「星…？」

「そうだよっ

だから屋上に住んでるのぉ」

「あの望遠鏡とかもそのために？」

「そーだよ

綺麗に見えるんだあ…

まあ学園の備品だけどねえ」

「へえ…

屋上に誰か住んでるなんて知らなかったな」

「立入禁止だしねえ」

台所からいいにおいがしてきた

「…あれえ？

そっいえばおにーさんどうやって鍵開けたのぉ？」

いまさら気付いたらしい

「俺生徒会長だからさ 鍵なら全部開けれるよ」

「ほえ」

やっぱりおにーさんはすごいねえ」

そうこうしているうちに料理が出来たらしい

「はい おにーさん」

俺の目の前に置かれたのはフレンチトースト

「紅茶も淹れますねえ」

そして目の前に湯気を立てるマグカップを置かれる

…夏真っ盛りだよな

「いただきまあすう」

そんな俺をよそに少女は紅茶を一口口に含んだ

仕方ないから俺も紅茶を口に含む

「……………!？」

その瞬間俺は…戦慄した

「う…うまい…」

「ほんとあ？」

「ああ…本当だ」

学食の紅茶は美味しいと評判だ

実際俺も美味しいと思うし よく飲む

だが…彼女の淹れた紅茶は別格だった

…ものすごく熱かったが

続いてフレンチトーストを一口

「……………!？」

こ…これは…

「…うまい」

やつのことで俺の口から出た感想は小学生レベルのものだったが
…他に表現できる言葉が見つからない

それくらい美味しかった

紅茶といいフレンチトーストといい料理の腕前は確かみたいだ

簡単な料理こそ 差がでるものだ

…ものすごく熱かったがな

「嬉しいなあ…初めて褒めてもらえたよお」

「えっ…そうなの？」

ものすごく意外だ

「こっちに来てから初めて誰かのご飯食べたからねっ」

「あっ…そうか…」

そう言った彼女はどこか淋しげだった

こっちに来てからは…かあ…

「ごちそうさま 美味しかったよ」

「ありがとうねっ 一緒に食べてくれて」

まあ成り行きだったけどな

「明日は何かいいかなあ？」

「…明日？」

「そうだよお 明日の夜ご飯
あっ…朝も一緒に食べるう？」

いったいどこからそんな話が？

まあ美味しいんだけどね

「俺明日も来るの？」

「えっ 来ないのお!？」

どうやら来る前提だったようだ

「……………」

でも 淋しそうだったよな…

「…毎日は無理だけど時々なら顔出すよ…?」

その瞬間 笑顔が弾けた

「本当につ？」

じゃあ毎日用意して待つてるよお」

いや だから…毎日は無理だって…

「星…綺麗だな」

「綺麗だよねっ」

なぜかそのあと俺たちは屋上で星空を眺めていた

「嬉しいなあ…」

おにーさんと一緒に星空が見れて」

きつとずっとひとり淋しい思いをしていたのだろう

そう思うともう少しだけでも一緒に居てあげたいと思った

「星はねっ　夢なんだよぉ？」

「夢…？」

「そうだよっ　星の数だけ人がいて
その数だけ夢があるのっ」

確かにきつと星は見えないだけで何億とあるだろう

…いや　それ以上にもっとか

「だからーは星を見るの…
あの人の夢が叶いますようにってねっ」

るー子が遠くを見る

「けどねえ…夢は叶わないかもしれないんだよねっ…
それに醒めない夢はないんだぁ…」

おそらく寝てるときに見る夢と想い描く夢の両方を言ってるのだろう

「おにーさんもいつかは目醒めちゃうんだよねっ…
でも…まだ大丈夫だよっ」

「……………」

るー子が独り言のように言う

「今日はありがとーね
また…来てくれるよねっ？」

ふと少女が俺に寄り掛かって尋ねる

「…ああ 来るよ」

根拠はないけど…それでもきつと俺はまたここに来るような気がした

「絶対だよお？」

そっいつて俺から離れ 手を振った

それに応え 俺も手を振る

…バスローブ姿の少女に

学園祭準備編 — 通常の3倍…いや100倍くらい

「…結局何だったんだろうな？」

屋上に住まう謎の少女と別れた後 俺は学食に向かっていた

屋上でフレンチトーストと紅茶を頂いたが…さすがに朝まではもたないと思ったので夜食用にパンでも買おうとしたからだ

時間を確認すると22:00を少し回ったあたりだった

思った以上に屋上で時間を費やしたらしい

「ふうー…」

何気なく溜め息をつくと前方から聞き慣れた声が聞こえた

「あーっ 先輩

どこ行つてたんですかー？探したんですよ？」

近付いて来る見知った顔

なぜか少しふらついているように見える

「ん？まひるか…どうした？」

近付いてくる少女に問う

「何となーく一緒に夜ご飯をと思ってたんですけど…先輩がどこを探しても見付からなくて困ってたんですよー
おかげで腹ぺこですよー先輩」

壁に手を付きもう片方でお腹を押さえる

何となく一緒に食べるために俺をずっと探してたのか…

相変わらず難儀だな…

「もーほんとにどこに行つて—」

まひるは俺の目の前に来た途端になぜか言葉を止めた

「…どこに行つてたんですか」

そしてなぜか急にトーンの低い声で問い掛ける

…怖い

「えっ…？どこつて…屋上？」

急に変わる態度に戸惑い 何故か疑問形になる

「…女のニオイがする」

「…はい？」

「先輩の身体から女のニオイがします」

「えつと…」

俺は屋上での出来事を思い出す

とつさに冷や汗が出てきた

…というかニオイって……

普通の人間の嗅覚じゃわからんだろ…

「…私が必死に先輩を探している間　先輩はずっと他の女と屋上にいたんですね…」

さっきとは変わり今度はいかにも泣きだしそうな声色になる

「いや…その…別にそういうわけじゃ…」

必死に状況を説明しようと試みる　が

「私は…あの時からずっと先輩のことしか見てないのに…
やっぱり先輩にとって私は特別でも何でもないただの生徒なんですか？
それとも…忘れてるんですかね…」

どこか思い詰めた表情で俺に問い掛けるが　後半はよく聞こえなかった

…とても説得できそうにないな

どうしたらいいのか考えていると…しばらくの沈黙の後まひるがふと口を開く

「とりあえず学食に行きませんかー？」

それはいつもの声色に戻っていた

「そ　そうだな…」

まあ俺も行くつもりだったし

「もちろん先輩の奢りですからね？」

「まあ…別にいいけど…」

なんか悪いことをしたような感じだし　奢りくらい痛くはないか…

「ふたりつきりになる機会なんてなかなかないですからねー
このチャンスで一氣に先輩を落としますからっ！！」

表情や言動はいつものまひるそのものだったけど…さっき見せた淋
しげな表情が俺の頭からしばらく離れなかった

「…で　なんで屋上なんかにいたんですかー？」

席に着くなり早速と言わんばかりに詰め寄られる

「いや…まあ　ちょっと頼まれてね…」

「へえー　誰に頼まれたんですかー？」

「誰って…知らない女子生徒にだけど」

そう俺が言った途端まひるが持っていたフォークを落とした

「知らない女だったんですか！？」

「え　うん　まあ…屋上に行ってくれて頼まれてさ」

「し　知らない女に…」

そして小刻みに震えるまひる

「…不潔です！！不純です！！この私を差し置いて知らない女なんて…」

…あれ？

もしかしてなにか勘違いしてる？

「あ いや 屋上にはひとりで行ったよ？」

「えっ？」

素っ頓狂な声をあげるまひる

盛大に勘違いしてたようだ

「いや なんかね

屋上で物音がするっていうからさ 見に行ってくれて頼まれて」

「あ ああー そうだったんですかー」

どうやら誤解は解けたみたいだ

「…なーんて 騙されるとでも?」

「…えっ?」

…前言撤回

「…私の鼻はごまかせませんよ
先輩から漂う女のニオイはもつとべつたりとした感じなんです!!
そんなさらつとした感じじゃないんです!!」

…だからどんな嗅覚してんだよ

「もつとこう…抱き合ったり…寄り添ったり…
こっ これ以上は大人の都合で言えませんが…
とにかく!!」

絶対そんなようなことがあつたはずですよ!!
あつたに決まってます!!」

まあ…確かに寄り添われたな

抱き合ったり大人の都合で言えないようなことは特にはなかったが

…相手がバスローブ姿だったこと以外は問題ない

「黙っちゃうつてことはそういうことなんですね…」

再び声のトーンが落ちる

「私 そんなに魅力ないですか…?」

ふとまひるが呟く

「いやいや…そんなことないよ」

まひるのことは決して嫌いじゃない

自分を好いてくれる可愛い後輩

スタイルも人気も抜群

…嫌いなわけではない

…だけど

胸元の金色が光る

「ありがとう…先輩」

俺が奢ったパスタを食べ終わったまひるが笑顔を作る

けどその笑顔はさっきの淋しげな表情とどこか重なって見えた

「きっと…先輩は覚えてないんですよ…？」

「えっ…？」

「…私と初めて会った時のことです」

初めて会ったとき…？

「入学式の話？

それとも…その翌日の話？」

入学式の翌日

彼女は附属生徒会室に来るなり『私を生徒会に入れて下さい！！』

と 大声で叫んだのだ

俺が聞いた話によると―入学式で暴徒を鎮圧する生徒会役員に憧れを抱いたんだとか

「やっぱり…覚えてないですよね…あんな昔のことなんて…」

声が小さくて聞こえなかったがどうやら違ったらしい

彼女はどこか遠い目をしていた

「いまの私は…あの時と比べられないくらい幸せです」

「……………」

彼女の言ってることがさっぱりわからない

俺は…なにか忘れているのだろうか？

「先輩…私はいつまでも先輩だけを見ていますから…だからお願いです」

そっいつてまひるは俺の手を取る

「いつまでも…いつまでも…変わらない先輩で居続けて下さい」

不安そうに懇願する彼女は儚げで―

どんな意味なのかはわからなかったが―どことなく彼女の表情が真剣だったので…俺は何も聞き返すことなくただ彼女の手を強く握り返し…黙って頷いた

「異常はねえか？」

『大丈夫です』

「よし 撤収してくれ
みんな明日も頼んだぞ」

「ふう…終わったか…」

「何言ってるの？明日が本番だよ」

「うう…」

俺の安堵感たつぷりのため息はサヨの一言で掻き消された

P M 1 0 : 0 0

学園祭に向け最後の校内見回りが終わった

今日の前夜祭の最中からずっと休み無しで校内を駆け回ったのだからため息のひとつくらいかせて欲しいところだ

「…目立った動き 無かったね」

毎年前夜祭也大騒ぎになるのに今日は大きな騒動はなかった

騒動といえば…テンションの上がり過ぎで騒いでいる生徒を注意する程度

…嵐の前の静けさとしか考えられいよな

「結局渋谷も姿をくらましたままかよ…」

超要注意人物である渋谷を俺とサヨで見張るつもりだったが…どこ

を探しても見付からなかった

「きつと明日の準備だよね…」

「きつと じゃなくて 確実に だな…」

それもそうだね
とサヨが笑う

結局以前花火部から盗まれた花火も見付かってない

万全の体制で挑みたかったが不安要素がありすぎる…

というか不安要素しか無かった

暴徒や渋谷たちは何を仕掛けてくるのか？

盗まれた花火の使い道は？

第三勢力の登場の有無は？

そもそも生徒会側に勝ち目は？

…考えるだけ無駄に思えた

「
…大丈夫？」

思考の海をさまよっていた俺は現実に取り戻される

不安いっぱい現実

「とりあえず…メシ行くか？」

もちろん学食に

当然いままで夕飯を食べるひまは無かったため少なくとも俺は空腹感がハンパない

「あーハセ君には悪いけど 私部屋で食べようと思っててさ 買ったパンを部屋に置いてあるんだよね」

といって苦笑い

「じゃあ仕方ねえな ひとりで行くわ」

「んー ごめんね」

「いや 気にすんなって
メシくらいいつでも一緒に食えるだろ？」

するとなぜかサヨは頬を赤らめ 一呼吸おいてから頷いた

「じゃ また明日ね」

「おう 寝坊すんなよ？」

「もう ハセ君こそね」

そういつて笑いながらサヨは部屋に戻って行った

「…学食行くか」

サヨの背中が見えなくなってから俺はひとつため息をついて呟いた

そして

「…あん？あれって…」

振り返った先に見覚えのある髪色を見つけた

学園祭準備編 ― 百合は好きだけど b y 作者（前書き）

そつえば昨日で連載開始から1ヶ月でした

いやあ…時が経つのは早いなあ…（しみじみ

「いやいやあ

おにーさんが来てくれなかったらーはまたひとりでご飯でしたよ
お」

あれから何故か学食に行かずに俺は屋上に来ていた

それは廊下で見覚えのあるアッシュブロンドを見付けたからだ

そして俺はテーブルにつき キッチンで忙しく動くアッシュブロ
ンドを眺めていた

俺の視線の先は相変わらず特徴的な髪色と―相変わらず不思議な服
装の少女

「あと少しだからねえ」

エプロン姿が振り返る

エプロンのどこが不思議だって？

エプロンは普通だよ？

…問題はその下

なんで…なんでスク水なんだ？

しかも廊下で会ったときからずっとスク水+エプロン

…意味わからん

というか色々危険だ…

そう 色々と

「できましたあ」

今日はどうやら白身魚のムニエルのようだ

「お魚好きかなあ？」

「ん ああ 好きだよ？」

「よかったあ
るーもお魚好きなのお」

そういつて一口

「…いただきます」

俺もそれに続く

「…うまつ　なんて魚？」

「んーとお…くじら」

そうかそうか　鯨かあ…

なかなか珍しいものを使いましたなあ…

「…つてくじらあ！？」

ちょっと待て

鯨って白身魚か？

そもそも魚なのか！？

…というか

「現在捕鯨は禁止だから鯨肉は手に入らんぞ」

「ほげー？…ほげえ？」

いや そんなわからないを擬音にしたような音を出さないでください

「ああ ホゲイかあ

おにーさんそつちなのお？」

「…そつち？」

イマイチよくわからんが…

「ホモとかゲイ」

「……………ああそうか！！

つて いや 断じて違う！！

いいか？捕鯨つてのは鯨を捕まえることだ」

「ほげえー」

「…こんどはへえーの擬音としてほげえーですか」

その言葉使い勝手いいなあ

「じゃあ…あな」

「あなご！？」

思わず吹き出しそうになる

あなごってムニエルにするか…？

というかじゃあって何だよ！！

「…マス〇くーん」

「……………？」

「すまん戯言だ…」

なんかかなり恥ずかしい

「あ　ちなみに嘘だよお？」

しかも嘘かよ

「おいしいねっ？」

「あ　ああ…」

確かにおいしいんだけど…なんかやり切れないんだよな…

結局　謎の白身魚のムニエルを平らげた後

俺たちは例の如く星を眺めていた

「そういえば明日は学園祭だね？」

「ん？ ああ」

明日を乗り切ればしばらくゆっくりできるぜ...

「おにーさんはやっぱり忙しいのぉ？」

「んーそりゃまあな
それがどうかしたか？」

するとるー子は少し考える仕草をして

頑張ってね と はにかみながら言った

どれだけ時間が経っただろう

二人の間の静寂が破られた

「…っくし」

少女のくしゃみで

「大丈夫か？」

「ん らいじょーぶらよぉ」

鼻をすすりながら答える少女

夏とはいえ夜中

さすがにスク水＋エプロンじゃ寒いと思う

…というかいつまでその格好？

「今夜は暖かいから大丈夫だよお？」

天気予報でも一週間先まで晴れの予報

おかげで星空には雲ひとつとない

「そういえばあ　明日晴れるみたいでよかったねえ」

「ん　ああ…」

まあ屋外に露店を出すクラスもあるからな」

「あー　うん　それだけでも
ーはあれのが楽しみだよっ」

「あれって？」

「えーつとねえ…」

ここで俺は…驚愕の事実を知ることとなった

生徒会側に…勝利の二文字がぐつと近付いた気がした

切り札を…俺は手に入れた

明日が…楽しみだ!!

学園祭準備編 ― 百合は好きだけど by 作者（後書き）

タイトルは作者の寝言ですので気になさらずに笑

ちなみに薔薇（？）は個人的にはありえません

…まあ 趣味思考はそれぞれ個人の自由ですからそういうのが好きな人を差別したりはもちろんしません

あ 今回の話で出て来た捕鯨禁止の話ですが

小説の世界でのことですので悪しからず

ちなみにリアルの世界では捕鯨禁止とまではいつてませんが…

捕鯨を禁止にすべきだ！！ という意見を持った人々も少なくないようです

生物保護と伝統保護

両者の間で揺れる捕鯨問題 って感じですよ

ちなみに作者

前の夏くらいに鯨を食べましたが…あまり好みではなかったです笑

…幼い頃に食べた馬刺しは美味しかったですがwww

…とりあえず伝えなかったことは

これからもよろしくってことです笑

日付が変わった頃に俺はようやく部屋に戻るところだった

俺の部屋の前に人影を見付けたときに…今夜は長くなりそうだと覚悟した

あるいは―それが奴の狙いなのかも知れない

「遅かったではないか同志長谷川よ
ずいぶん探したのだぞ？」

「それはこっちの台詞だ渋谷
いままでどこで何をやってた？」

「…それはプライベートな質問か？」

「生徒会側としての質問だ」

「ならば答えれん!!」

「やましいからか？」

「愚問だな 長谷川よ

俺はいつでも正々堂々だ
フェアプレー精神を忘れたことなど一生に一度たりともありはしないっ!!」

「…その嘘丸出しの言い訳

ある意味正々堂々としてるな」

「褒めるな 照れるであろうが」

「勝手に照れてろ」

「むう」

俺のあっさりとした返答に渋谷が唸る

「ちなみにプライベートな質問だったら答えたのか？」

「無論 当然だ

この俺の誕生秘話から現在まで ありとあらゆる角度から話してやるぜ？

ちなみに30分で30ドルだ」

「聞いた俺が馬鹿だったよ…」

どうせ本当は話すつもりなんてないくせによ

…しかしこうしては話がいつこうに進まない

俺は早く寝たいのに…

「…仕方ないな 一応聞いてやる 何の用だ？」

すると渋谷は待つてましたと言わんばかりに腕を広げ

「よくぞ聞いてくれた！！

何を隠そう俺が直々に伝えたいことがあるから来たのだよ」

と言った

「だから早く言えよ」

「むう… そう急かすな」

「俺は早く寝たいんだよ」

「知ってるさ だからわざわざこんな時間に邪魔しにきたのだよ」

「そうか じゃあ俺は寝る そこをどけ」

「まあ待て ほんの冗談ではないか？」

「…言ってるそばから時間稼ぎじゃねえか」

「…仕方ない 本題に入ろう」

「ああ そうしてくれ…」

眠気と鬱陶しさのせいで話半分に流す

「宣戦布告…だ」

「…ああ？」

急に何を言い出すんだ？

俺が呆気にとられていると 渋谷は驚いた

「貴様…宣戦布告も知らんのか!？」

「や 知ってるよ」

あれだろ？要は戦争を起こす前にあらかじめ相手に戦争をすると伝える ってことだろ？

そんなことはわかってる

「だから…それが？」

そう いまさらなのだ

まったく意味不明だ

するなら準備期間の初日にでもしろよ

「礼儀に倣ってやったのに…なんだその態度は!!」

…そして何故俺は怒鳴られた？

「まあよい…ついでにひとつ聞け」

「断る と言ったら？」

俺の台詞を聞いた渋谷は俺を一瞥して

「…近頃世界情勢が不安定だ」

結局話し始めた

…俺の意見無視かよ

「近々戦争が起こるとも言われている 無論…大国同士で だ」

俺はため息をつき 仕方なく話を聞くことにした

聞き終わらないと解放されそうにないからな…

「特に関係が悪化しつつあるのはこの国とEEUだ」

それは知っている

最近ニュースでよく両大国のお偉方が会談をしている様子が伝えられているからだ

…しかも両大国の思惑は一致していない

素人目でもわかる

決して良い状況ではないと

「でそれがどうかしたって？」

投げやりに返した言葉に対し 渋谷は呆れたようにこう言った

「少なくとも長谷川 お前にはかなり関係がある話だと思うが？」

「なにを…？」

つて…まさかお前…!!」

「ふっ…話は終わりだ

お互いベストを尽くそうぞ」

「ちょ…待てよ!!」

「待てと言われて待つ悪党がどの世界に？」

それにだな…いくら俺が待ったってお前は俺を捕まえないさ…
だがその半面 期待してるぞ」

「おい…!!」

…もう返事は無かった

「戦争…か」

無意識に呟きようやく部屋に入る

昔の話だなんて割り切れない

あの事件

忘れない…絶対に忘れない…

気が付けば…歯が欠けるほど歯ぎしりをしていた

…どうやら今晚は　あまり眠れそうにないな

まんまと術中にはまっちゃったぜ…

学園祭準備編 — 特別会員は30分で25ドルとお得になっております（後書

ようやく準備編が終わり 次回から当日編に入ります

ずいぶん長かったです笑

…まったく関係ありませんが
作者は今日高校を卒業してきました
↑

…では また次回で

学祭戦記、夏 ― はじまりの朝

「…は可もなく不可もない感じかなあ？
ラッキープレイスとかも特にないのよん？

だからテキトーに頑張りなさい？あはっ

んじゃ次 射手座の皆さん！

今日はきつとなかなかハッピー？

あ でもおゝ火には気をつけてね？

とゆゝわけでラッキーカラーは青色よん

続いて山羊座のあなた

ううゝん残念 今日の運勢は最悪かも？

だけど大丈夫ゝ大丈夫ゝ

悪い運勢を吹っ飛ばすラッキーアイテムは夜空を彩る打ち上げ…」

「もう…朝かよ…」

いつもより早い起床

いつもとは違って 通称”ハイテンションお姉さんの今日のテキト
ー占い”で目が覚める

占いお姉さんのイマイチなやる気とテンションのギャップ それを見事なまでに表現した口調が何故か人気で 学園内の生徒の中には録画をする人だっているくらいだ

そして何故かバンバン当たるらしい

…不思議だな

そして俺は結局渋谷の思惑通り盛大に睡眠不足だった

「あと5分…と言いたいところだが…」

そう呟きながらベッドから這い出す

「今日ばかりは…そうも言えないな…」

んーっと伸びをしながら欠伸を噛み殺す

洗面所へ向かい 顔を洗う

とうとう…とうとうこの日がやってきた

「…さて と」

身支度を済ませた俺は 今日の”鍵”となる秘密兵器をポケットに
突っ込む

本多特製の小型端末

スライドケータイにしか見えない外見

ある意味パソコン以上の性能

…そしてユキの待受画像

…いや 待受はいまのうちに別のに変えよう

「…取説読破するまで何日かったことか」

ベッドの上に投げ出されている広辞苑並に分厚い本を一瞥する

…おかげで使い方は完璧だ

「…さて 行くか!」

気合いを入れるように叫び 俺は部屋を出た

「おはよ」

俺の部屋の前でサヨが俺を待っていた

「行くか」

「行こう ハセ君」

…まずはお腹ごしらえに

学祭戦記、夏 ― やっぱり紅茶は譲れない

学食は当然誰も居なかった

俺とサヨとまひると学食の従業員以外は

「…眠いでふおおー先輩いゝ」

「まあ仕方ねえよ　これが仕事だ」

まひるは朝にめっぼう弱いみたいだった

「さっさと朝食とらないと　時間ないぞ」

「らっへえゝ…眠いんで…すう」

後半はもう言えてない

…というか寝ちゃったよ

「仕方ねえなあ トーストでいいか？」

「ふあい… トース…と？」

…先輩が奢ってくれるんですか!？」

あ 飛び起きた

「まあ たまにはな」

「ほんとですか？嬉しいですよ!!先輩大好きですよ!!」

「あーもう わかったから トーストでいい？」

「いえ 先輩のすべてが欲しいですよ!!」

「じゃあトーストと紅茶ね」

「じゃあ私はトーストとミルク よろしくね ハセ君」

「…よろしくって 俺？」

「そうだよ？」

まひるちゃんには奢るのに私は自腹なの？」

ぐっ…痛いところを突くなあ…

「…わかったよ」

部下の機嫌取りも上司の役目

注文をするためカウンターに行く

カウンターにいた学食のお姉さんに「両手に花だね こんにちは
ー」と言われたので

「それどころじゃないっすよ」

と 苦笑いで返しておいた

テーブルに戻ると なにやら盛り上がっている

「どうかしたか？」

「そうそうハセ君

私今日運勢最高なんだよ！！

きっと今日うまくいくってことだよね？」

「私も運勢いいみたいなんですよ！！」

どうやら占いの話らしい

まあ俺はあんまり信じないんだけどね

だつてさ

例えば今日はうお座が1位！！みたいな占い結果がたとしても
全国のうお座の人間全員にいいことがあるとは限らないだろ？

結局いいことがあるかどうかは本人の頑張り次第なんだと思う

「そっいえばハセ君ってなに座？」

とはいえせっかくモチベーションがあがっているのをわざわざ下げるほど俺は馬鹿じゃない

「俺？確か山羊座だったかな…？」

「えっ…！？」

しかし一瞬にして女子二人の表情が固まる

「おいおい どうしたってんだ？」

「山羊座って…今日運勢最悪だよ…？」

なるほど そりゃ気まずいな

「でっ でも先輩…！」

ほらアレですよ ラッキーカラーみたいなのを身につけてれば運勢上昇しますよ ね!？」

まひるがあたふたしながら言う

確かに 占いで最下位でもラッキーカラーやラッキーアイテムを身につければ大丈夫!! みたいなシステムがあるらしい

個人的にはそれも気に入らない

たったそれだけで運勢があがるなら迷いなくみんな真似するよ

実際なにも変わらないと思うんだけどね

だからまあ 占い自体を信じてない俺にとって
運勢が最悪でも運勢が上昇するでも
なんでもいいんだけどね

「ちょっと待ってね…確か…」

それでもサヨは運勢上昇の条件を思い出そうとしていた

「えっと…確かラッキーアイテムが…」

「ラッキーアイテムがなんですか？」

「夜空を彩る…なんだっけ…？」

うう…思い出せない…」

「そんなぁー…」

さつきとは打って変わって女子二人がうなだれるような格好になる

朝から元気だな 君たち…

というか 占いで最下位だった当の本人がまったく気にしてないというのに…

まあ 夢を壊すようなことは言わないでおく

「…とりあえずさ トースト冷めちまうぞ？」

その言葉で同時に顔を上げる二人

…現金だな

「そうですね 冷めちゃいますよ」

「そうだね

まあ私たちが運勢良好だからハセ君の分までカバーだね!!」

そういつて二人ともトーストにかじりつく

…運勢をカバーってなんだよ？

サクッ

…うん 今日もうまいな

でも微妙に気になるな…

夜空を彩る…なんだろう？

…まあいいか

時間を秘密兵器で確認する

もうすぐAM06:00か

そろそろ生徒が起きる時間かな？

「そろそろ行くぞ？」

「ちょっと待ってよー」

そういつてサヨがミルクを飲み干す

「ふう… 行こうか？」

「うん じゃあハセ君よろしくね？」

そう言つて手渡される学食のトレー

「…は？」

「片付けよろしく!!」

「…はあ」

カウンターにトレーを返したときにまたお姉さんが話し掛けてきた

今度はさっきみたいに茶化さず

「頑張れよ」

とだけ言ってくれた

運勢は最悪みたいだけど――負ける気がしなかった

学祭戦記、夏 ― ネーミングセンスのなさに同情

「そういえばユキは大丈夫なのか？」

「うん 朝一で眠らせちゃったよ」

「そっか じゃあ大丈夫だな」

例の如くお荷物であるユキは 今日も本多特製電流ビリビリプレス
レット（勝手に命名）で安眠中

サヨが起きてすぐに作動させたらしいから 遅寝遅起きがモットー
（というか早起きが苦手）のユキは自室で睡眠中だっただろう

…もし出歩いていたならその場でぶっ倒れてるわけだが―

まああいつに限ってタイミング悪く今日は早起きしてましたなんて
ことはないだろう

「相変わらず悪わるですねー」

まひるが冗談半分に言う

いや 冗談十割だな

だから

「世界平和の為だ…悪く思うな」

と 胸の前で手を合わせ芝居がかった口調で返す

良い意味でみんなほどほどな緊張感みたいだ

「実は私 今日を物凄く楽しみにしていたんですよ」

まひるがほんとに楽しそうに言う

「だって今日が 私が生徒会に入ってから初めてのお祭りですから」

「…あれ？そうだったっけ？」

てっきりもう何回も一緒に活動してた気がしたんだけど」

「だって私 一年生ですから」

至極当然とばかりにまひるは言ったが―俺は少し違和感があるような錯覚に陥った

確かに学園祭規模のイベントは初めてだけど―それ以外の活動の度にまひるの活躍が目立ったからだろうか？

なんか釈然としないが―それは現在の彼女の地位が物語っている

” 附属生徒会四柱 ”

俺 サヨ 本多 そしてまひる

その中でもまひるの存在は異例と言っていいたろう

だって入学から半年も経たないのに附属生徒会のトップ4なんだぜ？

普通なら無理なのに　彼女はそうなのだ

ちなみにだが　四柱しちゅうは四本柱という意味ももちろんだが
支柱しちゅうという意味も掛けられているちよつとした洒落だ

残念ながら温かくておいしいシチューは掛かってない（それこそただの親父ギャグだ）

誰が付けたかわからない名前だがたいていの人がかこう呼ぶ

附属生徒会四天王という呼び方をする人もいるがそれはなぜか少数派だ

「今日も大手柄を立てて先輩に猛アピールです!!」

ガッツポーズをとるまひる

もう十分猛アピールなんだけど…

「じゃあ私も頑張ろうかな？」

「おいおい…」

サヨまでそんなことを言い出すのだから俺は盛大にため息をついた

「サヨ先輩…相手にとって不足はなしです!!」

サヨは冗談のつもりで言ったのだろうけどまひるは闘志丸出した

…って 味方同士だろうが

「まあ 胸なら文句なしで私の勝ちですね!!」

といって胸を強調するポーズをとる

何の勝負だよ…

「うう…」

気にしてるのに…

と サヨの呟きが聞こえた

俺たちはいつも通りだった

気付けは外が賑やかになっている

「…そろそろか？」

「そうだね」

ちなみにいま俺たちは体育館の放送室でだべっていた

もちろん放送機具の電源は落ちている

秘密兵器で時間を確認

ちなみに待受画像はユキからアナログ時計に変えておいた

「…行くか」

「うん 行くう」

「ぜってえ勝つぞ!!」

「もちろんですよ 先輩」

「私だって頑張るんだから!!」

ちょうど体育館では生徒会教師のうすらハゲが開式を告げていた

「準備はいいか？」

『はいっ!!』

イヤホンから生徒会側の生徒の合唱が聞こえた

学園戦記、夏 ― はじまりを告げる高笑い

体育館には全校生徒がぎっしりと詰まっていた

体育館に居ないのは一部の教師と生徒会側の生徒だけ

生徒会側の生徒はすでに配置についている

『―であるからだね
はっはっは―』

舞台上では学園長がいつものマイペースさを発揮しながら話をして
いた

さすがにいつもの日の丸扇子は仕舞っているようだが―かれこれ数
十分も呑気に話している

「どこも異常はねえな?」

次々と異常なしという台詞が鼓膜を振動させる

俺とサヨは相変わらず体育館の放送室で全校生徒を見下ろしていた

まひるは駄々をこねながらもロッテの相手と持ち場についていた

「さすがにみんな退屈そうだね」

サヨが生徒を見下ろしながら言った

放送室が二階にあるため体育館にいる生徒を見下ろす格好になる

ほとんどの生徒が退屈そうにしながらも一応学園長の話を聞いているみたいだ

まあ一部隣と喋ったりしている生徒もいるが―それはまあ仕方ないことだろう

だって正直長いもん…

さすがに暴れ回る生徒は生徒会側が止めに入るが―そんな生徒はまだ居なかった

「…あれ？」

ふとサヨが疑問の声をあげる

「どうした？」

「なんだか委員長　そわそわしてない？」

そういつて指差すのはうちのクラスの委員長

たしかに周りを気にしているように見える

「どうしたんだろうね？トイレとかかな？」

サヨはあまり気にしてない様子だったが――俺はどうもしくりこなかつた

…何か嫌な予感がある

そう俺の優秀な第6感が告げている

俺は全神経を集中させて周りを観察した

「なっ…ちょっと待てよ!!」

居ない…!!

あの問題児たちが…!!

「どうしたの!？」

「渋谷たちが居ねえ!!」

「うそっ…!!」

すると突然叫び声がイヤホンから聞こえた

『代行!!なぜかA4と連絡がとれません!!』

なんだって…!!

A4っていうと…

俺は秘密兵器でA4の持ち場を確認

「なっ…マジかよ」

最悪だ…

「C1からC3に告ぐ!!直ちにA4を応援に!!」

イヤホンから了解ですと聞こえると同時に体育館に異変が

「なっ…今度は…」

電気が一斉に切れた

体育館の電気装置に一番近いのは…

「E2 どうなってる!？」

『そっ それが…管理室に鍵がかかって…至急応援を!!』

なんてこった…!!

「D1 まひる 管理室に至急行ってくれ!!」

『り 了解です 先輩!!』

管理室を含む特別な部屋は一部の生徒会役員しか開けられない

その一部は附属なら四柱だけ

本校役員でも数人だけだ

「放送室はどうなった!!」

体育館がずいぶんざわついている

『いま…つきましたが…こちらも鍵が…!!』

こっちも鍵だと!?

俺が行くしかないか…!!

「わかった 俺が行く!!
C1とC2は持ち場に戻ってくれ!!
行くぞ サヨ!!」

「あ うん」

放送室が占拠…

考えられることはただひとつ

『ふーっはっはっはー』

…予想的中

畜生…すぐにとっ捕まえてやる…!!

待ってるよ…渋谷っ!!

学祭戦記、夏 ― 囚われの王子様？

『 たった今 放送室は我々が占拠した！！ 』

渋谷が高らかに宣言する

『 どうした 長谷川？ 』

ずいぶん放送室が手薄だったぞ？ 』

畜生… ナメやがって

『 我々を舐めてもらっては困るな 生徒会諸君
期待には答えてくれよ？ 』

「 くっ… 畜生がっ 」

校内を駆けながら呟く

後ろからなんとかサヨがついてくる

『さて 本題に入ろうか』

我々は生徒諸君らに伝えたいことがあったので このように放送を使わせて頂いてるわけだが―』

何が使わせて頂いてるだ!!

勝手に乗っ取っというてよく言っぜ…

『学園長の話が始まりはや数十分

もはや諸君らも限界ではないのかな?』

た 確かに学園長の話は長いが…

だからといって渋谷が放送を乗っ取る理由にはならない

「もうすぐ…っ 放送室だ…」

最後の階段を2つとばして駆け上がる

放送室の前では二人の生徒が鍵のかかったドアと格闘していた

だが カードキーなのでピッキングのしようがない

「どいて…くれ…っ」

肩で息をしながら言う

俺がIDカードを取り出すと2人の生徒―ロツテC3―が身構える

中に居る渋谷を捕獲するためだ

『そこでだ いまこの俺が宣言しよう！！
只今をもって第7回学園祭を開始する！！
我が同志よ！！見事生徒会を打ち破り 囚われの戦友 長谷川を取り戻そうぞ！！』

「…行くぞ」

渋谷の台詞と同時にIDカードを差し込む

電子音のあと ドアが開く

「生徒会だ！！」

C3の2人が勢いよく中に入る

「なっ…!？」

しかし物音ひとつしない

「どうした…？」

ようやく息が落ち着いてきた

「…居ません」

「はあ…!？」

放送室の中には手足を縛られ口に布をあてられて喋れなくなっているA4の2人が居た

そう その2人だけ

渋谷が居ない…だと？

「…とりあえずほどいてやれ」

俺の指示を受けC3の2人がA4の2人の拘束を解く

俺は放送機具をいじり放送を止めた

どうやらあらかじめ録音しておいたものを再生しただけだったようだ

しかし…あいつまだ諦めてなかったのか…

俺はもう…こっち側の人間だったのによ…

放送は止まったが 渋谷の勝手な学園祭開始宣言により体育館は大騒ぎ

結果中途半端なまま開会式は終わり 生徒たちは各自行動に移って

いった

そのなかで学園長は最後まで呑気に笑っていたそうだ

一般生徒まで乱されるという最悪の形で学園祭がスタートした

暴徒側…いや 渋谷たちに初戦の軍配が上がった

学祭戦記、夏 ― デート気分？

「…まったく 意味わからんぜ…」

まさか窓を侵入 脱出に使ってくるとは…

そこまで考えてなかったぜ…

だって放送室2階だし

「管理室は武田君で放送室は渋谷君か…」

隣を歩くサヨが言う

放送室同様 管理室が持ち場だった役員も拘束されていたらしい

ロッテ制が効いたらしく役員の片方が武田の顔を見ている

これで武田と渋谷はマイナス100点は確実だな

…まあ捕まえただけだな

じゃなくてぜってえ捕まえる

あいつらだけは絶対にな

「…で ハセ君？」

「ん なんだ？」

「その紙切れは？」

サヨが俺の持っているものを指差す

「放送室の操作パネルのところにあった 渋谷からのプレゼントだよ」

そう言つて俺はそれを手渡す

「えつと…」

「親愛なる生徒会側の諸君

ならびに我が永遠の戦友長谷川

我々の活躍に期待をよせる生徒諸君の為にまずは我々が先手を打たせてもらった

さて いきなりではあるが 次に我々は中庭で諸君らの為にイベントをおこなう予定だ

ぜひ奮つてご参加頂きたい

時刻は11:00

一同心よりお待ちしている 以上だ

学園のアイドル 渋谷

追記 お前のイスはちゃんととつておいてある
いつでも帰つてこい 待ってるぞ」

「だつてさ」

「読みやわかるよ」

不機嫌さを全面に押し出したひとことを吐く

不機嫌な理由は2つ

こんな予告を送り付けてきて 余裕を見せ付けていること

そして…俺をまだ諦めてないこと

いや…それはどうでもいいか

もう戻るつもりはないしな

さて このツツコミどころ満載の犯行予告書をもつ一度手に取る

「どうするの？行く？」

サヨの持ち掛けに俺は首を軽く横に振る

「俺らはまだいいだろう

一応H隊に中庭の搜索を頼んであるしな」

そっか とサヨ

「じゃあいまからどこ行こうか？」

なぜか声が弾んでいる

「楽しそうだな…遊びじゃないんだぞ？」

「むう…わかってるよ」

「まあ…とりあえず見回りに行くか？」

最初の騒動からもう1時間以上経っており 学校内がやっと学園祭らしくムードになってきている

どのクラスや部活も露店に精を出しているのが歩いていてよくわかる

というか もうすぐ11:00じゃねえか!!

「ほんと？じゃあ私グラウンドに行きたいなー!!」

「だから遊びじゃないんだぞ…?」

「わかってるって!!ほらハセ君早く早く!!」

そう言っ て俺の手を握り 駆け出すサヨ

「おいおい…生徒会役員が廊下走ってたら…」

どうするんだ と言おうとしたが―それは叶わなかった

「そこの2人!!廊下を走るんじゃない!!…って 代行!？」

案の定見回りをしていた他の役員に注意されてしまったからだ

「はは… 見回りご苦労さん…」

そう言っ て苦笑いをしながら軽く手を振ると

その役員は困惑した表情ながら お疲れです とだけ言つて俺たちを見送つた

この一件のせいで 後に

俺とサヨが付き合つてゐる疑惑

サヨとまひる 二股疑惑

まひるからサヨに乗り換えた疑惑

二股の上をいくハーレム疑惑

など様々な憶測が飛び交つたが―現時点でそれらはすべて噂にすぎないだけは言つておこう

学祭戦記、夏 ― プールの匂い

「異常はねえんだな？」

『はい いまのところありません』

「変化ないって？」

「ああ…ブラフかもな」

結局グラウンドに來た俺たちはとりあえず中庭に連絡をとったが――

現在異常なし

とのことだ

「じゃあブラフだとして
中庭に注意を牽いておいて…ハセ君ならどこで何をする？」

「んーベタなら屋上…か？

いや 屋上はアレがあるから有り得んか…体育館とかノーマークだよな？」

「そうだよね 体育館に数人持つてく？」

「いや…向こうが動くまでは動けないな

一力所に固まると空いた場所を突かれるから…」

そうなんだよな…

生徒会役員VS暴徒

なんて言われているがー基本的に生徒会役員は暴徒の暴走行為を未然に防ぐ方法が無い

だって奴らがいつどこで何をしかすかなんて俺たちにはわからんだろ？

生徒会役員VS暴徒

この言葉が表す本当の意味は――暴徒の起こした騒動を生徒会側がいかに早く解決するか

素早く解決　暴徒を拘束することができれば生徒会側の勝利

暴徒に逃げられたならば暴徒側の勝利

という実に生徒会側不利なシステムだ

…だから余計いかに総会長が凄いかを思い知らされる

だってあの人はこの生徒会側不利なシステムで不敗なのだから

だがしかし…いまは俺が生徒会側の指揮官なのだ

「やっぱりしばらく様子見かぁー…」

サヨが退屈そうに呟く

「仕方ねえよ　こればかりは」

それに　と　付け加える

「嫌でもすぐに忙しくなるさ」

「ふーん…じゃあさ　いまのうちに満喫しないとね…！」

「満喫って…だから遊びじゃー…」

「あーもう　わかったよ

じゃあさ　とりあえず視察に行かない？」

「…視察？」

「そ　私たちのクラスの」

俺たちのクラス…

確かプールで喫茶店だっけ？

そういえばプールはグラウンドから近いしな

「まあ… 行ってみるか？」

確かにプールで喫茶店なんていかにも怪しい匂いがするしな…

…怪しい匂いって 別に塩素とかそういう意味じゃないからな？

…というか食材管理はどうやってるんだ！？

…いや まあそんなことはいいか

「うんっ 早くいこ？」

そして再び手をとられる

…サヨっていつもこんなだったか？

何と言つか…積極的？

いつもはまひるがこんなだよな…

まあ…たまにはいいかな

俺の手を握るサヨは　いまにも鼻歌を歌いだしそうなくらい上機嫌に見えた

そうだな…

せっかくの学園祭だ

楽しめるときに楽しまないとな

学祭戦記、夏 ― 真夏なのに…

「いらっしやいませご主人さ… って長谷川！！
なにをしにきたんですの！？」

「……………」

俺とサヨを出迎えたのはクラスの副委員長のサトミ

相変わらずの口調だ

だがしかし問題はそこではない

ご主人さ… ってなんだ？

ん？ 続きが気になるなあ？

しかもその格好はなんだ？

明らかにメイド服だよな？

「用事が無いのならさっさと消えてくださいますんこと？
わたくしは忙しいのよ」

忙しいねえ…

あれかな？ご主人へのご奉仕で忙しいのかな？

初登場の時はわからなかっただろうが 何と言つか…お嬢様口調な
んだよな

え？初登場って何かって？

こっちの話だよ 気にすんな

「まあまあサトミちゃん
私たち同じクラスじゃんか」

「わたくしは長谷川が気に入らないだけですの
サヨさんなら大歓迎…と言いたいけれど―今日だけはわたくしたち
敵同士ですよ?」

「うう…」

有無を言わせない口調のせいでサヨが黙り込む

「で お前は今日はずっと店番か?
…いや 違ったな ずっとご主人さまにご奉仕か?」

わざと挑発するように言う

「…あんたには関係なくってよ?」

右手を拳にしてプルプル震わせている

「ご主人さまに暴力はいけないよな？」

にやにやしなから問い掛ける

普段の借りを返さんとばかりに

「と…とにかく長谷川には関係なくつてよ」

なんとか堪えたようだ

「関係あるだろうが…」

頼むからおとなしく店番しててくれよ」

「ふん…誰があんたなんかの命令なんて聞くもんですか」

「あーわかったよ 存分に暴れてくれ

…これでどうだ？俺の命令は聞けないんだろ？」

「…仕方ないわね

そこまで言われたら暴れない訳には…」

「ちょっと待てい！！」

いま俺の命令は聞かないってー…」

「なによ いちいちめんどくさいわね」

「…それはもれなくこっちの台詞だ」

「だいたいわたくしはあんたなんかとー…」

凄い剣幕で迫られる俺

助け舟はプールサイドから出た

「サトミちゃん ご主人さまがお呼びですよ」

クラスメイトの女子生徒だった

見事にメイド服

お客様と言わずにご主人さまと言つあたり 徹底してるな…

「…仕方ないですわね
首を洗って待ってなさいですわ」

そう言い残し踵を返す

「…俺が首洗うのか？」

こついう台詞って悪役に言うもんじゃ？

…俺悪役？

「さあ…？」

サヨもいまいち納得してないような相槌をうつた

俺の目線の先にはサトミ

女生徒たち（お客みたいだからご主人さま？）相手に接客をしてい

るみたいだ

その女生徒たちは 尊敬…というか 憧れの眼差しをサトミに向けている

ああ そういえば―あいつ女生徒からの人気高かったな

一部の間ではお姉様だなんて呼ばれてるし

…俺にゃわからんな

理解に苦しむね

ふと時計を確認してみる

11:00まであと5分か…

「一応気になるから行くか？」

「ん そうだね」

そう言つて プールをあとにしようとしたとき 急に声をかけられた

「あ は 長谷川君と…」

サヨさん いらっしゃ い…？

あつ…お お帰りなさい…ませ？」

声に振り返るとそこには委員長がいた

だが いつもと違ったのは

「その服…」

「あつ… う うん…」

やっぱりメイド服だった

そういえばサトミやさっきの生徒とは違つてデザイン

…というかみんなバラバラのデザインだ

男子生徒は燕尾服か

…意外と本格的だな

…プールサイドなのが盛大に疑問だが

「えっと…お客さん？」

「ん あ いや そうついう訳じゃねえんだ
とりあえず顔くらい出そうと思ってね」

「そ そつなの…」

落ち込む委員長

んー 委員長＋メイド服

アリかも

「もー ハセ君 なに見とれてるの?」

サヨがむすつとした声で言う

「あ うん 悪い」

「でも委員長似合ってるよね
…私も着てみたかったな」

「えっと…一着余ってる…よ?」

「本当? あーでも残念 私たち仕事がー」

サヨの台詞の後半は聞こえなかった

決して声が小さかった訳ではない

ただ

それ以上に大きな音がしたただけだ

中庭の方から

「な…っ…！」

「嘘っ！？なにいまの…？」

途端にイヤホンから声

『だっ…代行…！！中庭で問題発生！！』

爆発と思われます…!!』

爆発!?

おいおい…冗談じゃねえぞ…!!

「サヨ 急ぐぞ」

「あっ うん」

「じゃーな委員長」

「あっ…う」

委員長が言い終わる前に俺たちは走り出した

「どうなっ てんだ…?」

あんなに派手な音をたてときながら中庭は予想以上に綺麗だった

というより いつもとなんら変わらないくらいだ

「代行!!」

不可思議な現場に首をかしげていると役員に声をかけられた

確か中庭で待機していた役員だ

「おう 大丈夫なのか？」

「はい まあまだ耳がきーんですが」

「耳がきーん？」

「はい きーんです」

「怪我とかねえのか？ 救護班は？」

「いえ 結構ですよ 外傷はないですし
他に怪我人もいません
みんな耳がきーんですけど」

「そうか…」

「で 何があつたんですか？」

なかなか話が進まないことにしびれを切らしたサヨが聞く

「ああ はい 一応爆発だったと思います」

「でも怪我也爆発痕もないよな…？」

「…おそらく花火の一種かと」

そう答えたのは別の役員だった

おそらくロツテの片割れだろう

「花火？」

「はい 薬品の調合具合により 光と音を重視したものを作ったのかと」

「光も凄かったのか？」

「はい そりゃもう 目がきーんです」

再び最初の役員が答える

って 目がきーん ってなんだ？

「ずいぶん派手な演出だな…」

「で 犯人は？」

「おそらく逃げられたでしょう

目撃者もいません

…我々ですら見てません

なにせブツは空から降ってきましたから」

「…空？」

「屋上あるいは教室の窓からの投擲

…特定は難しいでしょう」

確かにそうだ

それにいまは 犯人探しよりも大切なことがある

「…ねえ ハセ君」

「ん？ なんだ」

「**困**かなにかだと思うな」

この予告　そして爆発騒動が　だ

「だよな　俺もそう思う」

あんな堂々と予告をしときながら　被害は耳と目（？）がきーんとなるだけ

明らかに**困**だ

「…あの　僕らはどうすれば？」

見ると　目がきーんの役員と　その片割れが暇そうに立っている

「とりあえず指示があるまで　最初に指示した持ち場で待機　で」

「了解です」

「え　自由時間くらい…」

片割れが 目がきーんを引つ張っていく

…なかなかいいロツテじゃないか？

「…で ハセ君？」

「ん？ なんだったわけ？」

「もう…この事件の意図だよ」

「ああ そうだったな」

時間稼ぎか

注意を牽くためか

それ以外

その両方

「相変わらず出たところ勝負…か」

「だね…」

ふう　と　ため息をついたが―すぐに声が耳に届いた

『こちらD隊　ネズミが一匹かかりました』

サヨと目を合わせる

「よし　指示があるまで待機だ」

『了解』

「おいでなすつたぜ？」

「そうだね」

一瞬の沈黙

「あいつらかな？」

「かもね」

「行く？」

「いや　ここでいいだろ　こいつがあるからな」

そう言って俺は　ポケットの中の秘密兵器をちらつかせる

数分後　学園中に聞き覚えのある高笑いが響いた

俺たちの　反撃のときだ！！

学祭戦記、夏 ― エージェントはメイド服（前書き）

たまには長谷川以外の目線で物語を　と思ひまして

時系列としては前回の話と同じ時間帯に起こっていることです

それでは

学祭戦記、夏 ― エージェントはメイド服

「やっぱり今回の生徒会はなっていないわね 放送室の警備が甘すぎよ」

物音を立てないように移動しながら呟く

「一日に二度も放送室を乗っ取られるなんて
いくら指揮官がああ長谷川とは言えとんだ失態よね…ふふっ」

それとも

「二度目はない とでも思ってるのかしら？
それなら思惑通りね」

開会式で渋谷が放送室をジャックしたのはこのための布石でもあった

通気孔の蓋を外す作業に取り掛かる

放送室内に誰もいないことは確認済みだ

計画通り

まあ自分が立てた計画じゃないけど

計画に関しては わたくしより適任者――渋谷――が居るから彼に一任させておけば安心安全

まあ 彼の指示に従うのは癪だけど

キュルキュルという音を立て 通気孔のネジが回る

元々ネジが緩んでいたようで 携帯型のドライバーで楽々回る

恐らくあらかじめ渋谷が緩めておいたのだろう

相変わらず抜かりのない男だ

通気孔の蓋を静かに外す

あらかじめ用意しておいたロープを伝い部屋に降り立つ

逃げるときは このロープを腕力任せに登るしかないが―自分の身体能力をもってすればたやすい

…ただ今日はメイド服だ

プールで長谷川たちの相手をしていたせいで着替えるタイミングを逃してしまったからだ

だがそれは自分の落ち度

それにそこまで支障は出ないはず

この放送室ジャックの任を武田ではなく自分に指名したのも 武田の筋力では適わないと見越してらしい

それと武田は他の場所の方が適任だとか

そう渋谷は言っていた

「だからって…わたくしは女ですよ？いくらなんでも失礼だわ」

そもそも運動神経なら自分も武田も似たようなレベルだ

もちろん平均以上に優れているという意味で

だからこれを武田の任務にしても自分とたいして変わらないはずなのに

「ちょっと引つ掛かるわね…」

そう言いながらドアの隣にある装置に1枚のカードを通す

ピッという電子音がした

特殊なロックをかけ 簡単には鍵が開かないようにした

これで逃げるときの時間稼ぎは大丈夫なはず

もちろんすべて渋谷の指示通り

「ほんとに大丈夫なのかしらね……」

ぶつぶつと言いながらも放送機器の前に陣取る

「それに機械は苦手ですのに……」

覚束ない手つきでスイッチを弾く

操作方法は あらかじめ渋谷に教わった

そのとき手渡されたメモに目を移す

そして今度は機器を見る

パチパチとスイッチをいじる

「これで…いいはずよね」

あとは最後のスイッチをオンにすれば学園内に声が響き渡る

「これで少しはあいつも…いえ 何でもないわ」

スイッチに手を触れる

先程作戦開始を告げる特製花火が炸裂する音が聞こえた

だからもうやらないと…!!

「……………」

よくわからない感情が湧いてくる

時間にして ほんの数秒

でも1時間にも思えた

マイクを見据える

決心は…ついた

パチン

勢いよく弾いた

最後のスイッチ

すう　と　大きく行きを吸う

もう　戻れない

学園中に自分の高笑いが響いた

もう…戻れない!!

学祭戦記、夏 ― ミッションスタート

『おーっほっほっほ

放送室はわたくしが占拠させて頂きましたわ 無能な生徒会の皆様方』

聞こえてきたのは武田ではなくサトミの声だった

「サトミちゃんだね…

武田君だと思ってたのに」

サヨも同意見のようだ

「まあまだ武田を失うのが惜しいのかもな」

そう言っで鼻で笑う

どうせ渋谷は俺たちが放送室に罌を張っていることはとっくに知っているだろう

そこでサトミを捨て駒として起用か

渋谷らしいな

それとも―渋谷はその先を見据えて武田の起用を先送りにしたのかな

…あいつなら十分ありえるぜ

まったく…恐ろしいヤツだぜ…

そんなことを考えている間にもサトミの演説は続いていた

「さて…そろそろ行きますかな？」

当然いつまでもサトミを野放しにしておくほど俺は紳士的じゃない

いや 発言の機会を与えただけ紳士的だと思ってほしいね

だって罠だもの

ポケットから秘密兵器を取り出す

本体をスライドさせると画面の下にいくつもキーが現れる

スライドタイプのケータイさながらだ

本多お手製のそれは 使い心地がたまらなく最高だ

キーのサイズ 本体の重量

ありえない量の作業がこなせるこの携帯端末

もはや本多の技術は一般普及しているパソコンを越えている

俺は素早くキーを打つ

第1段階 クリア

今頃この作戦に関わっている役員の耳にあらかじめ作っておいた作戦開始のアナウンスが流れているところだろう

すぐにまたキーを打つ

ディスプレイに通信準備完了 と出る

第2段階 クリア

「…いくか」

そう短く言い放つ俺の口元には恐らく―いや 間違いなく―笑みが
浮かんでいただろう

罾にかかった獲物を捕らえることを最高の楽しみにしているハンタ
ーのような

サディスティックな笑みを

「よう 聞こえるか？可哀相なサトミさんよお
引き立て役 ご苦労様…さて もうおしまい時間だ」

コードネーム

「正義は悪を潰して初めて輝く」

ミッション スタート

学祭戦記、夏 ― 綻び

「もう飽きてきたわ…」

総会長と長谷川の差は歴然と見えた

相手が総会長なら こんなにたやすく放送室を乗っ取れなかった

仮に乗っ取ったとしてもすぐに追っ手をよこしただろう

それが どうだ？

占拠はいとも簡単に

追っ手の気配すらない

…もう少しデキると思ってたのに

残念だわ

そう思ってたため息をついたと同時にだった

『よう 聞こえるか可哀相なサトミさんよお
引き立て役 ご苦労様…さて もうおしまいの時間だ』

突然 操作パネルの隣にあったヘッドホンが喋った

「あら 長谷川じゃないの」

そう言ってヘッドホンを手に取る

「ご機嫌麗しゅう 不様な次期総会長候補筆頭さん
わたくしの寛大さに免じていまの失言はなかったことにしてもよく
てよ？」

貴方がいまの失言を即座に取り下げらね」

ヘッドホンについているマイクに向かって悠然と言い放つ

ヘッドホンを装着する手は震えていた

怖いのか…？

違っわ…これは武者震いよ…！！

ようやく長谷川が手を打つのね…！！

この自分を捕まえるために…！！

『取り下げる？はっ そんなつもりはこれっぽっちもねえよ』

きつとこの会話は罨ね

会話に氣を取られている隙に放送室に突入しようとしているに決ま
ってる

…バレバレよ

「なによ せつかく許してあげようと思ったのに」

いつでも離脱できるように天井からぶら下がるロープを手繰り寄せる

ドアが突破された瞬間にロープを登り始めても十分逃げ切れる

自分の体力と渋谷の作戦

綻びなんてひとつもない…！！

すべては計画通りなんだ！！

『ほう…いつまでその虚勢が続くかな？』

長谷川が挑発する

いつもの自分なら間違いなく挑発にのっていただろう

だが…いまは違う！！

油断や隙は文字通り命取りになる

隙を見せたら突入される

逃げ切れる自信はあるが――もう少し生徒会の邪魔をしていたい

もっとこの快楽に浸っていたい！！

だから挑発を軽く受け流す

「虚勢？主導権はわたくしにあるのよ？」

そう 放送室を占拠している

これは最大の強みだ

自分が優位に攻め 長谷川はあくまで抗戦という状況

「貴方こそ 虚勢はよしたらいか？」

しかし返ってきたのは舌打ちでも焦りによる唸りでもなく――

馬鹿にしたような短い笑いだった

「何がおかしいのよ？」

額に汗が伝う

たったそれだけなのに――とてつもなく嫌な予感がした

『何がって……お前　ほんとバカだな』

嘲るような台詞に背筋が凍る

……何が言いたい？

『簡単に放送室を占拠できた？
だからどうしたってんだ？』

いつのまにか右手は拳を作っていた

何が…言いたい…!?

『…不思議には思わないのか?』

「なに…が…?」

声になったのかわからない

なにか嫌な予感がする

周りの温度が急に下がったようだ

視線さえ感じる

…落ち着け

このままではすべて長谷川の思惑通りになる…!!

動揺したら負けだ

平静を保つんだ…！！

「だから…だからなんだって言うのよ！？」

思わず叫んでいた

ヘッドホンの向こう側の口元に笑みが浮かんだ気がした

『こう考えるのはどうだ？』

わざと警備を手薄に見せ掛け 放送室を襲撃したくなるようにした

『と』

どういうことだ…？

わざと占拠させたとも言いたいのか…！？

「そんなこと…なんの得があるって言うのよ…！」

もう平静を保つのは無理だった

言いようのない恐怖が這い上がってくる

両手でロープを掴む

…逃げてやる

逃げ切つてやる!!

…だが

『おっと そうはいくかよ!』

まるで長谷川は自分の姿が見えているかのように言い放ち―

バンッ！！

放送室の片隅で音がした

「なっ…！？」

「生徒会だ！！動くんじゃない！！」

囲まれていた

一瞬だった…

ロッカーから2人

段ボールに1人

放送スタジオから3人

計6人の男女に囲まれていた

ドアから入ってきたなら逃げ切れる絶対的な自信があった

でもこんな至近距離から出てきたんじゃ さすがに逃げ切れない…

『チェックメイト だ』

付けたままのヘッドホンから―死の宣告が聞こえた

「全部…畏だつたのね」

返答はない

それが答えだ

「…ひとつだけ教えなさい」

『なんだ？』

「なぜわざわざこんな茶番劇をしたのよ？
なぜわたくしが侵入した瞬間に取り押さえなかったのよ？」

『ふたつも質問すんなよ
ひとつじゃねえのか？』

「いいから教えなさい」

ヘッドホンの向こうが微かに鼻で笑ったような気がした

『不測の事態に対応するだけじゃうちら生徒会側が確実に不利なんだ
…それはわかるか？』

…言いたいことはわかる

暴徒側は生徒会側の様子を見て騒ぎを起こす

生徒会側は暴徒側が騒ぎを起こして初めて暴徒の動きがわかる

暴徒は攻め続け生徒会は必死にそれを鎮圧しようとする

つまり基本的には生徒会側が先手を打つことは不可能なのだ

『だからな 罨を張り獲物を待つ かかった獲物は暴れる…だが』

一旦長谷川が言葉を切る

『罨にかかった獲物を仕留めるのは簡単だ

そしてその獲物を手に俺らは堂々と勝利報告をする

罨の存在を知らない一般人はこう感じる

生徒会側が勝った と』

「つまり…わたくしは貴方たちの引立て役

負ける脚本しか用意されていない悪役つてところかしら？」

『その通りだよ

コードネーム 正義は悪を潰して初めて輝く
見事に嵌まったよ ありがとう』

「くっ…完敗…ね

あんたは絶対いい死に方しないわよ」

『結構 あーそれとだな』

「なによ？まだなにかあるの？」

『渋谷は罠のこと知ってたと思うぞ』

「なっ…！？」

絶望が憎悪に変わった

綻びなんて確かになかった

確かに計画通りだったんだ…

自分のじゃない 長谷川と渋谷の計画通り…

「ははっ……」

そして再び絶望へ

「わたくしは2回も騙されたのね……
不様だわ……早く連れていきなさいよ」

『……最後にもうひとつ
可哀相なサトミに教えてやるよ』

「……なによ」

『お前が放送室に抜擢された理由はもうひとつある
というか 消去法でお前になるんだよ』

「どういふことよ……?」

『恐らく武田は別のところで行動を起こす
それはお前じゃ面白くないんだよ
それをわかって渋谷は武田をそこへ お前を放送室へよこしたんだ
ろう』

…まあ武田の向かう先も罷だがな』

「意味がわからないわよ」

『だろうな お前が理解するのはきっと明日以降だろうな
いまからお前は監獄行きだから』

「分かってるわよ!!」

いいから早く連れてきなさい!!」

『はいはい じゃ 護送隊 よろしくな』

その声と同時に放送室のドアが開く

特殊な口ツクをかけておいたのに いとも簡単に

3人の男子生徒が入ってきた

「あなたが噂の本多君かしら？」

「…そうだ 是非お前とは別の機会に逢いたかったものだな

お嬢様キャラはSという万国共通の―」

『本多 任務だ』

「ぬっ そうだった」

がしつと腕を掴まれる

「ちょ…ちよつと!!」

ヘッドホンが外され アイマスクをつけられる

『…ゲームオーバーだ サトミ』

それが最後に聞いた言葉だった

暗闇に意識が落ちた

学祭戦記、夏――歩が大切（前書き）

気付いたらもう50話みたいです汗

学祭戦記、夏――歩が大切

パチン

心地良い音が響く

パチン

「君なら……どのように見るかな？」

パチン

「彼を選んだのは他でもない私だよ?」

パチン

「はっはっは それもそうだね」

パチン

「それとも何でしょう 私の目は節穴とでも?」

パチン

「そうは言っていないよ だけどねー…」

パチン

「君だって人間だ 完璧ではない
君は詰めが甘い それが命取りになるんじゃないかな？」

細目がさらにきゅっ ときつくなる

まるで蛇に睨まれたようだ

パチン

だが

「今回は私の出る幕じゃありませんが―
私はいつでも詰めまできっちりですよ」

挑発的な笑みでそれを受け流す

「はっはっは 慢心や自惚れは滅びに繋がる ほら…」

パチン

「飛車を取られてしまっただろう？」

「…必要なのは有能な駒だけじゃない
有能な駒と それを思い通りに動かす頭脳」

パチン

「どちらかでも欠ければそれは則ち 敗北を意味します」

「君を評価してはいるんだけどね…」

パチン

「時々君の考えが読めないんだよ 今度は角だ
いまの君に有能な駒はないだろう？」

「…私の考え？そんなの唯一無二
飛車角を切ろうとも…」

口元に歪んだ笑みが浮かぶ

「勝利を得る　ただそれだけですよ
そして有能な駒が欠けることと有能な駒を自ら捨てることは同じで
はない」

パチン

「つまり…すべては勝利のため…学園長　王手です」

「はっはっは　やっぱり君は強いな　だが…」

パチン

「やっぱりまだ詰めが甘いよ　簡単に逃げられる」

パチン

「逃げられる？　追い詰められるの間違いですよ
…しかし往生際が悪いですね　そろそろ観念したらどうです？」

「まあまあ　そう慌てない」

パチン

「まだまだ時間はある　そうだね　総会長君？」

「…ええ　まったくです」

パチン

「しっかり見極めましょうか
彼が私の後任に相応しいかどうかを」

パチン

「はっはっは　そうだねー
彼らが勝てばご褒美を用意していることだし」

パチン

「彼ら ではなく 彼 では？」

「いや 彼ら だよ」

パチン

「そこが…君と彼らの違いだ」

再び鋭い視線が真正面から襲い掛かる

「…いいでしょう」

パチン

「拝見しましょうじゃないですか 彼ら とやらを」

真正面から睨み返す

学園長は 間の抜けた笑い声をあげるだけだった

『…により解決致しました
引き続き学園祭をお楽しみ下さい
以上 生徒会でした』

「ちっ…サトミの奴しくじったのか」

周囲を気にしながら移動を試みる

とは言え誰も居ない

でもなんかスパイみたいな気分だからコソコソ動く

「まあ サトミは十分に役目を果たしてくれたよ」

人気のない廊下を歩く

「ふつ　そこでこの俺様の出番って訳だな」

独り言を呟きながら閑散とした廊下を見渡す

「……ってか　ほんとにあいつの言った通りだぜ
ネズミ一匹見当たらねえや」

特別教室棟　最上階

学園祭の真っ只中である学園内で唯一と言っていいくらい静かだ

「そりゃ普通に考えてこんな誰も来ないところで出し物なんてやらねえよな　それに誰も来ないし」

なんか言葉がおかしい気もするが問題ない

長い廊下を歩く

「しかしなあ……大事な物があるハズなのに　学園の犬どもすら見当たらねえ」

ほんとに氣い抜きすぎじゃねえの？」

廊下の突き当たり

ここが目標地点

渋谷から指示された通りにやってきた

「ほんとにここかあ？」

そう言いながらも躊躇せずに曲がる

「しかし俺も随分信用してもらってるなあ
この任務はお前しかできないんだ！！だってよ
つたく 照れるじゃねえか」

渋谷の台詞を思い出し 思わず顔が綻ぶ

1番奥のドアの向こうにそれはあった

「おっ マジであつたぜ！！
操作マニュアルを徹夜で読破した甲斐があつたってヤツだな」

電源スイッチを入れる

一斉にパネルに光が灯る

「ええと…これとこれと…」

次々とスイッチを入れる

「あ 間違えた こいつだ」

一夜漬けで叩き込んだ操作方法を必死に思い出す

元々暗記系は苦手なんだけどな…

「こいつか？…ビンゴ！！ 次は…っと」

一際大きなスイッチに手を伸ばす

「これでオッケーか？
くそっ 相変わらず機械は苦手だぜ 電子レンジは得意なんだけど
な」

いまだき決して誰にも自慢できない自慢を呟く

「…しまった！電子レンジもこの前ぶっ壊したんだった
…ま まあな 俺様にかかれば電子レンジなんてイチコロだぜ…っ
てイチコロの意味が違うつ！！
…じゃなくって いいか落ち着け自分？」

パンパンと頬を叩いて気合いを入れる

「っしゃ いくぜっ！！」

マイクに手を伸ばしたその瞬間

『…どこにだ タケ？』

あいつの声がした

学祭戦記、夏 ― こいつバカだ（CV・民○）（前書き）

タイトルは気の迷いです笑

学祭戦記、夏 ― こいつバカだ（CV・民○）

『こちらD1 ターゲット通過確認』

「了解」

「もう…さっき放送室が片付いたばかりなのに」

「仕方ないさ 次々と行動を起こして俺らを攪乱するのも目的のひとつだろ」

「でも私たちの掌の上だけだね」

「ああ 飛んで火に入るなんとやら だな」

サヨとならんで廊下を歩く

二人とも表情に余裕がある

『先輩先輩ー ターゲット目標地点に到達ですよー』

「おいおい まひる…そんなに騒いだらターゲットに気付かれるだろ？」

『すつ すみません…』

「まあ…あいつなら気付かないか 指示まで待機な」

『りょーかいです』

さて これで一段落だ

あとはサトミ同様 カウンターパンチを喰らわすだけ

実に簡単に引つ掛かってくれたな

…しかし二人ともクラスメートかあ

「私たちのクラスは　ある意味顔が広い人ばかりだね……」

どうやらサヨも同じことを考えていたようだ

「なんつーか……落ち着きがないと言っか……単純というか……」

「だね……」

俺たちは本校棟の3階を回っていた

先程不審生徒の情報が寄せられたからだ

「不審生徒って言われてもな……どう不審だったんだ？」

報告では　他の生徒が不審生徒を発見したらしい

その生徒が近くの役員に報告

その役員が俺に報告

ブラフの可能性が高かったから 持ち場のある役員の代わりに 手の空いてる俺たちが報告場所に向かうことにしたというわけだ

「どう思っ？」

何が とは言わなかったが

「私は…ブラフだと思うよ」

しっかりと通じていた

「だよな…まあ一応確認って意味で…ん？」

「ハセ君？どうしたの？」

「いや…いま」

ちらつと窓からみえたが―数人の生徒が附属棟の裏に走って行った
ような気が…

…気のせいかな？

単に一般生徒が急いでいただけかもしれないしな

そうだな 暴徒とは限らんだろ

ちょっと神経質になってるな…

「いや なんでもないだろ？」

「…？じゃいつか」

ふう とため息をついたときだった

『これでオッケーか？』

ふと近くのスピーカーから声が聞こえた

『くそっ 相変わらず機械は苦手だぜ』

「武田君の声だよね…？」

「ああ…こいつぁ予想外だ」

武田の声が聞こえるのがじやない

サトミみたいに声高々に放送ジャックを宣言するかと思ったのに
なぜか独り言のノリだ

『電子レンジは得意なんだけどな』

どうでもいい…

というか いまどき電子レンジが苦手なヤツなんていないだろ

『しまった！！電子レンジもこの前ぶっ壊したんだった』

「…まじか！！おい…とんだ機械音痴だな…」

というか…そんな恥ずかしい事実を赤裸々に学園内に放送するなんて…

前々から思ってたけど

こいつ…アホだ

『…ま まあな 俺様にかかれば電子レンジなんてイチコロだぜ…
って イチコロの意味が違うつ！！
…じゃなくって いいか落ち着け自分』

しかも勝手にテンパってる…

「そろそろ気付かせてやるか…」

「そ　そうだね　武田君のためにも…」

「ああ　そうだな…」

再び秘密兵器のキーを叩く

『っしや　いくぜ』

「…どこにだ　タケ？」

操作が終わった秘密兵器に向かって俺は言い放った

その声は壁に引っ掛かってたヘッドフォンから聞こえてきた

「おお 長谷川じゃねえか ビビったぜ
だが聞いて驚け!!」

実はな いまから学園内の放送をジャックしてやるぜ!! どうだ
参ったか?」

自信満々に言い放ったが

『んや 全然』

長谷川の反応は乏しかった

というか 声に哀れみが…

気のせいだよな?

「またまたあー長谷川ちゃん ほんとは今頃焦ってるんだろ?

また放送がジャックされる！？ってさ」

『だから 全然』

「なんでだよ！！そこは普通焦るだろ！！」

『というか すでにジャックされてるし』

「はい？…どゆこと」

『お前電子レンジぶっ壊したんだってな』

「なっ…なんで知って…い いやー なんのことかサッパリだぜど…どうしたんだよ長谷川 いきなり変なこと言っなよ 焦ってんだろ？認めちゃえよ ははっ」

『や 焦ってんのお前だろ？お前こそ認めるよ』

「ぐっ…わかったよ…そのかわり誰にも言っなよ？その…恥ずかしいからよ」

『ああ そいつぁ構わねえけどよ』

「けどなんだ？」

『お前がさっき自分で言ったんだぜ？しかも学園中に』

「……………は？」

『いや だから お前それマイクのスイッチ入ってるだろ』

はっとして手元のパネルをしてみる

放送中のランプが灯っていた

「のーーん!!」

『ちなみに いまの奇声も学園中に響き渡ったから』

「な…なんだと…くっ…さすが長谷川…
やることがえげつねえぜ…」

『や お前の自滅だろ』

ザックリ斬られた

「うぐ…っ」

とりあえずこれ以上の自滅を避けるべく 手元のスイッチを切…ろ
うとして止める

「…ふっふっふ いいこと思い付いたぜ」

『ほお…なんだよ』

その声は明らかに挑発的な感情が込められていた

…見てろよ

「いまから学園中に長谷川の恥ずかしいあれやこれやを放送してやるぜ…！」

どうだ 参ったろ？」

『おう そいつあ困るな
…だがな そりゃ無理だよ タケ』

「は？意味わかんねえよ
あれか？ 虚勢だろそれ？」

『虚勢？ 笑わせんなよ
とりあえずお前さ いまどこにいるんだ？』

「どこってそりゃ…あれ？ そういやここどこだ？
特別教室棟の最上階なんて普段来ねえしな
指示通りに機械的に来たただけだからな」

そう言つて辺りを見回す

…狭いな

それになんか…独特の匂い？

なんか涼しいし

『…で どこにいるんだ？』

「わかんねえよ　なんか狭いし独特の匂いがするし
わりと涼しいしょ…
どこかわかってんなら教えるよ」

『あ？　いいぜ？ちよつと待ってるよ』

そう言った長谷川が　ぼそつと何か言ったような気がした

とつきゅつ…？

とつぐ…？

いや　とつげきか？

すると長谷川の声とほぼ同時に　足音が聞こえてきた

それと話し声

「な　なんだ…？」

足音と話し声はだんだん近づいてくる

「…がなくなっちゃ」

「もう　まひるちゃんったら」

もう声はすぐ近くだった

「じゃあちよつと待ってて下さいねー」

「はいよ　行つといで」

「はいー…って　きゃー！ー！」

「…お？」

目が合った

確かこの子は――

「まひるちゃん……だよな？どうかしたのか？」

そくだ　長谷川に付き纏ってるまひるって後輩だ

「……で　お前ら何の用だ？」

こっちは取り込み中なんだよ　あっち行った行った」

しっしつと手で追い払う仕草をする

「あつ　あんた何やってんの！？」

そう叫んだのはもうひとりの女子だった

まひるの方はと言うと　こっちを凝視しながら壁にもたれ掛かって固まっている

「見りゃわかるだろーがよ！！
放送乗っ取ってんだよ！！
あっちこっちから俺の声聞こえてんだろ？」

「や そうじゃなくて…」

「じゃあ何なんだよ！！」

「あんた ここ…女子トイレだよ」

「……………はい？」

狭くて 独特の匂い

そしてどこか涼しい

よくみると…放送機材は便座の上に乗っていた

「なっ なんですとー！？」

一気に状況がわかってきたぞ

つまり 客観的に見ると

俺が女子トイレに籠っていたところ 女子がトイレにやって来てしまった

そして見付かった

…女子トイレに潜んでいるところを

…俺 変態にしか見えねえじゃん

「武田先輩のえつち」

「変態ね…」

「うっ…うわああああん…！」

頭を抱えて叫ぶ

その拍子にトイレの個室の壁で肘を打つ

「うお!! 痛つてーーーー!!」

蔑んだ目で俺を見る二人の少女の口元が笑っていたが―それに気付く余裕はいまの俺にはなかったし

その本当の意味にも気付かなかった

『よう変態 学園中が騒然としてるぜ?』

長谷川の声で我に返る

「が…学園中…?」

放送機材に目を移す

放送中を示す赤ランプは灯ったままだった

「しっ　しまったぁー！？」

「…変態が叫んでいます」

「そうね…変態が叫んでるわ」

『自業自得だなタケ…ゲームオーバーだ』

この日からしばらく

俺こと武田は変態と呼ばれ続け

廊下ですれ違う人はみな俺を蔑んだ目で見た

そして俺は誓った

いつか女子トイレに復讐することを…！！

学祭戦記、夏 ― 最初のミス

『それにしても先輩 結構酷いことしますねー』

「んあ？ なんのことだ？」

タケ…じゃなくて 変態の放送ジャック騒動を収拾し終わった頃に
イヤホンからまひるの音が響いた

『もう とぼけないで下さいよー』

まあそんなサディスティックな先輩も好きですけどね ぽっ
』

「ぽっ じゃないよ…で 本当に何の話？」

『ぶー 先輩がつれないですうー』

途端に拗ねた声が聞こえる

『まあ冗談はこの辺にしといてですね 変態先輩のことですよ』

「変態がどうかしたのか？」

『だってわざわざ女子トイレに放送機材を置くように指示したのは先輩ですよ？』

あれって初めから変態先輩をターゲットにしてたんですよね？』

「や 違うぞ？」

あの場所を選んだのはちゃんとした理由があるんだよ」

『ちゃんとした理由…ですか？』

「おう そうだ あの場所は最上階 しかも隅っこだ」

『あつ わかりましたよー！！』

逃げ場がないんですね？』

「そゆことだよ

ついでに言っと 学園祭の最中にあんなところに行く物好きはそういないだろ？

つまり張り込んでいればターゲットの接近に一発で気付ける」

『なるほどです
ターゲットが人混みに紛れて行動するのを封じるわけですがー
でも…まだわからないこともあるんですよ』

「ん？なんだ？」

『先輩は最初から あたかも変態先輩が来ることを想定してたじゃないんですかー？
だからターゲットが変態先輩だったバージョンと 別の生徒だった
バージョンの両方を作戦指示したんじゃないんですか？』

「おつ 鋭いな まあ…アレだ

サトミも変態も渋谷の指示で動いていた

そして渋谷は初めから女子トイレに放送機材があるのを知っていた
そして…」

ー呼吸置く

「渋谷は敢えて変態を女子トイレ担当にした
渋谷はこれが罠だと知っていたからだ
ここまでわかるか？」

『う… 全然さっぱりですー…』

「…と とにかくだ

変態は俺たち生徒会と渋谷の両方に嵌められたってことだよ
偶然にして必然ってヤツだ」

『えと…』

しばらくまひるがぶつぶつと独り言を呟いていたが…やっと口を開いた

『つまりは先輩のサディスティックな性格が変態先輩を陥れたんですね！！』

そしてまったく理解してなかった

「…もういいや とりあえず雑談はこの辺にしようか
持ち場には戻ってるのか？」

『はい バッチリですよー

先輩の指示通りです なんとって私は先輩の従僕ですから』

「じゅっ…!？」

い いきなり何を言い出すのさ…」

意味をわかって言ってるのか わかってないのか…

どちらにしろ困ったものだ…

『だってー…私は先輩だけの私ですから
先輩の指示は絶対なんです

あっ でも…絶対だからって あんな命令やこんな命令は……でも
先輩になら…いやでも…やっぱりまだ早いですよ…』

…どうやらスイッチが入ったみたいだ

こうなったら放置するしか手はない

「仕方ないな…」

ため息をつくと同時に腹が鳴った

「うっ…」

「ハセ君？　どうかした？」

「いや　そついや昼飯食ってねえよな…」

「あ　うん　私もお腹空いちゃったよ」

あはは　と　照れ笑いを浮かべる

「とりあえずメシにしようか　何が食いてえ？」

「んーと　お店回りながら決めない？」

「ああ　そつだな」

イヤホンの向こうで　いまだにまひるがひとり盛り上がっているようだった

責任がどうか言ってるよ…

俺はまひるが落ち着くまでの間 イヤホンを耳から外すことにした

きつと…これが間違いだっただろう

ただどこのときはそんなことまったく思いもしなかった…

…あんな展開になることが

学祭戦記、夏 ― 気の緩み（前書き）

忘れがち（？）ですが
一応未来のお話です笑

そして通貨は米ドルです

それ以外で何か訂正すべき点があればご指摘下さいな

「ハセ君は焼きそばにする？それともフランクフルト？
あーでもタコ焼きも捨て難いよね」

「あ ああ… そうだな」

再び俺たちは中庭に来ていた

もちろん少し遅い昼飯のためだ

学食でも良かったのだが せっかくだからという理由で他のクラス
の露店で昼飯を済ますことにした

「あつ あれは…！」

そう言ってサヨがとある露店を指差す

「ん？ たません？」

たませんという看板の出ている露店を指差すサヨ

「ハセ君知らないの！？」

今回の学園祭の最高売上大賞の最有力候補なんだよ！！」

そしてなぜか凄い勢いで語るサヨ

「そ…そうなのか？」

ただのたませんじゃねえの？」

「ただのたませんとは失礼だよ！！」

卵は青森から取り寄せた最高級比内地鶏の卵を使用して えびせ
んだって創業1000年を超える老舗が一枚一枚丁寧に焼き上げた
代物！！

しかも原料のえびは希少価値の高い天然ものを100%使用！！

25種類ものトッピングは何をどれだけセレクトしてもたったブラ
ス1ドル！！

ほら あの生徒なんてたませんよりトッピングがメインになっちゃ
ってるよ」

そういつて指差す先には「たませんから溢れんばかりの（ってかお
もいっきりはみ出し溢れてる）トッピングにかぶりつく生徒×2

「……………難儀だな…ってサヨ？」

隣にいたはずのサヨが いつのまにかたませんの列に並んでいた

「ほらハセ君！！なにぼーっとしてるの？」

そして手招き

「…えっと サヨ様？」

並ぶんでございましょうか？」

動揺を隠せず言葉がおかしくなる

「当たり前でしょ？私は今日このために生きてきたんだから！！！」

いや…もっとまともなものの為に生きてください

「ほら 早く早く！！！」

促されたが…とりあえず列を一瞥

それはまさに長蛇の列だった

ざっと待ち時間は30分つてとこか…

「いや…俺は遠慮しとくよ」

そう言つて左手を挙げる

「えー ハセ君も食べようよ」

「いや まあ…俺は焼きそばにしとくよ」

「たまさんのトッピングに焼きそばもあるよ？」

「それもつたませんじゃねえだろ…！」

どっちかと言うと「オムソバ崩れをえびせんで挟んじやいました」
って感じじゃねえかよ…！」

「他にもフランクフルトやタコ焼きもトッピングできるよ？」

「なんでもアリかよ!!」

そりゃ最高売上大賞の最有力候補にもなるはなあ!!

ってか反則だろ!?

赤字覚悟か!?

まともなトッピングはねえのかよ!?

「まともなのかあ…たまごとか?」

「最初から挟まってるじゃねえかよ!!」
なんだそりゃ ダブルたまごサンドのノリか?
それともあれか くだらないジョークか?

「違うよ トッピングのたまごは名古屋コーチンのたまごを使用して…」

「んなことどうでもいいわー!!」

ついつい大声で叫んでしまった…

いや まあ…さっきからずっと大声でツツコミを入れていたわけだ
けど

叫んだせいで辺りは静まり返り みんな一斉にこっちを見ていた

「あ いや…すみません
気にしないで下さい…」

反射的に謝ってしまう

周りの生徒はすぐに何事も無かったようにそれぞれ思い思いの行動
を再開するが―俺は少し違和感を感じていた

一瞬静まり返ったときに…なにか炸裂音のようなものが遠くから聞
こえたような…

そう思っただけだと考えていると ふとあることに気付いた

「しまったっ！！イヤホン外したままだ！！」

まひるのアレが治まるまでの間外すつもりが 外したまますっかり
忘れていた

…イヤホンを付け直した俺の鼓膜を盛大に震わせたのは―役員の悲痛な叫び声だった

『代行！！代行！！応答してください！！代行！！』

「なっ…！！おい！！どうした！！」

『あ…代行！！こっ　こちらF4！！
至急応援をお願いします！！
もう…限界ですっ…！！』

「限界…？　いったい何が起きた！？」

『暴徒です…！！附属棟校舎裏にて…っ！！
F隊総動員ですが押されています！！』

「なっ…だつて…！！」

再び急に騒ぎ出した俺を不審に思う視線が突き刺さるが―今回はそれどころじゃなかった

「ハセ君？どうしたの？」

「ヤバいぞ…サヨ

とっ とりあえず俺は行く！！

悪いが俺の分の昼飯も買っといてくれ！！」

そう言って俺は自分のIDカードを手渡す

露店の支払いも 当然IDカードで済ませるからだ

「あ…うん わかった！！けどIDは返すよ」

「いや…だって」

「今日は私が奢るからさ

ハセ君は早く行ってあげて？」

「…わかった 代わりに今度夕飯奢るよ」

「うん じゃ また後でね」

「おう 頼んだぞ」

言い終わらないうちに身を翻す

役員の悲痛な叫び声はまだ途切れていない

…しかし事件はこれだけじゃ無かった

学祭戦記、夏 ― 状況報告ッ!!

「はあっ…はあっ…く…っ」

爆発音

火薬の臭い

誰かの怒鳴り声や叫び声

「もっっ…すぐ…だ…っ!!」

減速無しで角を曲がる

目の前に広がるのはいつもの校舎裏ではなかった

「なっ…なんだこりゃ…」

目の前に広がるのは…机

机
机
机
机…

机の塊

…バリケードだ

呆氣にとられていると横から声がした

「だっ…代行!!」

声のした方を振り返る

「なっ…お前ら大丈夫か!？」

そこには2人の役員

片方は腕を押さえ もう片方は仰向けで倒れている

「…すいません やられちゃいました」

苦笑いを浮かべる役員

もう片方は動く気配も無い

「ばっ… やられちゃいましたじゃねえよ!!
きつ 救護隊は呼んだのか…!？」

「はい… もうすぐ来るようですが… 向こう側の方が酷いので…」

そう言っ てバリケードを一瞥する

「一体なにがあっ たんだよ!!」

「それが…こちら側からはご覧の通りです
バリケードを突破しようと試みたら… 返り討ちに合いました
こいつはそんなとき頭を打ったみたいで…」

仰向けの役員に歩み寄る

…呼吸 脈拍異常なしか

頭部に軽い腫れ

しばらく休めば大丈夫だと信じよう

それに手当てや処置は俺の役目じゃない

「それより代行…向こう側の応援に向かって下さい…」

おそらくバリケードは暴徒側が挟み撃ちを防ぐために作ったのだろうが―確かにバリケードがある限り暴徒側も簡単にこっちには来れない

… うちらにとっての最善策はこうか？

こつち側にも人員を割いて暴徒を牽制

そして向こう側より暴徒鎮圧

… だがどうやって？

現に向こう側の役員は劣勢との報告

数でも　そしておそらく個々の能力でも――恐らく向こうは精鋭部隊
だろうから――うちらが不利だろう

それでどうやって勝てというのだ！？

… 総会長ならどう切り抜けるんだ？

… ああ　そうか… 総会長ならそもそもこんな事態にはならないのか

これが… 俺とヤツの違いなのか…！！

「くっ…！！」

いまこの瞬間も　役員は劣勢ながら頑張っている

それなのに俺はいつたい何をしてるんだ…っ！！

何か… 何かないのか？

クソ生意気な暴徒を撃ち殺すような方法は…！！

…撃ち殺す？

口元に――笑みが浮かんだ

「…勝てる」

「…代行？」

急に余裕を見せた俺を不安の目で見つめる役員

「よし…こつちにも応援を呼んでおく…それまで堪えてくれよ」

「り 了解です!!」

代行…気をつけて下さい 暴徒は武器を持っています」

「武器…？」

任せろ…俺は大丈夫だが まあ一応教えてくれ」

「あ はい 現時点では痼癪玉とロケット花火が確認済み
向こう側の役員は近付くに近付けない状況です…
なんとか打破してください…！！」

「…もちろんだ ひとり残らず撃ち抜いてやるぜ！！」

そう言い捨て踵を返す

ちょうど応援に呼んだG隊と救護隊が到着したところだった

「暴徒側が動くまで牽制
動いたら知らせてくれ
…怪我はするなよ」

「了解です！！」

「…頼んだぞ」

そして俺は再びフルアクセルで駆け出す

…ああ サヨにIDを手渡さなくてよかったぜ

もし渡してたらドアが開かなかった

勝負つてのはほんとにひとつの出来事で決まるもんなんだな…

そんなことを思いながらある場所を目指す

そこは…

附属生徒会室

勝利の鍵はそこにある!!

相変わらず附属棟裏では暴徒の一方的な攻撃が続いていた

「サヨ…聞こえるな？」

『あ うん 聞こえるよ』

「特別教室棟の2階を経由して附属棟2階に来てくれ
間違っても附属棟1階には近付くな」

『あ うん 了解 いまから行くな』

サヨの返答に おう とだけ答え 再び視線を外に移す

… 敵勢力 およそ40人

味方勢力 2 隊 1 6 人…か

俺は附属生徒会室から持ってきた黒い塊をを懷から取り出す

…弾数は 6 0 ちょい

昔クソ親父に教わって以来だからギリギリ足りるかどうかな…

「附属棟裏で抗戦中の役員に告ぐ

ただいまより附属棟 2 階より暴徒へ制裁を下す暴徒に俺の位置がバ
レるのは遠慮したいから決してこっちを見るな

暴徒にいま以上に近付かず かつ 暴徒への牽制を続けてくれ

…もう少し堪えてくれよ」

かろうじて了解を言える役員はいたが あまり長くもちそうにない

…とつとと片付ける！！

俺はゆっくり窓を開き 黒い塊を構えた

パンツ！！ パンツ！！

暴徒の用いる癩癩玉とは微妙に違う音が響く

次の瞬間には 暴徒が2人倒れた

…当たる！！

クソ親父に教わったのは実弾だがこれは違う ゴム弾だ

死ぬことは基本的にないが当たれば痛い

悶えるほどに

俺の口元に笑みが浮かぶ

まさかユキのサディスティックなアイテムがほんとに役に立つとは…

…というかゴム弾って サディスティックなアイテムじゃ済まない
よな

…しかしいまはそんなことを考えてる余裕はない

暴徒集団は騒然としていた

おそらくそれなりのエリートで組まれた集団なのだろうが―突然味
方が倒れたため焦りを隠せないでいる

…が

次の瞬間には暴徒は攻撃を再開していた

「くっ…中途半端な攻撃だと逆効果かつ!!」

盛大に舌打ちをし 再び構える

パンツ!!パンツ!!パンツ!!パンツ!!

マガジンに残っていた弾をすべて撃つ

今度は3人うづくまる

…ちっ 1発損したか…

さすがに暴徒集団も状況がおかしいことに本格的に気付いたようだ

役員への攻撃を止めたわけではないが―数人があたりを気にしている

俺は窓の脇に身を潜めながら様子を伺う

この位置なら暴徒には見付からない

…だが ここからは撃てないために撃つときは窓の前に立たざるを得ない

そのタイミングで暴徒に見られたらバレル

だから慎重にいききたいところだが…

時間をかければかけるだけ味方の役員が傷付く

俺には役員を駒扱いすることは…できない…！！

空になったマガジンを捨て 新しいのを突っ込む

カチャ という音が鳴る

相変わらず火薬の臭いと破裂音が止まない

すう と息を吸い 即座に狙いを定める

パンッ！！パンッ！！パンッ！！

3発撃ったところで慌てて身を隠す

………バレたか！？

間違いなくこっちを見たヤツがいた……！！

…しばらく無音が続いたが―

パンッ！！

俺のすぐ頭上で破裂音

「なっ…やっぱりバレたか…」

それは立て続けに続いた

慌てて廊下を這いながら移動する

バレないように別の窓を開け…

パンッ！！パンッ！！

2発撃ち　すぐ壁に隠れる

どうやらまた1発外したようだ…

やっぱりじっくり狙いを定めれない分命中率が下がるか…

ただでさえブランクがあるというのに…

暴徒の攻撃は2方向に分かれていた

一方は同じ校舎裏の役員に

もう一方は俺のいる附属棟2階へ

痼癢玉とロケット花火の雨が降り注ぐ

学園の設備がいたため窓はまだ割れていないがずいぶん危険な状況だ

一般生徒が附属棟に近付けないように手配しといてよかったよ…

だがしかしだ

この騒動に役員を割きすぎている…

校舎裏に2隊16人

バリケードの裏に1隊+αで10人以上

附属棟閉鎖に2隊16人

さらに校舎裏へ2隊16人を応援に向かわせてある

…他の場所が隙だらけだ

いまだけは他の場所で騒動が起きないことを祈るしかないな…

パンツ！！パンツ！！

ぴゅーパンツ！！

「くっ…そつたれがあー！！」

正直他のことを考えてる余裕なんてねえ

結構暴徒の数が減ってきたが それ以上に俺の体力 精神力 そして残弾が減っていた

「くそっ…あとちよいじゃねえか…」

しかしまさにその時救世主が…！！

「は ハセ君…お お昼ご飯…持ってきたよお」

…この救世主は状況を打破してくれない代わりに俺の空腹は救ってくれるそうだ

学祭戦記、夏 ― 救世主と書いてヒーローと読む

「…って きゃっ!!」

かわいらしい悲鳴をあげ 廊下に入る手前で立ち尽くす

そりゃそうだ

ロケット花火や癩癪玉がどんどん廊下に飛び込んで来るんだから普通なら驚くよ

「そこで待ってる!!」

音に掻き消されないように叫ぶ

聞こえたかどうか分からないが サヨはその場から動こうとはしない

俺は空になったマガジンを捨てる

残りの弾数と暴徒の数がほぼ同じ…！！

もう外すわけにはいかない！！

パンツ！！　パンツ！！

…よし　2人倒れた！！

確認を終え　すぐに回避行動に移る

窓から相変わらず危険物が飛んでくる

相変わらず一進一退か…

「……ふっ」

息を吐き 再び構える

パンツ！！カシャン！！

「なっ……くうっ！？」

俺は1発しか撃ってないが…2人倒れた

「は…ハセ君！？」

驚いてサヨが叫ぶ

倒れたのは暴徒1人と…俺だった

「くっ…そ 俺は大丈夫だっ…！！」

痛みを堪え叫ぶ

どうやら銃身にロケット花火が直撃したようだ

直接俺の体に当たったわけではないからそこまで心配はないが…

弾かれた手には鈍い痛みが走る

しかしそんなことくらいで休んでいるひまはない

手から飛んでいった銃を拾いマガジンを抜…こうとして止まる

…抜けない！？

マガジンが抜けない…！！

「…くそっ！？」

さっきの衝撃でマガジンが抜けなくなっちゃったのか！？

マガジンは空だ…

銃の中に1発残ってるだけ

…だがそれも普段通りに撃てる保証はない

…暴徒はあと10人

ゲームオーバーか…？

「くそつたれがあー！！」

思いつ切り壁を殴る

再び鈍い痛みが拳に伝わる

「ここまで…なのか…？」

壁にもたれ掛かりズルズルと力無くその場に座り込む

こっちの事情など知らない暴徒は相変わらず攻撃の手を緩める気配がない（とは言え10人しか残ってないが）

俺はマガジンの抜けなくなった銃の安全装置をロックし 懐にしまった

…お手上げた

引き上げよう

懸命に戦っている役員には悪いが 俺じゃダメだったよ…

ポケットから秘密兵器を取り出し 役員全員のイヤホンに回線を繋
ごうとした

―が それは一件の通話により憚られた

『ふっ…会長 救世主ってのはこういうときに現れるものだよね？』

雑音の中に知ってる声が確かにあった

「
…本多？」

『まあ見ている 俺の実力をな』

通話終了

…いつたいたんだっただ？

その疑問も…すぐに吹き飛んだ

…サヨの大声で

「ハセ君 あれっ!!」

サヨが校舎裏を指差す

立ち上がり 目線をやると…

何かが猛スピードで走っている

走っている？

役員の脇を抜け―

暴徒に…突っ込んだ

…突っ込んだ!?

「なっ…なんだあれ!？」

いや…俺はアレを知っている…

あのフォルム あのエンジン音

間違いない…護送車だ…!!

護送車と言っても車じゃない

どっちかというと立ったまま運転するフォークリフト的な感じで
運転手の座る席がなく ちょっとした荷台がある

なぜ護送車と――生徒会内部の人間のみだが――呼んでいるかと言つと

色々な物を運ぶからだ

表向きには各露店の在庫や運ぶのが大変なものを運ぶためにあると
されているが…

本当の目的は拘束した暴徒を護送すること！！

詳しくは俺でも知らないが――

拘束された暴徒はその場で気絶させられ ” 棺桶 ” に入れられる

そして棺桶を監獄に運ぶのだが…

監獄の場所はレベル5のトップシークレットなので 一般生徒にバレないようにする必要がある

そこでカモフラージュとして各露店の在庫などをついでに運んでいるというわけだ

つまり一般生徒は護送車を運転するのが生徒会の護送隊だとは知らないし

そもそも護送車という名前も知らないわけだ

…だが 目の前で爆走してるのは普段の護送車との決定的違いがあった

それは…スピード

護送車は校内も普通に走るため速度10km/h以上出ないような造りになっている

…だがどうだ？

眼下の護送車はまるで暴れ馬だ

残っている暴徒をまるで蹂躪するかのように跳ね飛ばす

護送車のフロントが丸いために跳ね飛ばされた暴徒は重傷を負うことはないだろうが―戦意を削ぐには十分だった

『改造に手間取った…』

ほんとならもう少し早く登場できる予定だったのだがな』

再び本多の声が今度はイヤホンに響く

「はは…ははっ」

なんとかなった…

というか いままでの苦勞はいったい…

役員が次々と暴徒を拘束していく

さらに護送車が2台ほどやってきた

…これは改造してないみたいでゆっくり近付いてきていたが―

『会長だけに美味しいところを持ってかれるのは御免だからな』

1番美味しいところを持つてった人間が何を言いますか？

「はあ…」

ため息が まだ火薬の臭いのする廊下響いた

騒動が片付いてきていた

校舎裏に護送車はもうないし バリケードも片付けた

「ふう……」

だんだんと淡いオレンジに染まりつつある空を眺めてため息が出た

……って もうすぐ夕暮れ!?

「やばい!! サヨ 急ぐぞ!!」

「ふー?」

たませんらしき塊と格闘しているサヨの手を引き走る

「間に合わなくなる……!!」

「はひひ?(何に?)」

「…決まってるだろ？メインイベントだよ」

俺の口元に笑みが戻ってきていた

ケリをつけようか…渋谷！！

「こいつの調子は問題無かったな」

大活躍の暴れ馬 改造護送車を車庫（監獄の付近）に戻すためにやってきたはいいが――

「…本当にこつちなのか？」

「間違いないわよ！！
だってお姉様の匂いが――」

「だから匂いって何よ！！」

「じゃあ他に手がかりがあるの！？
ないなら私の嗅覚を頼りにするしかないでしょ！！」

…謎の女子生徒×3が明らかに怪しい会話をしながらうつろっている

「この辺のハズなのに…」

監獄の入口付近で！！

会話内容から察すると―監獄に収容されている人物を探しているようだ…

俺としてはさっさと護送車をしまいたいのだが―

いましまいに行けば　この生徒×3に監獄の位置がばれる可能性が大きい

この生徒×3を不審生徒として監獄送りにできないこともないが―
明らかな暴徒行為でないため監獄送りにできない可能性がある

それに―こちらから話し掛けるのは不自然

状況は不利だ…

こっちは暇じゃないんだがな

「あの　ちよつといいですか？」

頭を抱えていると　その生徒のひとりに声をかけられた

「あの…お姉様―じゃなくって　サトミ様は監獄に居るんですよね？」

サトミ…ああ　放送ジャックしたヤツか

「生徒会側に捕まったみたいだし　そうじゃないのか？」

曖昧な返しをしたが　確かにサトミは監獄だ

なにせ俺が護送したのだからな

しかし相手はどうやら俺が役員とは気付いてない——つまり護送車の存在を知らない——みたいだ

俺は割と有名だと思っていたが 基本裏方なのがラッキーだったか？

「監獄がどこかわかりますか？」

「監獄？悪いけどちょっとわかんないな」

まあ 知ってるがな

「この辺らしいんですけど…そうよね？」

生徒A（とでも言おう）が生徒Bに聞く

「そのはずなんだけど…」

「けど？」

「この人からお姉様の匂いがするのよ」

そういつてこっちを見る生徒B

同時にAとCも俺を見る

「匂い…？あいにく心当たりはないんだが」

内心ヒヤツとしたが そんな曖昧なものはスッパリ否定すれば問題ない

向こう側に気のせいだと認識させれば俺の勝ちだ

「気のせいですか…」

ほら もう落ちた

どうせ特に経験もない素人

これで問題解決―

「いえ そんなハズはないです!!
確かに匂いがするんですよ!!」

「……………そうか」

仮にも女子に真つ正面から匂うと言われたらへこむな…

別に俺が匂ってるんじゃないけどもへこむ

…はっ 精神攻撃か!?

こいつ…なかなかやるな

「そろそろ失礼しても構わないかね？」

あまり暇ではないもので」

ごまかせないなら逃げるだけ

適当にあしらって解散してもらうしか――

「怪しいですね やっぱり怪しいです」

予想以上に粘るな

「…仕方ない これ以上邪魔するなら生徒会に報告するぞ」

「卑怯な!!」

ああ…いい加減うっとうしい

そつうんざりしていた時だった

見慣れない人影が門のところに見えた

…なんだ アイツは？

いや 特に気にするような事じゃないか

いや でも――

「聞いてるんですか？」

声で現実に引き戻される

「いや 聞いてない」

「うつ…ストレートに返された」

やっぱり嫌な予感がする

「悪いが野暮用が出来た 失礼する」

「えっ？」

生徒A B Cが返事をすると同時に俺はアクセルを入れた

嫌な予感を振り切るように

学祭戦記、夏 ― かりそめの感情

ついこの前まで綺麗だったが　ここ数日でボロボロになった靴が舗装された道を踏み潰す

ただあてもなく歩いていた

― いや　目的はあった

だが…どこにもない

俺が求める場所は　どこにもない

もつ…3日ほど歩いただろうか

…ここはいいたい どこなんだろうな

どれだけ歩いても 視界を埋め尽くすのは等間隔で植えられた街路樹と ところせましと建てられた同じような建物

まるで見てる俺が錯覚するほどそっくりで単調なシルエットのそれらは 俺を嘲笑うように立ちはだかっていた

…しかし さっきからどうも様子が違う

真昼間だと言うのに人通りがなく車も一台たりとも通らない

住宅は無く　ただ無表情な街路樹とずいぶん気合いの入っている太陽が俺を見下ろす

無意識に歩いていたはずだが　何故か吸い寄せられるようにその先に向かおうと足が動く

とつくに足の感覚なんて無かった

意識も朦朧とする

それでも自然と体が動いた

… ああ　そうか

きつとこつちにあるんだな

…俺の望む場所が

どれくらい歩いただろう

視界が開けた

小高い丘のうえに　それはあつた

「…学校？」

しかし記憶の中の学校よりも幾分も騒がしい

…学校ってこんなに騒がしいものだったか？

その疑問は次の瞬間解けた

「第7回…学園祭」

ずいぶん大きな門の隣に　それに負けじと自己主張をしている看板にそう書いてあった

「…ずいぶん楽しそうじゃねえか」

それを見て　ここ数日忘れていた感情が蘇る

ああ…俺にもまだ感情はあったのか

まだ俺は…生きているのか…

「ふっ…ふははっ…」

俺の中にあつた何かが　音を立てて崩れた

「…壊れちまえよ」

もう失うものはない

もうなにも俺にはない

俺だって…幸せでいたかった

この前まで…幸せだった！！

神は不平等だ

だから…味わえればいい

俺と同じ気持ちで

俺が代わりに教えてやるんだ

絶望という2文字を

学祭戦記、夏 ― 甘酸っぱい？

たっ たっ たっ たっ …

「ま…待ってよ ハセ君」

「あんまり悠長なことは言ってられねえんだけど…」

階段を駆け上がる

少し後ろからサヨがついて来る

「…まだ来てなきゃいいけど」

「だから…さっきから何をぶつぶつ言ってるのさ
ちゃんと私にも説明してよお」

後ろから抗議の声が上がる

「着いたら話すよ　だから早くしろって」

階段を登りきった俺は右手でドアノブを握る

左手にはID

サヨが追いつくと同時に俺は扉横のリーダーにIDカードを一気に滑らせた

がちりと　鍵の開く音

ドアノブを回し　外に出た

「…間に合ったみたいだな」

オレンジに染まり始めた空が俺達を出迎えた

特別教室棟 屋上

先客はいない

「…勝った」

不意に笑みが零れる

「もう 説明してよ なんで笑うの？」

「…これが笑わずにいられるか？」

扉を閉め 再びIDを使って鍵をかける

「この勝負 俺たち生徒会の勝ちなんだぜ？」

サヨは驚いた

そりゃ当然だろう

まだ終わってもないのに勝利を確信したと言われたのだから

「えっ…ほんとに？」

「ああ この場所に奴の…渋谷の切り札がある
…それこそが俺の切り札だ」

サヨの頭上に？が浮かぶ

「奴は必ずここに来る その時を待つだけでいい」

「じゃあしばらくここから動かないの？」

「ん？そりゃそうだろう
問題でもあんのか？」

「え…えつとお…」

何故かもじもじするサヨ

「だからどうかしたのか？」

「あ いや…そのね」

そして顔を赤らめる

はっ…まさか

夕方の屋上

思春期真っ盛りの男女がふたりつきり

扉に鍵がかかっていて 誰も来れない

…つまり そういうことか？

「ううー やっぱ無理っ！！」

そう言っただけは自分のIDを取り出して鍵を開けようとした

サヨも生徒会の重要人物として あらゆる場所の鍵を開ける権利を
持つ

…って なにやってるんですかお嬢さん！！

「おい どうしたんだよ！！」

とっさに肩を掴んでしまった

「あ…悪い」

「う ううん 大丈夫だから…」

「どうしたんだよ急に」

「だって…言つの恥ずかしいし…」

恥ずかしいって…やっぱりそうなのか…？

だからって逃げなくても…

「と…というか察してよ！！」

そして何故か怒鳴られる俺

…いま渋谷が来たら計画がパーだな

しかし…察しろって…やっぱりそうなのか？

すると開き直ったサヨが半ば叫ぶようにして言った

「仕方ないでしょ？

あんなに食べたりしたんだからお手洗いくらい行きたくないじゃない！！」

そりゃそつだ

なにせあんなに食べたんだから―…って

「…お手洗い？」

…あれ 予想外

「もうっ 恥ずかしいんだから何回も言わないでよ！！」

「わ 悪い…あ ここからなら附属棟のが近いぞ」

「あ う…うん じ じゃ行くね」

そう言つてサヨは脱兎の如く去つていった

…悪いことしちゃったかな

や まあ いまのは仕方ないよな

いまのシチュエーションじゃ勘違いもするよ

そう自分に言い聞かせて俺は再び鍵をかけた

さてと…渋谷が来るまでなにをしようか？

話し相手もないし

…そうだ 筋トレをしよう

取っ組み合いでも負けないような美しい肉体を作り上げてみせるぜ
！！

「まずは…腕立て伏せでもやるか」

そういつて腕立て伏せの体制になった途端に―腹の虫が鳴った

目の前にはサヨが買ってきたホットスナック

「まずは腹ごしらえだな…」

サヨが買ってきた物が詰まっている袋を見る

しかし買ってからずいぶん時間が経ってるからな…

フランクフルトを1本手にとり かじりつく

「見事に冷めてるな… まあ仕方ねえな」

相当空腹だったみたいですぐに焼きそばのパックにも手をつける

10分もしないうちに俺の胃は満たされ 袋はずいぶん軽くなって
いた

…しかしサヨは遅いな

…まああれだ きつと他の役員に捕まったりしたのだろう

うん きつとそうだ

変な想像するのは失礼だしな

うん うん…

すると次の瞬間 扉の鍵が開く音がした

…サヨか？

いや…

違うと本能が告げている

とっさに立ち上がる

夕日を背に仁王立ちになる

扉が…開いた

その先にいた人物は…

「ようこそ 貴様の終焉の地へ なあ…渋谷」

俺たちの…勝ちだ!!

学祭戦記、夏 ― 警鐘

足音も気配も消して歩く

…ふっ 完璧だ

開会式の停電騒動に始まり

放送室のジャック

中庭での犯行予告に

サトミと武田の放送ジャック

附属校舎裏の騒動での本多の登場は予想外ではあるが…誤差ではない

…すべて想定範囲内

計算通りだ

あとはフィナーレを残すのみ

…どうやら俺の勝ちのようだな 長谷川

あらかじめ用意しておいた屋上のキーのコピーをポケットから取り出す

こいつの入手には手こずったが…もう過去の話

ここにフィナーレに相応しいものを用意してある

…さすがの俺もこいつの用意には少し手間取った

以前頂戴した分だけでは物足りなかったからな

しかし そこは俺だ

抜かりはない 極上を用意した

キーをリーダーに通す

…鍵の開く音がした

あとは閉幕の時間にあわせてセッティングするだけ

いざ 勝利の祝砲を!!

ぎい… と音を立てて扉が開く

…聞こえないはずの声が聞こえた

「ようこそ 貴様の終焉の地へ なあ…渋谷」

そこにいたのは…長谷川！！

「なつ…何故ここにいるのだっ!？」

「何故って？そりゃわざわざお前を待ってたんだよ 渋谷」

そう言って 驚きのあまり硬直する俺の手首に何かが触れる

…手錠 いや 手枷か

しかもこいつは…本多の手作り…

そんな…終わったのか…？

俺の計画が…俺の夏が…！！

「な…何故わかった…？…俺がここに来ることが」

いまだに信じれない 信じたくない！！

誰も知らないはずだ！！

武田やサトミにですらフィナーレの詳細は言っていない

確実に成功を…勝利を収めるために すべてひとりで準備をしてきたのに…！！

「知ってえか？」

長谷川が余裕の笑みを浮かべる

…去年まではこの笑みを見ると心強かった

だがいまは違う…

いまは…敵同士なのだから

「ロコミだよ たった一件のな」

「な…っ！？ロコミだと！？しかもたった一件？」

まさか…作業しているところを見られたとでも言っのか！？

そんなはずはない！！

常に真夜中 明かりも点けずに作業に明け暮れていたのだぞ？

しかも特別教室棟の屋上だ！！

附属棟や本校棟よりも高い位置にあるこの場所をどうやって見たと言っただ！！

「でたらめを言うなよ長谷川！！
誰にも見つかるはずはなかった！！」

「だが現に俺はお前がここに来ることを知っていた それが事実だ
違うか？」

「くっ…」

ぐっの音も出ない…

「ははっ…さすが長谷川だな…お前を失ったのが本当に惜しい」

負け惜しみでもなんでもない素直な感情が零れる

「もう一度…一緒に暴れたかったぞ…」

それが自然と口から漏れた

「悪いが渋谷 俺はこっち側なんだ」

長谷川がどこか懐かしむように言う

「例の賭けに負けたからか？

だったらもういいではないか！！

どうせ来年になればいまの総会長は消えるのだぞ？

もうお前は自由に―」

「いや あいつがいなくなっても俺はこっち側だ」

「…親父へのせめてもの抵抗か？」

すると長谷川は一瞬眉をひそめたが すぐにため息をつき

「…否定はできないな
まあこんなことをやっていても何も変わらないんだけどさ…」

「ならばやはり…」

「でも俺はこっち側にいたいんだよ 自分の意思で…な」

「そうか…まあそこまで言うなら仕方ない…体育祭を楽しみにしておこつ」

「体育祭？」

「ああ 体育祭 一年ぶりにお前と…いや違うな
一年ぶりに√3再結成だ」

「そうか 体育祭は暴徒も生徒会も関係なかったな
…確かに楽しみだよ またお前らと一緒にバカやれるのがな」

「だったらやはり…」

「それは…もう言つなよ」

「…ああ そうだな」

しばらく沈黙が場を支配していたが 長谷川が思い出したように言
った

「さて ID出せよ たんと減点をくれてやる」

「ふっ…仕方ない これが敗者の定めだからな」

そう言つてポケットに手をつ込んだと同時に

学園を大音量のベルが揺らした

学祭戦記、夏 ― 最後の始まり

「…畜生 絶対おかしいぞ!？」

今日は早起きははずだ

目覚まし時計を7個もセットした

そしてその騒音に飛び起きた

身支度をしようとした

そこまでは覚えてる

そこまでは覚えてるのに…

…そこからの記憶がないのはなぜだ？

しかも太陽は西に傾き 空は茜色だ

「どうなってるのよ…」

そういえばここしばらく 気付いたら寝てるってことが多々あったな…

「もしかして…私病気!？」

ナルシスト!!…じゃなくて…縄プレイ？ナルコプレシーだっけ？」

ぶつぶつと呟きながら廊下を歩く

「あーもう!!…イイとこ見せようと思って張り切ってたのにーじゃなくって!!…」

昨日間違えて部屋に持ち帰ったイヤホンマイクを装着する

でもまあわざわざ生徒会室まで取りに行く手間が省けたのでラッキーだ

附属校舎に差し掛かると 入口あたりに見慣れない男の人がいた

一般の人みたいだ

まあ学園祭は一般人も来れるから不思議じゃないけど――

ぽーっと突っ立ってるし なんか雰囲気がおかしい気がする

服装だってとても整えてきたようには見えない

声かけた方がよさそうだ

私だって生徒会役員なんだから！！

「あの　どうかしましたか？」

この場に長谷川がいたら驚いただろうな

なんたつてこのユキ様が丁寧な口調なんだから

…しかし　相手の反応はなかった

「あの　大丈夫ですか？」

だから今度は肩を軽く叩いてみた

もちろんいつもみたいな破壊力は皆無だ

相手を怒らせることなく紳士的に―って　私女の子じゃない!!

「…てやる」

相手が反応した

しかしよく聞き取れなかった

「はい？」

「ブッ壊してやる！！」

そして―相手の口から飛び出したのは 思ってもみなかった台詞だった

「なっ…！？」

気付いた瞬間には男につかまれ 腕を首にまわされた

しまったな…いつもなら反応できたのに さすがの私でも寝起きす
ぐには無理よ…!!

近くにいた生徒が叫び声を上げる

「ちょ…貴様っ!!」

突然のことに口調が戻っているが こんなヤツに使う丁寧口調はない

「…黙れよ」

「ふざけんじゃないよ!!
なんで私が黙らなきゃいけないの!？」

「…自分の置かれている状況をよく理解するんだな」

「なっ…貴様…!!」

いつのまにか自分の首筋に刃物が

「…てめえは道連れだ」

「…道連れ？」

「いいから屋上に案内しやがれ」

「…なんでよ」

「いいからさっさとしろ!!」

…余計なことは考えるんじゃないよ」

「…くっ」

普段ならこの程度のヤツなんて一瞬で片付けれるのに…

いわゆる人質の体制だから動くに動けない

…ひとまず従うしかなさそうね……

「…わかったわ」

そう言つと首筋の刃物が少しだけ離れた

「さっさと歩け」

「…くっ」

そして言われるがまま歩きだす

…いつのまにか学園内に非常ベルが響き渡っていた

学祭戦記、夏 ― 救世主は従僕

非常ベルが鳴り響く

「渋谷 てめえ…!!」

元凶の胸倉を思いつ切り掴み上げる

「待て…俺は知らんぞ!!」

しかし 渋谷本人も動揺しているようだ

「な…に!?!お前じゃねえのかよ!!」

つまり 渋谷じゃない…!!

くそっ どうなってんだよ!!

なんで急に非常ベルが!?

『だっ…代行!!』

するとイヤホンから役員の叫び声が

「いったい何があった!？」

『そっ…それが…刃物を持った謎の男が附属棟に…!!
現在人質を連れて附属棟を移動中です!!』

「なっ…!？」

刃物…？

人質…？

謎の男…？

「暴徒じゃねえのか!？」

『はいっ！！身なりのちゃんとしないう中年男性
…人質はユキさんです！！』

は…？ユキだって…！？

いや だって…ユキは自分の部屋で気絶してるはずじゃ…

まさか…起きたのか！？

「サヨ！！聞こえるか！！」

『あ…うん ハセ君？』

「さっきの聞こえてたよな？
いますぐユキに電流流せ！！」

人質が人質としての機能を果たさなければ犯人は人質を解放せざるを得ない

『そっ…それが…スイッチ部屋に置いてきちゃった…』

「なっ…まじかよ…」

『…ゴメンね』

「いや…電流を流すのは危険だろう」

「なっ…渋谷？」

「あれを見る」

そういつて手枷に収まっている腕で指差す

附属棟の屋上を

「…そうか 確かにな」

そこにはちょうど校舎から出てきた犯人とユキがいた

そのあと数人の役員が屋上に出てくる

「急に気絶させたら 反動等で刃物が首を裂く可能性が高い」

くっ…確かにその通りだ

ユキも刃物のせいでいつものバカ力を使えないでいるようだし…

…正直かなりヤバい

非常ベルが鳴ったことで 各棟を繋ぐ渡り廊下がシャッターで閉鎖されているから 俺が直接附属棟の屋上に行くのは無理か…

いや待てよ…

俺にもできることがあるじゃないか…!!

俺は思い出したように胸元から黒い塊を取り出して見つめる

「ほっ…ゴム弾か？」

「ああ…そうだ」

「まさかとは思いが―ここから狙撃でもするつもりではないだろうか？」

「…悪いかよ」

「バカを言え！！この距離だぞ！？
素人の腕で当たるわけがない！！
それに もし人質に当たったらどうする？
そもそも犯人に当たったとしても―」

「じゃあどうしろってんだよ！！」

渋谷の他人行儀な説教に やり切れない想いが爆発した

「お前は俺に 大事な仲間のピンチなのに指くわえて見てろって言うのかよ！！」

「落ちて着け長谷川！！
いまお前がわめいたところで何も変わらないだろうが！！」

お前のすべき事は他にあるだろうがっ！！」

「くっ…どうしろってんだよ…！！」

どうする？

どうすればいい？

俺は何をすればいいんだ…？

本当に俺はここでただ指をくわえてることしかできないのか…！！

俺が直接出向いて犯人を説得することさえできれば…解決の糸口になるかもしれないのに…！！

犯人に直接………直接？

…そうだ　もしかしたら！！

「サヨ！！お前まだ附属棟にいるのか！？」

『あ　うん　そうだけど…？』

勝機…見つけた！！

「屋上に向かってくれ！！」

『…ええっ！？』

「…俺の代わりに　犯人の説得に行ってくれ」

『で…でもっ…！！』

「いま附属棟の屋上にいる奴らじゃ無理だ…行ってくれ！！
お前なら…できる！！」

『う…わかった』

…頼んだぞ サヨ！！

「もっと適任者がいたんじゃないのか？」

しかし 渋谷が口を挟んできた

「な…適任者だと？誰だよ」

「ふっ あいつだよ」

そう言つて再び附属棟の屋上を指差す

そこには…

俺の最も信頼している役員が

「…ははっ 捕らわれの暴君女王を救う騎士―…いや 隷属の登場か」

思わず冗談めいた台詞が出る

「ははーっ ナイスシチュエーションだな」

渋谷の口からも冗談が洩れる

あいつなら安心だ…

頼んだぞ…本多ー!!

学祭戦記、夏 ― 交渉人本多の事件簿

階段を駆け上がる

…ハセ君に頼られてるんだ!!

私が頑張らなくちゃ!!

そう意気込んで 勢いよく屋上に飛び出した方がいいが―

「…あれ 本多君…?」

そこに 彼はいた

「俺に任せろ」

「でっ　でも…」

「俺に　任せろ」

…なんだろう？

どこか　いつもの本多君と違う気がする…

雰囲気というか…なんというか…

「わ　わかった…」

だから　頷くしかなかった

俺が1歩2歩と犯人に歩み寄る

「来るなっ！！こいつがどうなってもいいのかっ！！」

そう言って突き付けている刃物を強調する

さすがに危害を加えられたら困る

だから俺はいったん立ち止まり

「ユキ 聞こえるな」

と マイクに向かって言った

「お前のイヤホンマイクを 犯人に付けさせる」

その指示に一瞬場がざわついた

だが たしかにそれは犯人との交渉には必要不可欠

それを理解した他の役員が固唾をのんで見守る

舌打ち混じりで犯人は俺の言う通りにユキからイヤホンマイクをひ
ったくり 自分に付けた

『…これで満足か クソガキ』

明らかに敵意の籠った声が鼓膜を揺らす

「上出来だ 褒めてやろう」

それを軽く受け流し わざと挑発するように言う

交渉術—というか話術で大切なものは 相手を思い通りに誘導する
ことだと思ってる

「では聞こうじゃないか 貴様の言い訳とやらを」

そして 相手を思い通りに操るには 冷静さを奪う必要がある

『言い訳だと…？』

「ああ そうだとも

犯罪に手を染めた哀れな人間の無様な言い訳だ
それともなんだ？理由もなく貴様は罪を犯してるのか？言い訳も用意できんほど残念な脳ミソなのか？」

『てめ…！…！』

とは言え 冷静さを奪いすぎて暴れられても困るからほどほどにしなければ

「言つのか？言わないのか？」

明らかに俺は犯人を挑発しているように見えるだろう

だがしかし理由がある

要は―カウンセリング

形は強引だが 誘導して相手に話をさせる

そしてその話をもとに相手を説得するのだ

確かに もっと強引に―つまり殴り合いで終わらせることも俺なら
できる

だが それはしたくない

なにより―俺はこいつが根っからの悪者には見えない

感情的になって起こした犯行

それならば説得の余地があるし―なによりこいつのためだ

だから俺は賭ける

僅かでもいい…こいつの理性に!!

『これだから…』

これだから絶望も知らずにぬくぬくと育ったてめえらは…!!
いいだろう…教えてやるよ!!』

そして男は語りだした

『俺はな…ついこの前までは平凡に過ごしてたんだよ…
会社でもな 確かに出世街道を突っ走ってたわけじゃねえが うま
くやってた

家庭も同じだ ごく普通に妻子と暮らしてた』

なるほど ありがちな

…もしかするとこいつ―

『…だが それは急に訪れた
クソ社長のせいで会社が倒産した』

男は削れるほど強く歯に力をいれているようだ

ぎりぎりという音がイヤホンから響く

やはりこいつ…この前の事件の関係者が

『…その日 家に帰って俺を出迎えたのは妻子じゃなくてアパート
の大家だった
世間を騒がせている問題の会社に”勤めてた”ヤツなんかに住んで
てほしくないからでてけたとよ…』

男がここまで話すうちに
たいていの役員は男を襲った不幸を理解していた

ついこの前起きた事件

この日本区だけでなく 世界規模で損害が出た事件

おそらくこの男はその会社に”勤めていた”のだろう

そしてそのせいで妻子からも世間からも見放されたと そう”勘違い”していると

『アパートの部屋のものは全て勝手に処分され
地味に貯めてきた貯金は妻が持ち逃げ…
残ったのはあの時着ていたこの服だけだ…！！
それから俺は数日間さ迷い続けた！！
ろくに食事も摂れずに ただひたすら自分の死に場所を探してな！
！』

男がだんだんと声を荒げていった

誰も口を挟まずにただひたすら聴き入る

『そしたらどうだ！？』

貴様らは世間での出来事なんて何も知らず 楽しそうにぬくぬくと生活してやがる!!

何の苦勞も知らずに!! 毎日食事を与えられ!! 幸せに過ごしてやがる!!

…だから壊してやるんだよ!!

絶望なんて知らない貴様らに 俺と同じ絶望を味わわせてやる!!」

男の悲痛な叫びは静かな学園中に響いた

…誰も何も言えなかった

俺以外は

「終わりか？」

『な…っ！？てめえ…いまなんて！？』

「貴様のくだらない演説は終わったのかと聞いている」

『くだらないだと…！！』

これだから絶望を知らないガキは―』

「はっ 絶望！？

貴様のどこに そんな絶望する要素がある？」

『なん…だと…！！』

「その程度で悲劇の主人公気取りか？
…笑わせるなっ…！！！！」

それは 誰にも聞かせたことのない叫び声

『てめえ…何が言いてえんだよ!!
てめえに俺の気持ちがわかるのかよ!?!』

「貴様の気持ちだと?
そんなもん…わかるわけねえだろうが!?!」

『はっ…そうだろ?
なのになにを偉そうに—』

「“その程度”で絶望を語る貴様の気持ちなど理解できんわ!!
貴様は自分が世界で一番不幸だとも思ってるのか?」

場が静まり返る

「…昔話をしてやろう」

『昔話…だと?』

「今からちようど…10年前だ
世界中を震撼させたひとつの出来事が 北アメリカ大陸で起きた」

この話を口にするのは何年振りだろうか…

誰も何も言わずにただ聞き入っていた

10年前の北アメリカ大陸での出来事…

A P U 第2軍事研究施設爆破テロ

死者500人超

生存者：1人

公式発表でそうなっている今世紀最大のテロは 多くの命を奪った

『それが…どうしたってんだよ』

犯人が俺を睨む

「わからんか？

その唯一の生存者が目の前にいるんだぞ？」

半ば自嘲気味に言う

周りからは驚きの声があがる

『はっ…そんなでたらめ 誰が信じるかよ!!』

そうだ そう簡単には信じれない

…俺だって 信じたくない

俺が唯一の生き残りだなんて

「…本邦初公開だ　しかとその目に焼き付けるがいい」

そう言っ
て俺は　夏でも毎日必ず身につけている長袖上着を脱ぎ
右手にはめている　二の腕まですっぽり隠れる手袋を外した

今度こそ　全員が息を呑んだのがわかった

学祭戦記、夏 ― 2つの秘密

『な…なんだそれは…』

それは 俺の右腕に”装着”してあった

黒く 無機質な ”腕”

「当時の1番の研究テーマーそれがロボット兵器 そして武器としての義手義足の開発だ」

辺りに響く俺の声は ひどく無機質な感じがした

『そんな…そんなこと発表されてないぞ…!』

「当たり前だろ わざわざおおっぴらにバラす必要がどこにある？
”兵器”の開発なんだぞ？」

『……………』

「俺は…あの事件で全てを失った
施設で働いていた両親も 右の手足も…

何度も思ってたさ 何故自分は”生き残ってしまったのか”ってね
いつそあのとき死んでいれば―幼かった俺はいつもそう考えていた」

まるで世間話をするような口調で すらすらとあの時の想いが口か
ら零れる

「身寄りも 利き腕も 利き足も なにもかもない
当時から趣味だった機械いじりも 腕を失ったことでできなくなった
失ったものはなにもかも戻らないと思っていた…あの人に出会うま
では」

『あの人だと？』

「その人は俺の故郷である日本区で俺を迎えた
そして日本にいた技術者の協力のもと 施設で研究していた義手義
足の試作品を完成させた…それがこいつだ
いまでは本物の手足と全くかわらない
…毎日メンテナンスが必要なことを除けばな」

『だから…だからなんなんだよ！！
だいたいそんなの信じれるかつ！！』

「…まだ現実から目を背けるのか？」

『なん…だと？』

「まだ貴様は現実から逃げるのか と聞いている
不幸を嘆いて何になる？何が変わる？何か変わったか？」

『う…うるさいっ！！』

「貴様が不幸？…確かにな
何が不幸かも知らずに立ち止まっているだけで何もしようとしな
い自分自身を見失っていること自体が不幸なんだよ！！
いい加減目を覚ませっ！！！！」

『黙れっ！！てめえらなんか話が信用できるかよ！！
世の中綺麗事だけじゃどうにもならねえだろうが！！』

そう叫んだ犯人は人質にしていたユキを突き放した

犯人の目が潤んでいるように見えたのは気のせいではないはず

…あと一押しだ

『信じれねえ…わかんねえ…わかんねえよ…
”いまさら” どうしろってんだよー！！！！！！』

そう叫んだ犯人は大粒の涙を流し 腕を振り下ろした

思いつ切り

まだ倒れているユキにむかって

「ひっ……」

ガッ

鈍い音が耳元で響いた

「……まだ 貴様は自分の不幸を嘆くしかできないのか？」

『な……な……』

刺さっていた

刃物が

俺の”右腕”に

「貴様はこれでも俺の話が信用できんのか？
刃物が刺さった”俺の腕”から血はでているか？」

犯人は口をあけたまま目を見開いているだけで 何も言わない

いや 何も言えない の方が正しいか

「確かに死んだ両親は戻って来ない
…だが 一度失った手足は再び手に入れることができた
…貴様の失ったものは…貴様次第で何度も手に入れることができる
違うか？」

『な……………』

男の腕から力が抜ける

「貴様は自分の不幸を嘆くばかりで何もしなかった…昔の俺のようにな

変わろうと思えば変わるものだ

立ち止まっている限り 何も変わらない

歩き出せば…また違う景色が見れるのではないのか？」

『あ…あ……ああつ……』

男が刺した刃物を俺の腕から抜いた

男は膝を付き 涙の止まらない顔を手で覆っていた

「だがな…世界は残酷だ
しかしそれも万人に共通すること」

倒れたまま呆然としているユキの手をとり男に告げる

「それでも…貴様はもう一度”生きる”ことができるか？」

男は何度も何度も頷く

それを見た本多は男にもう片方の手を差し延べる

冷たい 血の通ってない”腕”

男は涙を拭い 両手でその手を掴む

「…まずは罪滅ぼしをしてこい」

「ああ…そう…だな」

「それとだな 貴様はこの学園を根本的に理解していない」

「…どういつ…ことだ？」

本多がふんと鼻を鳴らし 後ろで呆然と立ち尽くす数人の役員を一瞥して言う

「この学園はな…生徒のほとんどが孤児だ」

「な…んだと…!!」

「全員ではないがな そして俺たちを引き取った人物こそがこの学園の学園長」

「それは…つまり…」

「ここは巨大な孤児院のようなものだ」

「それが…あの人…？」

俺は答えない 答えるまでもない

「…そう…か… お前らのほうがよっぽど絶望を知ってるわけか…」

「だがな ここにいるヤツらのほとんどが自分を不幸だなんて思っ
てねえ」

「…それはなぜ？」

「ふん…俺は先程答えを言ったがな」

「”世界は万人に共通して残酷”か…」

「それだけじゃない 俺たちは皆”生きている”からな」

「そう…だな… 俺は…やり直せるだろうか…？」

「…何度も同じことを言わせるな」

「そう…だな」

後ろから肩に手を置かれる

「ようやくシャッターが開いたぜ…
本多…お疲れ様…だな」

「会長か…なに 昔話をしたただけだ」

「さすが…だな …後は俺たちでやっておこつか？」

「ああ…まだやることがあるからな
それと腕の修理と」

「…無理はするなよ」

「ふっ 安心しろ」

「さて…んじゃ行くか」

長谷川は数人の役員と 学園中を騒がせた2人の男を連れて屋上を
後にした

すであたりは闇が支配していた

学祭戦記、夏 ― 使うなら最後まで

校舎を赤い回転灯のあかりが照らす

校門には俺と渋谷 そして数人の役員

そして―パトカーと 手錠をはめられた男

3人の制服警官がいた

先程から警官のひとりが誰かに連絡をとっている

「…そして なぜ俺もここにいないといけないのだ？
ついでに言えばいつになったら手枷を外してくれる？」

ふてぶてしく渋谷が問う

「お前にはまだ仕事があるんだよ」

俺はにやりと笑った

時計を確認する

…もうすぐだな

すると 警官のひとりが喋りかけてきた

「ご苦労様です」

見事なまでの敬礼だ

「我々はいまからこの男を署に連行しますが まだ何か用件はありましたでしょうか？」

「そうだな… せつかくならもう少し待っていかないか？」

俺の提案に 案の定クエスチョンを浮かべる警官

渋谷の頭上にもそれは浮かんでいた

「そろそろですから」

そして再びにやりと笑い 視線を星空に移す

―すると

ひゅっぱんっ！！

夜空に――花が咲いた

「なっ…長谷川…止めたんじゃないのか？」

渋谷が驚きの声をあげる

「誰がそんなことを言った？」

そんな無粋なマネはしないぞ

お前が頑張って用意したんだからな」

その間も夜空に幾つも花が咲いた

「元々花火部はこの時のために尺玉を調達してたそうだ

別にお前が花火部から盗まずとも花火は打ち上げる予定だったんだ」

「長谷川…お前…」

しかし感極まる渋谷の隣で警官が言った

「あれって…尺玉すよね？
…申請 通したんですか？」

「申請だと？」

渋谷が聞き返す

「はい 尺玉を打ち上げるのには手続きが必要です
それがないと…犯罪なんですけど」

そんなことは知っている

俺は渋谷の肩にぽんと手を置いた

「警官さん 尺玉打ち上げの責任者はこいつです
まあ詳細はこいつに聞いて下さいな」

「なっ…長谷川…！」

これが渋谷の最後の仕事だ

まあ少しは痛い目にあってもらわないとな

「そうか　じゃ君からも署で事情を聞くことにしようか　さあ　乗
りたまえ」

「な…長谷川…謀ったな!!」

「なに　自業自得さ」

渋谷は悔しげに唸ったが　次の瞬間思い出したように表情が明るく
なった

「はーっはっは　長谷川よ
お前　すっかり忘れているだろう?」

「…なにをだ?」

パトカーに乗り込む渋谷に問い掛ける

「なにつて　この俺の減点をだよ!!」

このまま俺が連行されれば お前は俺を減点できない」

渋谷がにいと笑う

「取引だ 長谷川

俺の冤罪を晴らして俺に減点をくれるか 俺に罪をなすりつける代わり減点を見逃すか
さあ どっちだ!!」

渋谷は勝ち誇ったように宣言した

だが

「悪いがどっちも遠慮だよ まだまだ甘いな 渋谷」

そう言っただけ俺は 胸ポケットから一枚のカードを取り出す

「これ なんだと思う?」

一瞬で渋谷の顔が青ざめた

そして自分の体中をまさぐり―

「ない…俺のＩＤが…ない…!!」

「悪いな渋谷

お前にはがつりしっかり減点をくれてやる

…警察で頭冷やしてきな」

「そ…そんなバカな…」

渋谷の呻き声は閉まるドアの音に掻き消された

パトカーが発車する

俺はそれが視界から消えるまで見つめていたが 見えなくなると同時に振り返り

「さて…反省会するか」

呆氣にとられていた役員にそう告げた

満天の星空が 俺たち生徒会の勝利を祝福しているようだった

… あ あいつに手枷付けたままじゃん

… ま いっか

学祭戦記、夏 ― 星の丘で

「わー綺麗ですね…」

屋上から打ち上げ花火を見ていた

「おにーさんなら勝てるって信じてたよお
花火のこと教えた甲斐がありましたあ」

「当たり前ですよ!!」

何て言ったって私の先輩なんですから」

「もお そんなにがつついてたらおにーさんに嫌われるよ?」

「そつ… そんなことないですよ!!」

私と先輩は相思相愛なんですから!!」

「相思相愛かあ…」

ほんとにそうなればあ きつとみんな幸せになれるのにねえ…」

「もーなんで急に寂しいことを言うんですか?

るーちゃんらしくないですよ」

「だってさあ…おにーさんはまだ何も知らないんだもん
ほんとのことは…なんにもね…」

2人の間に沈黙が流れる

「私が…私が先輩を助けてみせます…!!
真実を知った先輩が…ちゃんと生きていけるように…
もう二度と同じ過ちを繰り返さないように…!!」

「…うん まひるちゃんしかできないよお
だってさあ…もう…」

「るーちゃん…それは言わない約束でしたよ？」

「…そうだったねえ
まだ…時間はいっぱいあるよね？」

「…大丈夫ですよ きつと大丈夫です!!
何てったって先輩ですから!!」

「そーだね…いまは信じようかあ」

再びの沈黙

『役員は直ちに本校生徒会室に集まること
まあ簡単な反省会と今後の日程について連絡をしたいからな』

おにーさんの声が静寂を破った

「呼ばれちゃった」

「そうだねえ　じゃあ　また今度にしようかあ」

「うん　またです」

そう言ってまひるちゃんは去っていった

「おにーさん……」

ぽつりと呟き 仰向けになる

世界には私と星空しかないような錯覚に陥る

ほんとはそんなことありえないのに

”世界は誰にでも平等に残酷”

だから不幸だと思っちゃいけない

「ほんとかなあ……」

私は―そうは思わない

思えない

まるで世界中の不幸がすべて―おに―さんに降りかかってるよう
にしか…思えない

「頑張つてねえ まひるちゃん…」

限りある時間のなかで おに―さんを救えるのはきつとまひるち
ゃんだけ

なにもできない私は ただ見守ることしかできないから…

「まだ…大丈夫だよねえ…？」

誰に言ったわけでもない

この世界に尋ねた

「まだこんなにも輝いているんだからさあ…もう少しくらい夢を見させてよお…」

一瞬だけ 星がいつも以上に瞬いた気がした

エピソード ― 2度目のスタートライン

こんなにも真夏の日光はまぶしくて気持ちいいものだったのか

留置場を出た俺は まぶしすぎる太陽に目を細めた

なぜだかわからないが 俺の犯した罪はすべて未遂

…いや それ以下として扱われた

結果的に俺は留置場で一晚を過ごしただけで釈放

そしていまに至る

…いまからどうしようか

まずは…仕事探しかな

そう思って一歩踏み出したところで 思わぬ声でした

「よう 気分はどうだ」

昨日 俺の目を覚ましてくれた声だ

「ああ…清々しいな」

「で これからどうするつもりなんだい？」

この声は知らない

いや 少しだけ聞いた声だ

顔を上げると 昨日の義手義足の少年と 俺を警察に引き渡した少年がいた

「仕事を…探そうかと」

すると2人は安心したような表情になる

「おっと さすがに仕事探しは手伝わねえからな」

もう片方が言う

「そのかわりと言うのもあれだが…貴様に土産だ」

そういつて義手少年が何か紙切れを差し出す

そこには…知らない住所が書かれていた

「これは…？」

「貴様の妻子の現在の住まいだ」

それを聞いた瞬間　まず驚いた

「なんで…知ってた…？」

すると義手少年はにやりと笑い

「俺をナメるなよ」

とだけ言った

俺の胸に熱いものがこみあがってくるのがわかった

こいつらは…どこまで俺によくしてくれるんだ…

こんな…こんな俺に…

「まあ仕事見付けて一段落したら 顔でも出してみりゃいいんじゃないかねえか？」

…まあどんな反応されるかは知らねえけどよ
会いに行くならあくまで自己責任でだ」

目頭が熱かった

込み上げてくるものを必死に堪えることしかできない…

「それだけだ…俺たちはもう帰る」

そう言って義手少年が踵を返す

「ま…待っ…てくれ…!!」

掠れた声で呼び止める

義手少年は顔だけこつちを向いた

「お前ら…名前は…」

すると怪訝そうに顔をしかめ

「…本多だ」

それだけ言っ…て再び歩きだす

「俺は長谷川だ…じゃあな」

そう言っ…てもう片方も歩き去る

俺は…どれだけこいつらに救われたのだろうか…？

そう考えるだけで 堪えていた涙は溢れてきた

俺は受けとった住所を大切にポケットにしまって 涙を拭いた

… 仕事を探そう

そしていつか…

いつかもついちど妻子に会って話をしよう…

夏の太陽は眩しかった

エピソード ― 2 度目のスタートライン（後書き）

どもども えるつうです

今回で計60話以上に及んだ学園祭編が終わりです

最後まで読んで下さった皆様
本当にありがとうございます

とは言え

「星の丘学園戦記」自体はまだ終わりませよ笑

とりあえずひと区切りになったので 感想やご指摘を下さると嬉しいのですが…汗

でもまあこれからも頑張って行きます 行く予定です↑

…と言いたいのですが―更新ペースはガクッと落ちそうです泣

新生活が始まり 色々と忙しくなっ てしまいまし て…

毎朝目茶苦茶に混む電車に揺られての通学が始ま ると思うとーって
なんだか話が逸れましたね笑

次からの展開は考えているのですが 更新はでき て週1とかになる
かと…

(いるのかわかりませんが)楽しみにして いて下さっている方々
本当にすみません

これからこのえるつうをよろしくお願 いします といったところ
で 長ったらしい後書きを終わりたいと思 います

では また次話で会いましょう

NMS | 世界規模の（前書き）

約2週間ぶりですか…？

ご無沙汰ですみません

これから新章スタートです

NMS | 世界規模の

クルーザーのエンジン音と水しぶきが弾ける音がハーモニーを奏でる

「海だねー!!」

ハーモニー

「海ですよー!!」

ハーモニー

「ちよっ…長谷川!!」

もつと安全運転しなさいよ!!」

「あーっ!!…るっせえ!!」

お前らのせいで風情が台なしじゃねえか畜生!!」

ああ…騒がしい…

「でもびつくりだな

ハセ君がクルーザーの運転免許持つてるなんてさ」

「ああ 俺もびつくりだぜ

まさかこんなところでお披露目することになるとはな」

俺たち5人はいま海上にいる

5人というのは

俺と本多 サヨとまひるとユキだ

さっきまでは学園長がチャーターしたプライベートジェットで空を飛んでた

しかし せっかくだからクルーザーに乗りたいたと騒ぎ出した女子約3名のおかげで わざわざ途中からクルーザーに乗り換えて目的地に向かう羽目に

ああ…頭痛がする…

そもそもなんでこんなことになってるのかって？

ああ ぜひ聞いてくれよ

あの日——学園祭の翌日
留置場から帰ってきた俺と本多を出迎えたのは 学園長と満面の笑みを浮かべる例の女子約3名

職員会議で審議の結果 学園祭は僅差ながらも生徒会の勝利という結論に至ったそうだ

そこで学園長からのご褒美を受け取ることになった俺たち五人

そしてなんだかよくわからないうちに空港に連れていかれ

気が付いたらプライベートジェットに乗せられていた

そして続きはさっき言った通り

直接ジェットで目的地に行くはずが クルザーに乗ることになったので 急遽目的地の近くの島に着陸

そしてクルザーを借りて目的地に行くことに

しかし ここで本多が言った一言

「長谷川がクルザーを運転できるぞ」

それのおかげで俺が運転する羽目になったというわけだ

「あ もうすぐ到着ですねー」

説明してる間に目的地の島がすぐそこまできていた

島を出てから20分程で目的地の港に着いた

「ようこそいらっしやいました
お荷物をお預かりします」

クルーザーを降りた俺たちを出迎えたのは——お揃いの制服を着た
数名の大人たち

「あ ああ…よろしく」

「お車の用意ができておりますので 二つこちらへどうぞ」

そう言った青年のあとに続いて歩きだす

噂に違わぬもてなしっぷりだな…

…いや 前言撤回

「うわ…リムジン…」

噂以上のもてなしっぷりだった…

ここは かつて常夏の島と呼ばれ たくさんの観光客で賑わった太平洋に浮かぶ島

…そう かつては だ

現在この島は厳重な警備の下 一般人の立ち入りが厳禁となっている

なのになぜ俺らがここにいたって？

だから学園長からのご褒美だって言っただろ？

この島に出入りできるのは この島の施設で働く従業員

そして——W2会員という特別な人間と それに招待された客のみ

ちなみにW2というのは 様々な分野で世界に貢献している人間の
み会員になることが許されている世界で最も入会基準の厳しい組織だ

696

そしてなんと…学園長もW2会員である

学園長は知つての通り 孤児を引き取り 自分の経営する学園で彼
等が卒業するまで無償で面倒を見ている

つまりこれも世界貢献

まあ簡単に言えば 金持ちなら誰でも簡単に入会できるわけではない

そりゃまあ確かに金がなければ 世界規模で貢献なんてなかなかでき
ないが…

とにかくこの組織は 金に物を言わすような人間は存在しない

その証拠に W2会員は現在13人しか存在していない

世界を愛する人々だけがメンバーになれる それがW2だ

そして世界連合（旧国連）が W2 の為に用意した楽園

それがこの島だ

… まあ用意したといっても 維持費などはすべて W2 会員が払っているのだが……

とりあえず世連の狙いはこうだ

W2 に入会すれば楽園で過ごせると謳い 世界中の大富豪に本当の意味で様々な世界貢献をさせ すべての人々が平等に暮らせるような世界をつくる

… しかしだ W2 は強制退会制度をとっている

つまり W2 会員になった方がいいが その後に世界貢献を怠るとすぐさま退会させられる

それだけ厳しい組織なのだ

そして学園長は 俺たちにご褒美として 3泊4日の慰安旅行を企画

そしてこの楽園を貸し切りにしたのだ

「ああ見えて無茶苦茶凄い人だったのね…」

慣れないリムジンのなかで 珍しくおとなしいユキが呟く

「知らなかったのかよ…」

「知ってるわけじゃない!!

というか想像つかないわよ

普段ずっと日の丸扇子扇ぎながら笑ってるだけじゃないの」

「や まあ…そうだけど」

「というかアンタもアンタよ
なんでクルーザーなんて運転できんのよ？」

「あ？ああ…昔クソ親父に教わったんだよ」

「あつそ…ってかアンタ 親父さん嫌いなの？」

なぜか食いついてくるユキ

「ああ…大嫌いだね
…死ぬほど嫌いだよ」

俺のひとことで一瞬にして空気が凍り付く

「あ 先輩先輩！！
見えましたよー！！おっきなホテルですー！！」

気まずい沈黙を破ったのはムードメーカー（ムードブレイカー？）

のまひるだった

丁寧に磨きあげられた窓ガラスの向こうに 巨大な建物がそびえていた

数百…いや千人くらい余裕で宿泊できそうなホテルだ

あれ…俺ら5人だぞ…？

しかも貸し切りって…

どんだけ豪勢なんだよ

唖然とする5人をよそに リムジンはホテルのゲートをくぐり 広すぎるくらいのエントランスに停車する

「お荷物は後ほど部屋にお持ちいたします」

そう運転席から声がする

運転席と客席の間には壁があり 運転手が若い青年であるということ
としかわからない

若いのにこんなところで働いているなんて…きっと世界規模のエリート
なんだろうな…

とか思ってみる

音もなくドアが開く

エントランスで待っていた青年が リムジンのドアを開けていた

「あ…どうも」

リムジンから降りた俺たちは再び啞然とした

「ようこそいらっしゃいました」

数十人の若い男女が2列に並び 見事なまでのお辞儀をしてみせる

「……………あ ああ」

こんな世界は 漫画やドラマの中だけだと思ってたんだけど……

そう思わずにはいらなかった

NMS | 世界規模の（後書き）

新章はこんなような設定でいこうかと

しかし更新頻度はこんな感じになりそうです…

出来るだけ頑張るので 時々覗いてやってくださいね笑

NMS | 斜め45度!!

「とゆーわけで 早速部屋割を決めましょー!!」

フロントでキーを受け取ったまひるが 声高々に宣言する

「は…? 部屋割?」

当然なんの話かわからない

「そうですよ先輩!!」

そう言つてキーを3つ掲げる

「…って なんで3つなんだ?」

キー2つで男子部屋と女子部屋にわけるのが普通じゃねえのか!?

「ああ それだな」

すると本多が口を挟む

「学園長の計らいで より親睦を深められるように とのことだ」

「親睦ってなんだよ!!」

計らいじゃなくて謀らいだろ!？」

何を考えてるんだあの日の丸扇子は!!

「先輩 上手いこと言いますね!!」

座布団2枚の代わりに私を差し上げますっ!!」

「いや そんな企画じゃないし」

いつも通りのまひるを軽く受け流す

「ちなみにシングルひとつとペアふたつだ」

「…そうか なら俺と本多で1部屋だな」

「違いますよ先輩ー

私と先輩で1部屋です!!

そして始まる私と先輩の”愛の物語”

その名も『の・う・さ・つ（はあと）メモリアル・サマー』略して
NMSですっ!!」

「いやいやいや!!

ダメだろいろいろと!!

ってか勝手な企画を立ち上げないの!!

しかも悩殺って何さ!!」

「あ 気になりますか?

でもまだ秘密ですよ?

そういうのはふたりつきりになってからじゃないと 心の準備が…」

「いや 断じてそういう意味じゃないから!!」

「もう そうだよまひるちゃん」

サヨも止めにかかってきた

「そうだサヨ 言ってやれ」

「うんうん ーうーのはくじ引きにしくちゃ」

そうそう くじ引きにー…って

「なんでそうなる!？」

「え?だって平等じゃん?」

いやいやいや…

平等って…そもそも何がだよ!!

「ってか くじがないじゃん」

そう くじさえなければくじ引きはできない

つまりは大丈夫

俺は普通に本多との部屋割が約束されるのだ!!

…しかし　そう上手くはいかないのが世の中ってヤツみたいだ

「なに？くじ引き？

蠟燭なら何本も持つてるわよ？」

そういつてカバンから蠟燭を取り出すユキ

「ちょっと待てユキ！！

なんで蠟燭を持ち歩いてるんだよ！！」

「そりゃ使うからに決まってるじゃないの」

現代の文明社会において　蠟燭を使う機会はめっきり減った気がするんだが…

というかこいつの場合　ある特定の用法しかねえだろ

「じゃあこの蠟燭の端っこにマークを書きましょー」

「…って本当に蠟燭でくじ引きするの！？」

「別にいいではないか」

ああ…もう好きにして下さいな

「じゃあ○と□とが2つで が1つね」

サヨが蠟燭の根本に爪でマークを掘る

「はい 順番に引いてね」

そしてマークを手で隠して構えた

本多が無言で1本引き抜く

「
○だ」

「じゃあ俺は…よっ」

俺も1本抜いた

「
だな」

「えー!!」

なんで なんですか!？」

「いや…なんでって言われても…」

「同じ部屋がよかったのにー…」

「は はは…」

というか 本多が。で俺が
つまり本多は女子と相部屋かあ

…俺ひとりか

「ううー…」

まひるが呻きながらも1本抜く

「来いっ!」

「や もう ないから!！」

「あつ!! ですつ!!！」

「嘘っ!？」

まひるが引き抜いた蠟燭を斜め45度回転させて叫んだ

「…いや それ□だから」

「いいえ!!—こうすれば なんです!!—」

…聞き分けが悪かった

「じゃ 私も」

ユキが引いたのは…。

てことは…本多とユキ
まひるとサヨか

…本多とユキ!?

「サデイスティックな女神は俺に微笑んだ…」

ああ…本多が旅立たれた…

「よろしくね まひるちゃん」

「私は先輩がよかったのにー…」

「うう…ひどいよ…」

こっちではサヨが傷付いてるしさ

「諦めませんよ先輩!!」

部屋が違ってても作戦ネームNMSは実行ですから!!」

ああ…先が思いやられるぜ…

NMS | 夜のお楽しみ

「ふう…」

ピツという電子音のあとに ガチャリと鍵の開く音

なんだか学園みたいだ

しかしここは学園じゃない

俺たちは さつき決めた通りの部屋に来ていた

…まあ最後までまひるは駄々をこねていたが それでもサヨに連れていかれた

まあ…隣の部屋なんだがな

そんなこんなで部屋に着いたわけだが…

「な…なんじゃこりゃ…」

『うわー！！凄いです！！広いです！！ベッドふかふかですっ！！』

隣の部屋も似たような感じらしい

俺の心を読み上げたかのように まひるが叫んでいた

『ふかふかなのにギシギシいわないです！！
本当に先輩と同じ部屋じゃなくて残念ですう…』

あーあー

なにも聞こえないー

というか聞こえたくない

しかし本当に凄い…

とりあえず…広い!!

寮とは大違いだ…

寮の部屋が3つくらい入りそうなくらい広いや…

そしてベッドも大きくてふかふか

…本当にギシギシ鳴らないし

床はふっさふさのカーペット(?)のせいで まったく足音が聞こえない

こりゃ夜ばいされても音じゃ気付けないな…

うん…ちゃんと部屋の鍵を閉めとかないと

まあ確かに 初体験が安っぽいホテルじゃなくて こんなところなら
そりゃ思い出にもなるが——って そういう問題じゃねえや

というか ひとり部屋でこのサイズって…

ほかはどれだけ広いんだ…？

…恐ろしいな W2

ふと窓側に目をやると すでに俺の荷物が置いてあった

部屋割をさっき決めたばかりなのに…なんという早業だよ

従業員も一流ってか…

こりゃメシが楽しみだな

…高級すぎて食えんかも

なんて考えてると ドアをノックする音

『先輩ー逢い引きしましょー』

ドアをバンバン叩きながらもちゃんと聞こえる声量で叫ぶまひる

叫んでる時点で逢い引きとは言わないぞ…！！

というか恥ずかしいから そんなこと叫ばんでくれ

『先輩ー？いないんですかー？』

なるほど 居留守を使ってみるか

『いないんですか…？』

私を置いて 行っちゃったんですか…？

もう離さないって言ったじゃないですか…！

私のカラダなしじゃ生きられないって…！』

「そんなこと言ってねえよ…！」

『やっぱりいるんじゃないですか…！』

いないふりしてないで出てきてくださいよー』

あ…しまった

つつい ツツコミ入れちゃった…

というか手段が姑息だ…

まあ仕方ないからそろそろ行くか

「おう なんの用だ？」

ドアを開けるとまひるとサヨがいた

「だから逢い引きですよ
さつきボーイさんにベストスポットを聞いてきましたから!!」

「だから逢い引きって…
それにサヨもいるじゃんか」

「はっ 先輩…
私だけじゃ満足できないからってサヨ先輩まで…
二股はいけませんよ!!
私を選んでください!!」

「いや 別に二股してないし」

しかもよく聞いたら俺に選択権はなしか!!

「そ そうだよまひるちゃん
というか本題忘れてるでしょ?」

ここでやっとサヨが口を開いた

「あ そうでした

いまからユキ先輩たちも誘ってトランプ大会です!!
わーぱちぱち!!」

「……………はい？」

「いや だからトランプ大会です!!
お泊り会といったらトランプ大会で決まりですっ!!」

…まあ言いたいことはわかったが そういつのってあくまで夜更か
しの手段じゃねえのか…？

まだ夕方じゃね？

とりあえず休憩タイムじゃね？

「私も一応止めたんだけどね」

「…けど？」

「賛成してくれなきゃ秘密をバラすって…」

恐喝かよ!!

まひるがだんだん黒くなつてく…

つてか それほどバラされたくない秘密なのか…

んー気になるなあ

「とゆーわけで やりますよね？」

笑顔がどこか怖い気がする…

「あ ああ…そうだな」

まあ被害を最小限にとどめるためにはなら トランプくらいどつて
ことないよな

「じゃーれつつごーです」

そう言つて まひるがもうひとつ隣——つまり本多とユキの部屋の
ドアの前に立つて…ぴたりと止まった

「どうかしたのか？」

そう尋ねたはいいが…

無性に嫌な予感がした

NMS | 生徒会の“攻守”の要…？

「どうかしたのか？」

慌ててまひるに尋ねる

「な　なんか変な声が…」

さっきとは違ってかわって不安そうな声を漏らすまひる

気付いたら俺はなんにも考え無しでドアに手をかけていた

ガチャ　と　ドアが少し開く

鍵がかかってない…

意を決して一気にドアを開ける

「……………なにやってんだお前ら？」

半ば想像していたが…

そんな想像が的中してるとはな…

まひるとサヨが啞然としている

「なにつて ルームシェアの挨拶よ」

しれっと言つてのけるユキ

「誰だそんな非常識な挨拶を教えたヤツは！！
お前まともな教育受けてねえだろ」

「だってこいつも同じ意見だったから」

そうつって身動きがとれなくなつてゐる本多を指差す

「そつだぞ会長 これからがいいとこなんだから」

「お前は黙ってる マゾ本多
まひるの情操教育に悪影響をきたすだろ
少しは自重しやがれ」

まあすでにまひるは黒いけど…

少なくともSMに目覚めてもらっては困る

え？

どういう状況かって？

とりあえず本多が荒縄に縛られて天井から吊されてるわけだ

部屋の電気は切つてあるし

カーテンも閉めてあるし

なんかユキは手にアブナイもの握ってるし

「とりあえず後にしろ」

「後でもダメだよっ!!」

すかさずサヨが突っ込む

「とりあえず いますぐまひるとサヨの部屋に行く支度しろよ」

「なんでよ?」

ユキの当然の疑問

「まひるがどうしてもお前らと遊びたいそうだ
お前らのお楽しみはそのあとにしとけ」

「…仕方ないな 降ろしてくれ」

宙吊り状態の本多がのたまう

お前何様だよ

「…まあいいや さっさとこいよ」

そう言つてドアを閉める

「ああいう愛情表現もあるんですね…」

いまだに驚きの抜けないまひるが言う

「いや あれはアブノーマルだからなあんなふうにはならないでくれよ…」

「大丈夫ですよ？
私痛いの嫌いですから…」

それを聞いてほっと胸を撫で下ろす俺とサヨ

「それとも…先輩も私にあんなことしたいですか…？」

上目遣いで俺を見るまひる

…なんでそうなるかな？

「私…先輩となら——」

「はいはい！！」

準備始めようね！！」

まひるの台詞をサヨが遮る

学園の外でも俺らは変わらん…

いつまでもこんな毎日が続けばいいのにな…

なんて…夢物語かな

「ほらハセ君も早くっ！！」

「ああ そうだな」

それよりは”いま”を楽しまないとな…

NMS | 必要なのは戦術と運

「皆さんおまたせですー!!
では第1回 先輩争奪トランプ大会です!!
わーぱちぱちー!!」

まひるが堂々宣言する

「ぱちぱちじゃないよ!!
俺争奪っていったいなんだよ!!
俺が勝ったらどうなるのさ!!」

例の如く突っ込みどころ満載だ

「そのときは…私を差し上げます
大事に…して下さいよ?」

「わーわー!!
なんでそうなるのさ!!」

「私じゃ不満ですか…?」

「や そうじゃなくて…」

「配り終わったぞ」

「いつのまに!？」

そしてまひるとの漫才をやっているうちに本多はトランプを5つに配り終えていた

「まあいいや…」

で 何をやるんだ？」

「まずは大富豪です!!」

ちなみに大貧民は大富豪に一生仕えるのです!!
というか伴侶です!!」

「伴侶ってなんだよ!!」

どうすんだよ同性同士になったらよぉ!!」

当然の主張だ

「男ならつべこべ言ってんじゃないわよ!」

しかしユキに一蹴された

「そういうのもアリだと思ってますから」

そして新境地を開拓するかのようなまひるの一言

個人的に男同士は許せないんだが…

別に本多が嫌いなわけじゃないんだぞ?

男同士って設定がいやなんだよ!!

…え?女同士はどうなのかって?

……………アリかもな

「ちょっと！！ハセ君は何を想像してるのっ！！」

顔に出ていたのかサヨに怒られてしまった…

「というわけで全員の了解がでたので始めましょう」

まひるはそう言ってトランプの山をひとつ手にとる

「や 了解してねえから！！」

「アンタも早くとりなさいよ！！」

しかしみんな次々と山をとって手札にしている

みんなやる気だった…

「マジかよ……」

そう言いながら手札をとり わかりやすいようにカードを並び替える

「ちなみに何回やるんだ？」

「もちろん私と先輩が結ばれるまでです!!」

「……………そうか」

つまりは2〜4位を狙ってアガればいいんだな？

このメンバーなら……………いけるな

さて……………手札は……………

「……………」

言葉が出ない……………

なんだこの見事なまでの弱さは……………

頑張っても上位は無理っぽいな…

しかも効果持ちのカード（5、7、8、10、11）はシングルばかり…

革命が起きてもキツイぞ…

「私からスタートだね」

そういつてサヨがカードを出す

どうやらダイヤの3はサヨが持っていたようだ（ダイヤの3を持つてる人から始めるため）

ちなみに並びは

サヨ↓本多↓俺↓ユキ↓まひる↓サヨ↓…

といった感じだ

ちなみにサヨが出したのはクラブの4

「俺か」

本多が出したのはクラブの5

「って いきなり跳ばれた!？」

5跳びで俺が跳ばされた

しかもクラブで縛っている

「んじゃ これで」

ユキが出したのは7

「てめえら…俺をイジメて楽しいかよ…」

「そりゃもちろん」

ユキがしれつと言う

7 渡してユキから俺にカードが1枚押し付けられた

∴ クラブの3かよ 使えねえなあ

「はいです」

まひるが出したのはジャック

おっ チャンス到来じゃねえか!!

ジャックターンで場が流れるまで強さが反転だろ？

クラブで縛ってるからいま最強なのはクラブの3だ!!

そしてそのカードはいまさっきユキに押し付けられたばかり!!

「ちっ
」

ほれ見る！！

ユキが悔しがってるぜ！！

ざまあみやがれってんだよ！！

あとはサヨが適当なカードを出してくれれば――

「じゃあ はい 8切りね
」

そういつて8を出し 場を流した

「なんてことしやがるんだよっ！！」

「わっ ハセ君…急に何？」

「い いや…まあいいや…」

なんか嵌められてるような感じがしてしょうがないんだが…

「…ざまあ」

ユキがぼそつと呟く

…俺のこめかみに盛大に青筋が走ってる気がする

いいだろう…

カードで売られた喧嘩はカードで絶賛きつちり片を付けてやる!!

覚悟しろよ…!!

…だがしかし 結局大富豪はまひる

サヨ 本多と続いたためにまひるは俺が負けることを祈りながら戦況を見つめたが―

結局序盤に飛ばしすぎたユキが俺に僅差で負けた（俺はタイマンになつてから5跳び8切り7渡しとコンボを繋げてユキをいたぶってきっちり仕返しをした）

まひるとユキで禁断の扉を開くはずだったが「初めては先輩とだつて決めてるんです…」と言いつぺのまひる駄々をこねたため無しになった

（恐らくユキ狙いの）本多が2回戦をやろうと言いつたがボーイがやって来てディナーの用意ができたことを告げたので 空腹感を思い出した俺たちはボーイのあとについていった

…俺はディナーという響きに妙な不安を抱きながら

NMS | 結局は俺たち

さて 案内役のボーイについて来たはいいが——硬直する若者×5

「な…なによこれ…」

ユキがかろうじて絞り出した言葉は 俺たち全員の心境を単純かつ明確に表していた

「ひ…広いです!! 広すぎです!! というかあれはシャンデリアですか? シャンデリアですよね!? しかも馬鹿でかいですよね!? なんて天井に馬鹿でかいシャンデリアがどーんってなってるんですか!? ここはいったい何なんですか!!」
はっ…まさか…いまからここで私と先輩の結婚式が——」

「と…とりあえず落ち着けよ」

テンパって暴走を始めたまひるにとりあえずツツコミを入れた俺だが 口はぽかーんと開いたままだ

というかどさくさに紛れて結婚式とかいう単語が聞こえたような…

まあいまは関係ないな

それ以上に驚くべき光景が目の前にあるのだから

そう 俺たちが驚いている理由は至極簡単

さっきまひるが言った通り 用意されている会場が俺たちに不釣り合いすぎるくらい盛大なのだ

「…何かお気に召されませんでしたか？」

入口で硬直する5人を不思議に思ったのか ボーイ(?)が尋ねる

「い…いや 十分過ぎます」

何と言うか…度肝を抜かれたというか…

この島に来たときから凄く凄くとは思っていたが…

恐るべし W 2

「にしても…凄くね…」

部屋の中央に鎮座しているテーブルに近付く

そこには椅子が5つ

そしてシルバーが5セット

俺たちが近付くと ボーイが椅子を引いた

「あ…どうも」

慣れない待遇に戸惑う

この形式からするに…西洋系のフルコースとかか？

幼い頃に数回行ったつきりで マナーやら何やらは全然覚えてねえぞ…？

「へえ…なかなかいいアイテムじゃない」

そう言いながらナイフを懷に仕舞おうとするユキ

「…ってこら 何やつとんじゃ…！」

マナーもへつたくれもねえな…

「何って…ちょっとお持ち帰りに…」

「ナイフを持ち帰る奴がどこにいる…！
いったい何に使う気だよ！？
いや やっぱり言わなくていい！！
とりあえずおとなしくしてろよ…！」

なんでこんなところにきてまで恥を晒さんといかんのだよ…

ああ…俺たちしかいなくてよかった…

慣れない状況だけど　ユキは良くも悪くもいつも通りか

本多も最初は驚いていたようだけど　いまはいつも通り平然として
るな

…問題は残る２人

まひるは最初からきよろきよろしっぱなしだし　サヨに至っては
つとなんかぶつぶつと呟いてる

「…１８０７５２匹　羊が１８０７５３匹…」

…羊を数えてた…！

って　羊を数えるのは寝たいときだろ…！

しかも１８０７５３匹って…

どんだけいっぱいいるんだよ

飼い主大変だな…

過放牧は土地にかかる負担がデカいんだぞ？

…って ツツコミどころが違う気がする

はあ…なにげに俺も緊張してるのかな…

…まあ たまには緊張感を持つてもいいと思うよ

基本的に普段テキトーな感じの5人だけに 最初は不安でいっぱいだった

だってさ 俺たちがこの旅行で奇行に走る〓学園長の顔に泥を塗るようなものだろ？

まあ学園長を崇拜してるわけではないが（一応尊敬はしているが）さすがに余分な迷惑をかけるつもりはない

…とはいえ他の4人（主にユキ）がわざわざそんなことを考えてるとは思えない

だから不安だったのだが…

どうやら大丈夫そうで安心したよ

…なんて思った俺が間違いだったのか？

メインを食べる頃には みんな普段通りの有様だった…

一心不乱に料理を食べるまひる

無言で丁寧に食べる本多

ドリンクをおかわりしまくるユキ

…相変わらず影が薄いサヨ

デザートを食べ終わる頃には テーブルの周りは戦場だった…

ユキの無茶苦茶な注文に右往左往するボーイ

シルバーを投げるユキ

それを止める俺とサヨ

その隙にこっそりサヨのデザートを盗み食いするまひる

…無言で食べ続ける本多

学園長…俺では力不足だったよ…

俺らが食べ終わった後にボーイが見せた営業スマイルを…俺は忘れない

NMS | 夜のお約束

「というわけで第2回先輩争奪戦の開幕です!!
わ・ぱちぱち!!」

夕食改めディナーから戻った俺たちに向かい まひるはまた高々と
宣言した

「え!?!またやるの!?!」

「そりゃそうですよ!!」

だってまだ私と先輩が結ばれてませんから!!」

それ…終わらない気がする…

「でもそれじゃ埒が明かないよね?」

おお…ここで救いの手が…

ああ…サヨ様

後光が射していらつしやる

「他のゲームにしない？」

え…？そうなりますの？

天使が裏切りおつた…！！

「じゃあ…王様ゲームなんてどうよ？」

ここでサディスティックな笑みを浮かべて言い放つユキ

鬼！！悪魔！！

お前には血も涙もねえのかよ！！

「王様ゲームってなんですかー？」

しかしまひるがクエスチョンを浮かべる

…これはチャンスだ！！

「ほら まひるも知らないことだし王様ゲームはやめにしないか？」

これで完璧だろー！

王様ゲームなんてやったら身が持たないからな…

だってこのメンツだぜ？

サディスティッククイーンのユキ

妄想癖&暴走癖の持ち主まひる

何をしでかすかわからない本多

…影の薄いサヨ

だからぜひ王様ゲームなんてやめるべきだー！！

どうせまたサヨが空気になって可哀相だからな

「ねえ ハセ君？

なにか変なこと考えてない？」

「い いやまさか!!」

とりあえず王様ゲームはやめとこつぜ?」

「大丈夫よ 問題ないわ

ルールも簡単じゃない?

みんな一斉にクジを引いて 王様が番号を指名してあんなことやこんなことを命令するだけなんだから」

「あんなことやこんなこと…ですか?」

明らかにまひるの目が光った

そして不気味な笑みを浮かべて見つめ合うユキとまひる

これは…やばい

「でっ…でもほら クジがないからさ」

「蠟燭ならあるわ!」

だからなんで蠟燭なんだよ……！！

「1 / 2 / 3 / 4 / 王様……と できたよ」

そしていつのまにかサヨが爪で蠟燭を削ってた

皆さん……やる気なのね……？

……仕方ないか

「あーもうわかったよ
やりやいいんだろ やりや」

「やっとその気になりましたか 先輩？
これで先輩のハジメテをいただきですっ……！！」

「いやいやいや……！！
何をおっしゃられますか！？」

「……諦める 会長」

ほ…本多まで…

「…いいだろう 受けてたつぜ!!
それに俺が王様を引き続ければ問題なしだ!!」

そしてサヨが握る蠟燭を1本引き抜く

「ぬおおお…!!」

3
だ
っ
た

そして次々に蠟燭を引き抜く残りの3人

サヨは残った蠟燭だ

さて…王様は…

「…俺だ」

本多だった

本多ならまだマシだろう

ユキやまひるに王様が行くよりはな…

…そうだと信じてる!!

「では言おう 3が…」

ふむふむ…って俺じゃん!!

マジかよ…

変なのは勘弁だぜ…?

「王様をひっぱたく!!」

な…なんだってー!!

まさかのパターン

…しかしさすが本多

このマゾ精神には脱帽だが…

俺がひっぱたくのかよ…

「ふっ…さあ来い」

…仕方ねえか

「本多 覚悟っ!!」

「なっ…会長かよっ…!!」

ぱちーん

心地好い音が響いた

「くっ…まさか会長が引くとはな…」

1/4の確率でアタリだがハズレも同じ確率だったのを忘れていた
…」

頬を押さえて本多が言う

「ハズレで悪かったな」

俺だっ て引きたくて3を引いたわけじゃ ねえよ

「ちっ じゃ次いきましょー」

まひるが蠟燭を回収する

…あれ？ なんか舌打ちが聞こえなかった？

…深く考えないでおう

「はい引いてください」

そして蠟燭を差し出すまひる

「……………」

…明らかに1本だけ飛び出てる

「さあ 早く引いちゃってください!!」

…この飛び出てるのを引けってか？

明らかに仕組まれてるこれを引けってか!？

…いや 見えないフリだ

飛び出てる蠟燭なんて俺は知らん!!

そして残ってる4本のうちから適当なのを抜こうとする…

「先輩 空気読んでくださいね？」

普段のまひるからは想像もつかない低い声で忠告されてしまった

…そもそもなんの空気だよ？

はあ…結局これを引くのか…

覚悟を決めて引き抜く

2

はあ…いったい何を強要されるのやら

…いや 待てよ

俺の番号がわかったところでまひるが王を引かなきゃ意味がないじゃないか！！

ということはまだ助かる道はあるじゃん！！

「ささ 他の先輩方もどぞどぞー」

こうしてサヨ 本多 ユキが引き終わった

これで他の3人が王様を引いていけば――

しかし 3人のうち 誰も自らを王様と名乗ることはなかった

「先輩方の誰も王様じゃないってことは私が王様ですね!!」

最悪の事態だ…

「ではいきますよー？

2番が王様のほっぺにちゅーですっ!!」

「な…なんだって…!!」

ちゅーだと…!!

俺がまひるのほっぺに…ちゅーするのか!?

明らかに仕組まれたこのゲームで 王様に従うのか!?

くっ…しかし王様の命令は絶対だからな…

そう覚悟を決めてまひるに向き直った

頬を赤らめて目を閉じるまひる

だが——なぜか本多が待てをかけた

「どうしたんだよ?

俺としちゃ ちゃっちゃんと済みたいんだが」

「そんなにキスがしたいのか?
ならば邪魔はしないが」

「いやまあ…こついつのはできれば罰ゲームではやりたくないけど…で なんなんだ？」

「ひとつ確認したくてな」

「…確認？」

「ああ 既に王が命令を言い終えたから問題なからう」

「だからなにがだよ？」

「俺とサヨとユキの番号を公開する」

「なんでだよ と言おうとしたが――」

「そつ そそ…そんなことする必要ないじゃないですか！！
も もう 本多先輩ったら 自分が王様になれなかったってルール
無視は卑怯ですよっ！！」

「ほづ…まさか俺が気付いてないんでも？」

さっきから本多が言ってることがさっぱりだ

「おい本多 全員にわかるように言ってくれよ」

「そうだな まあ全員の番号を公開すればわかる
さて サヨは何番だ？」

「私は1番だったよ？」

「えっ！？おかしいわよ？
だって私も1番だもの」

「はあ？どういうことだ？」

「ちなみに俺も1番だ」

ますます意味がわからない

「ア○ギもびつくりの手癖の悪さだな 見事だ」

観念したのか まひるがポケットから5本の蠟燭を取り出す

その蠟燭にはちゃんと1から4の数字と王の文字が

なるほどな

どうやらまひるは本来のクジ付き蠟燭を隠し 仕込み蠟燭（1が4本で2が1本）とすり替えていたようだ

「うぐぐ…完璧な作戦なはずだったのに
酷いですよ 本多先輩!!」

まひるがふくねながら文句を言う

「ふん…お前だけにいい思いはさせんよ」

どうやら本多はさっきのをまだ根に持ってるようだ

…というかそこか!?

問題はそこなのか!?

…いや まあ にはともあれ ほっぺにちゅーは無しになったみたいでよかったよ

…しかしまだ旅行は始まったばかり

これからなにが起きることやら…

正直不安でならないぜ…

NMS | 旅行の醍醐味？

「先輩…起きてください…」

誰かが耳元で囁いてる気がする

「もう…起きないとあんなことやこんなことをしちゃいますよ？」

な…なんか物騒な台詞が聞こえたような…

「んー…」

「あつ…起きちゃいましたか
ちつ…残念です」

目を開けると何故か目の前にはまひるがいた

…あれ おかしいな？

確か俺は一人部屋だったはずで——鍵もちゃんとかけたのに

「…で なにをやったんだ？」

そして何故かベッドに潜り込んでくる少女×1

「そりゃもちろんまだ先輩の温もりの残るベッドの匂いを堪能して
むずむずはあはあするんですよ！！
旅行の醍醐味じゃないですか！！」

どんな醍醐味だよ！！

というかむずむずはあはあと言っな！！

「はあ…結局何の用だよ…？
メシか？」

「ご飯と言いますか…まあ私は現在進行形でオカズを頂いてるわけ
ですが——」

「誰が上手いこと言えって言ったよ?」

「先輩こそご飯と上手いを掛けてるじゃないですか!」

「…あ　ほんとだ——じゃなくって!」

危うくごまかされるとこだった

「結局メシなのか?」

「まあご飯なんです　私が頼んでおきました!」

「頼んでおいた…?」

「まあもうしばらく待っててくださいよ」

すると　ドアをノックする音

「あつ　来ましたよ!　はいはい」

まひるがドアに向かう

そしてなにかを押しながら帰ってきた

「ルームサービスですよ」

そういつて押してきた小さなワゴンから料理を次々と出すまひる

次々と…次々と…次…まだあるの!?

「——って どんだけ頼んでるんだよ!!」

明らかに2人分ではない量のおいしそうな料理が並ぶ

「だって今日は朝から海に行くんですよ？」

「いっぱい食べなきゃ途中で空腹いちゃいますから」

…そういえばそんな話してたな

いや だからってこの量は普通じゃないだろ…

「仕方ない…サヨも呼ぶか」

「えーっ 先輩は私だけじゃ満足できないんですか？」

「いや…だからさ
満足云々じゃなくて 満腹通り越して泳げなくなるといっ
とにかく この量を2人で食べるのはキツイだろ？」

「だったらなんで呼ぶのがサヨ先輩なんですか？
本多先輩でもいいじゃないですか！！」

「いや…ほらあいつらはあいつらで忙しいんだよ」

「…忙しいってなんですか？」

や それはほら ちょっと…

ほら あれだよ

片方Sでもう片方はMなんだ

そしてその2人が相部屋

もうこれ以上何も語る必要はないよな？

邪魔するのは無粋ってもんだろ？

「とりあえずあいつらはきつといまお取り込み中なんだ　だから諦めろ」

「だったら先輩こそ諦めて私と結婚しましょう！！」

そうだな——って　あれ…なんで俺はプロポーズされてるんだ？

そんな話してたか？

サヨを呼んで一緒に朝飯にするかどうかって話だったよな？

「その無言　承諾と受け取りました！！」

「いやいやいや！！」

ちよっと…！というかなんかな急展開に頭がフリーズしてたただけだから！！！！」

「もう…いい加減観念してくださいよ」

「いや…そう言われてもなあ…」

「私…この旅行で先輩を落としますから!…」

「いやいやいやいや!…」

そんな宣言されても困るよ!…」

「じゃあせめて…思い出してもらいます…から
私のことを…あの約束を…」

そういつて微笑むまひるはどこか——昔を懐かしむような
それでいてどこか悲しげな表情だった

結局その後 部屋から消えていたまひるを探しに来たサヨと 何故か目の下に隈を作りながらも満面の笑みを浮かべるマゾ本多（手首の辺りに縄の跡があったような気がするけど俺は断固見てない）とユキと一緒にまひるが頼んだ朝食を食べた

ルームサービスだなんて侮れない美味さだった

「ざっばーん!」

まひるが後ろから飛びついてきた

「おわ…っぶ 危ないだろ…」

というわけで身支度を済ませ ビーチにやってきた若者×5

そしてはっちゃけてる少女×3

浜辺で寝てる少年×1

少女らに遊ばれてる俺×1

ちなみに本多が海に入らないのは さすがに海水に浸かると義手義足のメンテナンスが面倒になるかららしい

なにせ本来は兵器として開発されていた代物だ

一般に出回ってるそれらとは全然違う

その分手入れも大変なのだそうだ

まあ潮風に当たってる時点でダメだと思うが 本人が大丈夫と言う
ならいいのだろう

というわけで 大人しく浜辺で日焼けするらしい

………義手って焼けないよな？

手足が左右で違う色って 不気味じゃ…？

…まああいつがいいならいいか

そして俺はと言つと――

「あーもうわかったから首にしがみつくのはやめろって!!
こら ぐりぐりするなっ!! 背中…背中当たってるから…って
てっ

誰だビーチボール投げたヤツ!!

ユキだろ!! どうせユキなんだろ!？」

「せ 先輩…そんなに激しく動かないでくださいよ
あんっ…擦れちゃいますっ!!」

「だったら離れろー!!」

そしてわざときわどい台詞を吐くなあ!!」

「ちょっとハセ君 ハメ外しすぎだよ!!」

「俺か!? 俺が悪いのかー!!
いてっ!! また投げやがったな!!

しかもいまの絶対ビーチボールじゃねえだろ!!

野球の硬球だよな!？」

死ぬぞ!! 下手したら俺死んでるぞ!!」

「うつさい!! 沈めるぞ!!」

遊ばれていた…

ぬかった…

この5人しかいないってことは 俺を助けてくれる人がいないって
ことか…

いや 待てよ…

普段から俺を助けてくれる人っていないねえじゃねえか…!!

俺って…人望ねえのか…？

「はいはい…降参ですよ」

「えーっ つまんないです!!もっと遊びましょー!!」

遊ぶ？

遊ぶの間違いじゃねえのか？

「す…少し休ませてくれよ…」

「なんだ長谷川 だらし無いなあ」

「お前らのせいだろ!!畜生が!!」

「ちょっとハセ君!!私何もしてないじゃない!!」

ああ 確かに

何もしてなさすぎて影が薄いくらいだ…

「…なんか失礼なこと考えてない?」

「いや…サヨはこのままで十分だよ…」

「……………?」

これ以上振り回す側の人間が増えてもらっちゃ困るからな…

「ふう……………」

なんとかまひるを首から引っぺがし 砂浜にはい上がる

「つ…疲れた…」

「軟弱だな 会長よ」

「…お前と一緒にすんなよ」

「ふつ…しかし 平和だな…」

「あん？急に何だよ」

「いや…ふと思ったんだよ

俺達がガキの頃は大国ですらとても平和とは言えなかった
それがここ数年でこの有様だ

…とはいえ 水面下では各大国とも動いているだろう——つまり冷戦
しかしそれでも平和だと思ってしまう

…何か忘れてるような気がしないか？大切ななにかを…」

「はあ…？そう言われてもなあ…
大切ななにかねえ……っ！！」

「どうした？」

「い…いや ちょっと頭痛がしただけだ
疲れてるのかな…俺」

「…まあ学園祭も終わったばかりだ ゆっくり休め」

「俺は休みたいんだけどね…」

どうもそれを邪魔してくれる方々がいらっしやるみたいで」

相変わらずはしゃいでいる3人を見る

それを見て…平和がいいと思った

争いなんてなくなれば…

そう願う人は山ほどいれど 争いはなくならない…

矛盾した世の中だぜ…まったく…

…そうだろ？ 母さん

あんたは何のためにあいつを生かしたんだよ…？

…いや もういいか

過去は変えられない

とりあえず いまは”いま”を楽しまなくっちゃな

「先輩ー！！いつまで休んでるつもりですか？
早く来て下さいよー！！」

さて…行くかな…

「わかったからそう急かすなってー！！」

第2ラウンド開始…かな？

NMS | いいじゃないですか

ホテルに帰ってきたはいいが 何もやることが見当たらない

なぜなら——はしゃぎすぎて見事に疲れ果てた少女の寝息×3

なにせ夕方まで浜辺で遊んでいたのだから仕方ない

ちなみに昼食は なんとホテル側が持ってきてくれた

相変わらず凄いもてなされてるな…

「満ち潮とお転婆娘の畜生が…」

そしてこっちで拗ねているのは 奇妙にこんがり焼けた義手義足少年×1

やっぱり義手は焼けなかったため なんともし言い難い外見になって

いる

例えるなら——日サロで横を向いた状態で寝てしまって 気付いたら左右で見事に焼け具合が違う といったところか

… まあ日サロなんて行ったことないからわからんが

ちなみに 拗ねてる理由は
砂浜に描いていた巨大なユキの絵を波にさらわれ あまつさえまひるに散々踏まれたためだ

うーん 青春だねえ…（しみじみ

はっ いかんいかん

なんか俺だけオッサン化してしまった

まあ 俺にまともな青春はしばらく必要ないかな…

毎日が賑やかで楽しくて…

こんな夢のような日々が続けばな…

「痛っ… またか？」

そんな具合に理想のいまを思い描いていると　また鋭い頭痛が

やっぱり疲れてるのかな…？

今日一日だけでもずいぶん疲れたからな…

…主に少女×3のお世話にね

…しかしまあ　寝顔はかわいいんだけどな

この満足しきつたような寝顔を見るとさ…まあ色々な厄介事に巻き込まれてもいいかな？なんて思っちまうな…

…はっ いかんいかん

俺までもがマゾ化してどうするんだ!!

マゾは本多だけで十分だ

だいたい俺がマゾになったらどうするんだ？

サディスティックな少女に弄ばれるマゾ少年×2の学園ストーリー
になっちまうだろうが!!

そ…そんなの嫌だ…!!

「いいじゃないですか…先輩…」

「良くねえー!!」

「私と楽しいコトしましょーよ…むにゃむにゃ」

「って寝言かよー!!」

しかも夢の中ですら俺はまひるに迫られているのか…!!

…正夢になりませんように

…そういえば 最近夢を見てないような

1番最近の夢は…ああ 確か彼女と別れた夜に見たあの夢か

…不思議な夢だったよな

ともかく あれ以来約1ヶ月経つわけだが——夢を見た記憶が無いな…

…まあ夢って見ても覚えてないことってよくあるらしいし きっとそんなところだろう

「ふあゝ…っ」

そんな安易な考えで納得すると 俺にも眠気が襲ってきた

俺も寝ようかな…

水平線に沈んでいく夕陽が窓から射すなか 俺は眠りについた

NMS | かぼーん

カコン

「ふう〜生き返るぜっ」

満天の星空の下

どこまでも続く水平線

これを絶景と言わずなんと言っ？

「まさかここで露天風呂に浸かれるとはなあ」

しかも貸し切り

日本区民にとって これ以上の贅沢があるだろうか？

「極楽極楽ーって 1回言ってみたかったんだよな」

周囲に誰かがいたら そんなこと恥ずかしくて言えないが——思わぬところで小さな夢が叶ってしまった

そもそも 温泉なんて何年ぶりだろうか…

………そうか 家族で行ったのが最後だな

俺にも——いや 俺の家族にも だな——あんな時があつたなあ

もう ずいぶん昔のことのようだぜ…

まあ実際ずいぶん前の話だが

「また今度 墓参りに行かないとな…」

カコン

「いかにいかに…つい思い出しちゃったぜ…」

家族の思い出と

あいつへの 憎しみが

カコン

「…って なんで露天風呂にししおどしがあるんだ？
そもそもここは14階だし 鹿なんていねえだろうが」

さっきから一定のリズムを刻んでいるそれは 決して カポーン
って感じの浴場シーンで鳴る音（？）ではなく 確かにししおどし
の音なのだ

… まあいいか

どうせあれだろ 中途半端な日本好きで 間違った解釈をしてる他
区民が造ったってやつだろ？

俺は寛大な日本区民だからな 許してやるぜ

とはいえ カコンカコンうるさいから 色々と思考の邪魔なんだが
な…

「まあいいか…
のぼせてくるまえにあがるとしようか」

もう一度星空を見上げる

あいもかわらず星が瞬いている

終わることのない日常を体現しているようで――

それでもいつか 物語に終わりは来る

それがいつだかはわからない

ひとりひとりの——人生という物語

永遠なものなんてひとつもなくて

それでいて その実感がわかなくて

いつからだろうか 星を見上げるようになったのは…

星を見ていると心が安らぐ

すべてを包み込むように

そして——何か大切なことを忘れていたということに気付くと語りかけてくるように

思い出せない何か

思い出さないといけない気がする何かが…

「痛っ… また頭痛か…

最近なんか多いなあ…

すっかり休んでるつもりなのに」

ふう　とため息をつき　無意識に胸元の金色を握りしめる

これがあれば大丈夫

いつも近くにあの人が居るような気がするから…

カコン

忘れられない

忘れちゃいけない

大切な人

「さて…つと
のぼせる前に上がるかな」

時間は深夜

みんなが寝てる間に こっそりと露天風呂に来たから 帰るときも
起こさないようにしないとな…

なぜかみんな俺の部屋で寝てたからね

もう一度空を見上げる

星が綺麗だった

NMS | 退屈だから…

「…というわけで かくれおにやるから」

「……………はい？」

「だから何度も言わせんなって かくれおにやるのよ かくれおに」

朝起きて早々この怪力女は何を言ってるんだ…？

「サヨ 通訳頼む」

「えっと…私もわかんない…かな」

「…まひる」

「これはもちろんユキ先輩が私と先輩のために用意してくれたビッグイベントで 皆さんがかくれおにをやってる最中に私たちはこっそり甘い時間を過ごして——やんっ先輩…そこはまだ…っ」

「ああ…また旅立つちまったよ…
仕方ないな 頼んだぞ本多」

「…俺たち生徒会が暴徒を相手にしたときに戦況を優位に進めるためには体力と洞察力 判断力そしてチームワークが必要だ
そこで…かくれおに

おに——つまり追跡者を2人 逃走者を3人に行う
これは実際に学園を舞台に行われている”戦争”を想定したものだ

逃走者は 逃げ隠れしながら色々と仕掛けてくる暴徒を想定 無論
追跡者は生徒会役員を想定している
まさに実践を想定した完璧な遊びだ」

「お…おう そうなのか…？」

まさかユキがそこまで生徒会のことを考えていたとは…

「いや…私もそこまで考えてなかったんだけど」

「考えてねえのかよ!!」

思わず突っ込む

「私はただ この島でやることもなくなったから とりあえず体を動かしたかっただけなんだけど…」

「…だとよ 本多」

「ふっ… だと思ったよ…」

せつかく本多がフォローしたのにな…

これにはさすがの本多も顔がひきつってら…

「と…とにかく かくれおにやるから!」

くっ…相変わらずの強引さ

従うしかなさそうだな…

まあどうせ暇だし 構わないかな

「えっと 結局どんなルールなんですっけ？」

「とりあえず逃走者は見付からないように逃げ隠れすればいいよ
で 追跡者は逃走者を取っ捕まえればいい
だろ 本多？」

「普通のかくれおにならな
だがそれじゃ面白みに欠けるであろっ？」

本多が不敵な笑みを浮かべる

「やるからには面白い方がいい
…違うか？」

俺たちは顔を見合わせる

本多のヤツ なに考えてんだ…？

「先程 ここでの俺達の世話係に話をつけてきた」

この島に来てから 身の回りの世話などはほとんど従業員がやってくれているが その中でもひとりあからさまに接する機会が多い従業員がいた

本多のいう”ここでの俺達の世話係”ってのは 多分その従業員のことだろう

「詳しいことはゲーム中にわかるだろう
とにかく それが特別ルールだ」

「ふーん なるほどねえ
他のルール 例えば連絡の取り合いはいいのかとかは？」

「連絡の取り合いは当然自由
逃走者が追跡者だと また 追跡者が逃走者だと言って相手を騙す
もあり
騙されても文句は言っな これは”戦争”だ」

「わー なんだか面白そうになってきましたね
さすが本多先輩です」

「ちょっとまひる！
私が発案したからこんな楽しいゲームができるんじゃないの！！
私を褒めなさいよ」

「おいユキ 聞いていなかったのか？
これはゲームではない ”戦争” だ」

本多が言い放つ

そこから普段のマゾな香りは一切ない

ユキでさえ本多の迫力に気圧されている

誰かがごくりと生唾を飲んだ

これは楽しいことになってきたぞ…！！

そろそろここでやることもなくなってきたるし 丁度いい

存分に楽しもうじゃねえか！！

”戦争” を！！

「さてと…どこにいらっしゃいかな——ん？」

独り言を呟くと ポケットに入ってるケータイの 聞き慣れた着信音に気付いた

この着信音は電話 しかもまひるからだ

「おう どーしたよ？」

なんの躊躇もなく電話に出る

『あつ先輩 いま大丈夫ですか？』

「ん？まあ大丈夫だけど」

いつたいなんの用だ…？

『ユキ先輩とサヨ先輩がいまどの辺にいるかわかりますか？』

「あいつらの場所？」

さあ…わかんねえなあ」

ちなみにユキとサヨが最初の追跡者だ

まあユキはともかく サヨの居場所なんて知っても逃走者にたいしたメリットは無いわけだが

あ いいコト思い付いちゃった」

「まあさつき集会室付近で見かけたけど ずいぶん前の話だからなあ」

『そうなんですか？』

じゃあ私のいるところは大丈夫そうですね』

「そうなのか？』

とりあえずいまどこにいるんだ？』

『私ですか？いま厨房に隠れてます』

「厨房!？」

おいおい…いくら建物全体を使った”戦争”だからって 勝手に入って大丈夫かよ…」

『それがですね ちょっと頼んだら入れてくれたんですよ』

「頼んだのか!!そしてOKだったのか!!
まったく…お互いなにを考えてんだよ」

『いやー女って罪な生き物ですね』

まひるがふふつと笑う

一瞬背筋がぞつとした

『先輩も来ます？』

「ここならきつとしばらく大丈夫ですよー?」

「そ…そうだな いまからそっち行くから待っててくれ」

『りょうかいですー』

「はやく来てくださいねっ」

「おう じゃいったん切るぞ」

なんだろう…女って怖いな……

いや それさえも武器ってか？

いいだろう こっちにも手があるんだ

まひるは油断してるわけだし 少し厳しさってものを教えてやらねえとな

今後の生徒会活動でまひるにはいままで以上に活躍してくれないと困る

そのための”経験”ってことで

そう思いながらも 顔は自然と綻ぶ

なにせSですから にやにや

それから約10分歩き 目的地にたどり着く

思ってた以上に建物が広くて時間がかかった

近くにいた従業員に許可をもらい 厨房へ入る

「おう 無事だったか？」

まひるは何の警戒心もなく厨房の隅っこに椅子を用意して座っていた

「あつ 先輩！！もちろんですよ
先輩は大丈夫でしたか？」

「俺はまあこの通りだ
ってかよく厨房なんて考えついたなあ……」

「それがまあ おいしそうなおいにつられて来ちゃっただけです
から」

照れながらえへと笑う

畜生…可愛いじゃねえか…！

「そ そうなのか…

まあとりあえず無事でよかったよ」

平静を装い ふう…と溜息をつく

2つの思いが込められた溜息を

「もしかして先輩…心配してくれてたんですか？」

「ん？まあ…一応な」

心配っちゃ心配だ

「そんな…嬉しいじゃないですかっ…！…！」

頬を赤らめて喜ぶまひる

完全に気付いてないな…

仕方ない お説教モードに入るか

「心配だよ…こんな警戒もなにも無しで
飯にも附属生徒会の4柱のひとりなんだから もっとしっかりして
くれないと」

「……………え？」

まひるの笑顔が凍りつく

「俺が追跡者だという可能性は考えなかったのか？」

「えっ？だって…追跡者はユキ先輩とサヨ先輩で——」

「考えてなかったのか…」

やっぱりな…

「えっ…だって…」

「仕方ないな…これが現実の厳しさだよ」

そう言ってまひるの肩を軽く叩く

「捕まえた」

「……………」

状況が掴めないのか 呆然としているまひる

「あっ…あははっ

やんっ 捕まっちゃった」

そしてごまかすようにスマイルを浮かべた

「可愛く言っただってダメだからな？」

「ううゝ騙すなんて酷いですよっ！！」

「だけど実際の戦場で相手は手加減も躊躇いもまったくないぞ？
これがいい失敗だと思って　これから頑張ればいい
そうだろう？」

しかも騙したというより一方的にまひるが俺が逃走者だと思い込んでたわけだし

「ううー」

「これはあくまでゲームなんだからさ　そんな顔すんなよな
安心しろって　俺はいつでもまひるの味方だから」

そう言って　今度はぽんぽんと頭を叩く

「先輩…」

私もずっと…ずっと味方ですから…」

「ん…？　おお　頼んだぞ？」

あれ…？

いままひるの表情が…　なにか思い詰めたような感じだった気が……

気のせいかな…？

…まあいいか

「とりあえず 俺はもう行くぞ…？」

「あ…はい そうですね

絶対に先輩を捕まえますから…！」

「お…おう 覚悟しとくわけ
じゃあな」

「はい！！それでは」

これで少しはまひるも警戒って言葉を覚えてくれるかな？

さて…んじゃ逃げるかな

俺は厨房を後にした

NMS | 火蓋は切られる

「こらー！！待ちやがれ長谷川っ！！」

「待てと言われて誰が待つかつての！！

つてかベタすぎんだよ！！

たまには気の利いた台詞なり斬新な台詞なり吐いてみやがれってんだー！！」

追いかけてくるのが美少女ならまだしも 暴力女ならなおさらだ

ついでだから日頃から思ってることを叫んでみた

「なにを意味不明なこと言つてやがる

つてか てめえいま変なこと考えたる！！」

うつ…勘も鋭いし

しかしさすがは暴力女

体力は男顔負けってところか…

このままじゃ先に尽きるのは俺かもしれん…

くそっ… なにか打開策はねえか…？

(ブーッ ブーッ)

ケータイのバイブ？

誰だよこんなときに連絡よこすヤツは！！

これでくだらない用事だったら後でオシオキするぞ畜生

(ブーッ ブーッ)

しかもこの長さ……電話かよ！？

いったいなにを考えてやがんだよ 諦めて後でかけ直せって！！

（ブーツ　ブーツ）

「あーもう　誰だよ畜生!!」

………は？

ふと足を止めて振り返る

いまユキも同じことを言っただよな…？

ということはつまり　2人とも電話がかかってきてる

もしかして本多が言っていた追加ルールってヤツの説明か？

それなら2人同時に電話がかかってきてる説明がつく

「ひとつ提案　電話が終わるまで停戦でどうだ？
もちろんその場から一步も動くなよ？」

「仕方ないね　その話になるよ」

「よし 絶対だぞ？」

そう釘を刺し ケータイをポケットから取り出す

少し向こうではまったく同じ動作をユキがしている

「…誰だ？」

『…ようやく全員揃いましたね

私 ホテルの従業員ですが』

従業員？

というところやっぱり本多が言ってた追加ルールの話か？

『時間になりましたので 本多様に頼まれた通りご連絡させていた
だきました』

やっぱりな

「追加ルールだっけ？」

で 内容はなんなんだ？」

『本多様が提案した追加のルールはこうです
一定の時間が経過いたしましたら 私が逃亡者3名のうち1名にお
電話をいたしまして 指示を出させていただきます』

「はあ…？」

『要はミッションです
逃亡者3名は 協力してそのミッションをクリアしていただきます』

「ちなみに追跡者はどうすんだ？」

『もちろん追跡者の2名にはミッションの邪魔をしていただきます』

「なるほどねえ」

『ちなみに ミッション中に追跡者が逃亡者を捕まえて追跡者と逃
亡者を入れ替わった場合 強制的にミッションは失敗となります』

「つまり…逃亡者はいかに追跡者にバレずにミッションをこなすか
つてことだな？」

『ご理解いただけましたか？』

「ああ 大丈夫だ

ちなみに ミッション成功するとなにかボーナスとかでもあるのか？」

『もしお望みでしたら 成績をもとに順位付けをし 首位の方のお食事を豪華に 2位3位とだんだんお食事のレベルが下がり最下位の方は比べものにならないクズ料理にする というのはいかがでしょうか？』

…クズ料理ってなんだ？

どんだけ酷いメシを食わせる気だよ

まあ勝てばいい話

「誰が異論のあるヤツいんのか？」

『……………皆様方異論はないようで

それでは ただいまより最初のミッションを通告いたします
現在逃亡者である3名から無作為に1名選ばせていただきます
最初は特別に———というかいま全員と電話が繋がってるけど 面倒だからいまここで発表します

……… それでは 長谷川様 最初のミッションをお伝えします』

おいおい… 追跡者も聞いてるってのに誰にミッションを伝えるのか
なんて言っとなよ…

「…っ てもしかも俺かよっ!!」

いやいやいやちよつと待て…
いま目の前にユキが…

「へえ… 獲物が目の前に」

「ちょ… 待てよユキ!!
電話中は停戦だって——」

「問答無用——!!」

「ふざけんな——!!」

そして俺はケータイをにぎりしめながら全力疾走をしたのだった

NMS | 火蓋は切られる(後書き)

えー…まず最初にすんません

夏になったら大量更新できるだろうとか調子乗りましたorz

それが蓋をあければこれですよ

夏？

年越ししちゃったよ!？

自分が1番驚いてるよ まったく

…これからは地道に頑張ってく予定ですので 気長に待って下さるとありがたいです

NMS | 天然ドジっ娘属性始めました

「はぁ…はぁ…」

なんとか振り切ったぜ…」

両手を膝について めいいっぱい酸素を肺に送り込む

「さすがユキ…撒くのも一苦労だ」

しかし 撒いたからにはしばらく一安心だろう

「さて…確かミッションの内容は…」

『4番倉庫にある巨大なボールを3つ 9番倉庫まで運ぶこと
ただし ボールを運ぶ最中にそれが床や壁に触れた場合 新しいボ
ールを使用すること』

だったよな？

ミッションって言うからもっと激しいものを予想していたが…なん
とも地味な

いや まあそんなことはどうでもいい

巨大なボールっていつてるわけだし おそらく俺ひとりで一気に運ぶのは不可能だろうなあ

効率よく一気にやるなら3人 つまり逃走者が全員必要か…

ひとりで3往復するよりは追跡者に見つかりにくいだろうしな

そうと決まれば残り2人の逃走者に連絡したいが…誰が逃走者かわかんねえ

ついさっきまで俺を追いかけてきたユキは追跡者だとして それ以外は誰が追跡者でも不思議じゃねえな…

どうするかな…？

とりあえず——1番安全そうなサヨに連絡してみるか

サヨなら嘘つくのが苦手だから敵か味方がすぐわかるし——

仮に敵だとしても まひるや本多と比べれば逃げるのはたやすいだ

ろっ

サヨはどんくさいからな

そうと決まれば連絡だな

そう思ってケータイを開くと…

「なっ…なんじゃこりゃ!!」

まひるから着信が715回もきてるぜ…」

ケータイを開いてまず目に入ったのが

着信 715件

という文字

そしてそのすべてがまひる

10:11	まひる
10:12	まひる
10:12	まひる
10:12	まひる
10:12	まひる

1 0 : 1 3 まひる
1 0 : 1 3 まひる

・ ・ ・

やばい… ある意味ホラーだ
リアルで怖い…

しかも1分に4件で…

こりゃリアルにストーカーの領域だぜ…？

… しかもこの場合 この着信は2通りの解釈ができるよな

その1 単純に心配して連絡をよこした↓まひるは逃走者

その2 心配してるそぶりを見せ 俺が連絡するのを待つ↓まひる
が追跡者

… さあ どっちだ？

…とりあえずまひるは後回しにして 当初の予定通りサヨに連絡するかな

「おう 俺だけど」

『あ ハセ君
どう？大丈夫？』

「おう なんとかユキを撒いたぜ…
というかあの従業員 確か…生沢って言ったっけか あんないい加減なヤツがW2をもてなすここの従業員なんかでいいのかよ… あいつのせいで無駄に疲れるし…って 愚痴を言いに電話したわけじゃねえや
もうひとりの追跡者って誰だかわかるか？」

『えっと…もうひとりの追跡者？
えっ…えっと…わ 私…かな？』

「……………はあ？」

自分から暴露しやがった…！？

『えっ あっ ま…間違えちゃった あ…あは
私じゃないよ！！全然…ね？』

「そ…そうか」

いや…これはサヨが追跡者確定で間違いないだろう

だってよ 追跡者が逃走者に自分は逃走者だと嘘をつくらなメリツトがある

しかし逃走者が逃走者に自分は追跡者だと嘘をついてもなんのメリツトはない

例外は…他の追跡者と手を組んでる場合に状況を混乱させるため
しかしそれはまずないだろう

一匹狼タイプ（というかただの自己中）のユキがサヨと手を組むことはまずない

そしてもうひとりの追跡者と組むケースも同様

なぜならこのゲームのシステム上 逃走者同士が協力するメリツトは大きいがあるが 追跡者と逃走者が組むメリツトが存在しない

まあ追跡者に対して自分は追跡者だと嘘をつくらなメリツトがあるが 俺が逃走者だというのは周知の事実

つまりそれもない

よってサヨは追跡者であると断言に近い仮定ができるわけだ

まったくあいつ…天然属性でも始めたのか？

勘弁してくれよ…

まあいい 追跡者が判明したわけだし 残りの2人に連絡して—
ん…待てよ？

追跡者がわかったってことを利用してみるのはどうだ？
つまり追跡者に嘘のミッションを教えれば…安全にミッションがこなせるじゃないか！！

ふふ…悪く思っなよ サヨ

NMS | 嫉妬してっ!!

「ちょ…まひる!!
もっと丁寧な運べっば!!」

「いいじゃないですかー
目的地は目の前なんですから」

「壁にぶついたりしたら最初からなんだぜ?
勘弁してくれよ…」

「大丈夫ですって!!
もおー先輩は心配性ですね」

「あまり大声を出すな
居場所を知られる」

「うう…すみません本多先輩い」

「……………」

「お前としては ユキに捕まるなら本望なんじゃねえの？」

「個人の欲求より勝負が重要」

「そいつあごもつともだな

豪華な夕飯もかかってることだし」

「だな … さて 着いた」

雑談をしてる間に到着した目的地——第9倉庫——の前に立つ

「… って みんな手ふさがってんじゃんかよ」

当然扉は閉まっている

「あ そうですね あは」

「あはじゃねえって…

どうすんだよ 扉開かねえじゃん」

困ったなあ…

ルールじゃボールを落したり壁にぶついたりしたらダメってなってるし…

でもこの抱えるサイズのボールを手放さずに扉を開けるのにはやっぱり…

「なにを止まる必要がある？」

「なにをつて——」

「開いた」

「……………へ」

なんと本多は 抱えるのがやっとなボールを片手の手の平に乗せ空いたもう片方の手で引き戸をたやすく開けた

な…なんてバランス感覚なんだ…

さすがは本多 不可能を可能にしやがる

「わーお すごいですね 本多先輩！！
ちよっといまほんの一瞬

距離で言うなら1? 重さで言うなら1gほどかつこいいとか思っ
ちやいましたよ!!

あ でも先輩 安心して下さいね?

私の最愛の人はいついかなるときでも先輩ただひとりですから!!

あ でも 嫉妬はしてくれてもいいんですよ?

むしろ大歓迎です!!

本多のヤロー なに俺のまひるにアピールしてんだよ!! みたいな
感じで!! はいどうぞ

「わーほんだのやろーおれのまひるにかっこいいとこみせやがって
むかつくぜー(棒読み)

はいはい満足したか

というか開いたんだし さっさと終わらせちまおうぜ?」

というか 1? や1gでいちいち嫉妬するかよ

「だな」

「ううゝそんな露骨な反応しなくてもお…」

「で 目的地に運んだけど どうすんだ?」

「ううゝ」

「多分あの台座に置けばいい」

そういつて本多が顎で指す方向には3つの大きな台座

いかにもここに置けといわんばかりに鎮座している

「でも置いていいのか？
詳しい説明なかったし」

「他に手がない」

「ま そうだな
んじゃ置くかね」

とりあえず3つとも台座に置いてみる

「これでいいのかねえ？」

これでやり直したら一度生沢とは拳で語り合う必要があるそうだが

「…なあ」

「さあって…」

ブーッ ブーッ

「ん？ケータイが鳴ってるか？」

「俺も」

「私もです とりあえず出ちやいますよ？」

「そだな ミッション成功の通知だいいが」

『はい皆様 お疲れ様です
たった今 最初のミッションである第4倉庫から第9倉庫への資材
運搬が終了いたしました』

なにかとむかつく従業員生沢の声が響いた

「よっしゃ クリアみたいだな」

とは言え 無事クリアしたようでよかった

『現在逃亡者である3名様には ボーナス得点を加算させていただ
きます 追跡者ドンマイ

以上で結果通達を終了いたします

次の通達は次回のミッション開始時です

え？それがいつかって？

知りたいですか？知りたいですよね？

でも教えませんよ 残念でしたね

それでは 失礼いたします ごきげんよう』

「ふう 楽勝だったな

相変わらず従業員の生沢はうざったいけどよ…

ま 次のミッションまでのんびり逃げるかな」

「何を言ってる？

そんな悠長にしてる暇はない」

「あ？なんでだよ」

「さっきの通達は恐らく全員に伝わった
つまり 追跡者の2人にも」

「だからなんだって？」

「通達の中で俺たちの居場所をばらされた」

「なっ…そういえば！！」

ミッションの目的地がいま俺たちのいる場所
そしてミッション内容 目的地が公表された
これはつまり居場所をバラされたわけだ

ミッション成功に浮かれすぎたか

いや 緊張感が足りないのかな 相手はよく知ってる相手なわけだし

ってか生沢のやつ…わかってて公表しやがったな！！

「早く逃げなければ来る」

「やべえな…」

まひるもぼさつとしてねえで逃げるぞ！！」

「…まひるはとっくにひとりで逃げた」

「ここにきて無茶苦茶薄情じゃねえか!」

さつき散々軽くあしらったのが悪かったかな…?

『畜生!!第9倉庫ってどこだよ!!
広すぎ!!迷った!!』

「うげっ ヌキの声!!
俺達も逃げるぞ 本多!!…って 本多までいつのまにかいねえし
!」

『ん?いま長谷川の声が…
ためーさつきはよくも逃げてくれたな!!
こんどこそ捕まえる!!
首あらつときやがれ!!』

ユキの暴言が近づいてくる

「あゝもう!!
あいつらなんか嫌いだつ!!」

そして俺はその捨て台詞と同時に倉庫を飛び出した

NMS | 嫉妬してっ!! (後書き)

どうも、作者です。

いきなりですが、新しい小説の宣伝をさせていただきます。

いままではこの「星の丘学園戦記」のみを執筆・掲載してきた作者ですが、この度新しく「唯耶ど・く・そ・んっ!!」というタイトルの小説の執筆・掲載を始めました。

現時点でまだ1話しか掲載しておりませんが、この小説と並行して執筆・掲載を進めていく予定でございます。

閲覧及び感想を心よりお待ちしております。

今後とも、作者及び「星の丘学園戦記」を、「唯耶ど・く・そ・んっ!!」共々よろしく願いたします。

NMS | 昼飯バトル

「あー畜生…腹減ったぜ…」

かれこれ30分以上昼飯を探してるんだが 一向に見当たらない
本当に昼飯があるのか疑いたくなる

え？昼飯を探すってどういう状況だつて？

つまりはこつこつこつた

『はい皆さん もうすぐお昼ですね
というわけで今回のミッションは個人競技ですので まあ勝手に頑
張ってね』

「個人競技…？」

「とうかなにが『というわけで』なのか謎過ぎるぞ」

『はい その名も”昼食争奪バトル”』

「まんまじゃねえか！！」

「そしてさらっと俺を無視するな！！」

『はい そこ静かに』

「先程 館内の5ヶ所に昼食を用意しました
皆様にはその昼食を探してもらいます」

「はあ…？」

「で それのどこが争奪バトルなんだ？
5つあんなら全員食えるじゃねえかよ」

『まあ上手くいけば全員食べれますよ？』

「上手くいけば？」

『先にお食事を見付けた方のみ食べる権利があるのです』

「はぁ？つまり？」

『見付けられなかった方は 昼食抜きです』

「な なんだってー！！
さすがに昼飯抜きはキツイだろ！？」

いや待てよ

もし2つ以上昼飯を見付けた場合は食べなければ他の誰かが食べれる
俺が2つ以上見付けたら まだ昼飯にありつけてないヤツに譲れば
いい

もちろんこのゲームで俺が有利になるような条件をつけて だが

そしてそれは逆も有り得る

少しは面白そうだな

『ちなみに お食事を見付けても召し上がられなかった場合 その
お食事は回収させていただきます』

「え ちょ！？なんでだよー！！」

俺の計画が…

『そりゃ面白くな…争奪戦だからに決まってるじゃないですかそれにセコイこと考える人が出てきそうですしねえ？』

ぐ…

べつ別にセコくないだろ！！
戦術だよ戦術！！

『無論この争奪戦でも点数は移動いたします
さらに この争奪戦の結果で 午後の部の追跡者を決定しますので
よろしく』

ってわけなんだが…

「ほんとにメシあんのかよっ！！
全然見当たんねえじゃねえか！！」

壁に手をつき 息を整える

はあ…はあ…

叫んだせいで余計に腹が空いたぜ…

畜生…他の奴らは見付けてんのか？

ちよつと連絡してみよ

「おう…まひる
元気してつか？」

『せ 先輩！？』

なんか元気なさそうですけど大丈夫ですか！？』

「いや それが…
メシが一向に見当たらずに餓死寸前だ…」

いやまあそんなすぐに餓死するほどヤワじゃないけど

「まひるはどうだ…?」

『あー…えーっと…実は…
もう3つ見付けちゃいまして…』

「……………」

マジかよ

『私もなんでかわからないんですよ
というか適当にさ迷ってただけなんですけど…』

「…てことは残り2つかよ」

『す…すみません
わざとじゃないですよ?』

「は はは…」

『はは…?』

「腹減ったあー！！！！」

『わわっ！！』

す すみませんでしたあゝ…』

ツーツー

「……………はあ

叫んだらまた腹減ったわ…」

あと2つか…

いや 待てよ

もし他の誰かが見付けてたら…

「後がないっ…！！」

ボサツとしてられねえ…！！

ここは残り少ない気力と体力を使って全力で昼飯を探す！！

多少疲れたって メシにありつければ問題ねえ！！

『はい皆様にご連絡です

お食事ですが 残り1食となりました
ありつけてない残念な方々 ざまあです』

「うおおおおおっ！！マジかよ畜生！！
つてかちゃっかりざまあと言ってるし！！」

『ちなみに最後のお食事に1番近い方は…まひる様です』

「またまひるかよっ！？
場所固まりすぎだろーがよ！！」

『それでは 健闘を祈ります
しーゆー』

「お前台詞が投げやりだぞ！！
誰か他の従業員に進行役代わりやがれ！！」

『いやー自分で言うのもなんですが 従業員の中では私が1番ま
もかと…』

「んなこと自分で言ってる時点でまともじゃねえって気付けよ畜生
が！！」

仮にお前が1番まともなら従業員はとんでもねえ奴らしいねえぞ

『しかしですね…アマゾンで3年間生活した男や 歩きと泳ぎで世界を周った男や——』

「いらんエリートばかり集めてんじゃねえよ!—」

『——と こうしている間にも 最後のお食事をまひる様が見付けてしまいましたー!—!』

「ちょ!?!?うわあああああ!?!?
俺結局食えてねえぞ!—!」

『ご安心ください』

「はあ?なにを安心すんだよ
まさか実はちゃんと昼飯が用意されてるとか?」

『はっ んなわけないですよ』

鼻で笑いやがった…

『まひる様以外誰もお食事にたどり着いておりませんから』

「……………」

『それでは 午後の部の追跡者を発表したいと思いまあす！！』

ああもう…好きにしてくれ…

NMS — 悩殺？

「——というわけだ、さつさと片付ける。」

ミッションのために集合場所に集まる逃走者3人。

「よし、いくぞ——つてか重っ！！」

いったいこの段ボールの中に何が詰まってるんだよ！！」

内容は、第1倉庫から段ボール3つを厨房に運ぶこと。

しかし…なんかひっかかるんだよな。

なんでわざわざ厨房なんだ？

「そうよ、こんなの女の子に持たせるなんて考えられないじゃない。」

「

なんか納得できん、モヤモヤする。ユキでもいじるか。

「ああ、その点ではよかったな。

さすがにまひるやサヨみたいなか弱い女子にはキツイだろうっからな」

「ちょっと、私も女の子なんだけど…?」

「むしろこの中で筋肉担当でないのは俺くらい」

「ちょ…」

「何言つてんだよ本多、筋肉担当はユキだけだろ?」

「ふむ…それもそうか」

何気に本多もノリがいい。

「アンタ達…いい加減にしろー!!」

と思ったらユキがキレた。

「あ、筋肉担当がキレた。
カルシウムが足りてねえんじゃねえか?」

「困った、俺ら脆弱な男子では太刀打ちできん。会長、打破する策は？」

「おいおい、頭脳担当は本多だろ？」

「それにあんまり筋肉で遊んでるとまひるとサヨに見付かるぞ？」

「そうだな、ミッションを片付けることこそが最優先事項」

「ほら、わかったら筋肉もさっさと来いよ」

「だーかーらー、筋肉じゃねえって言うてんだろ！！
いい加減にしゃがれ長谷川あ！！」

「いかにいかに、筋肉…じゃなかった、暴力担当がご立腹だ」

「ってか　なんで俺にだけ突っ掛かる！？」

「はーせーがーわー？」

「いや…ちょ、ま…待て！！早まるな！！」

その投げる気満々の段ボールを下ろせ！！
ってか、なんでそんな軽々と段ボールを片手で持ち上げれるんだよ
！？

やっぱりお前の筋肉タダじゃねえだろ！！

わ！！じ…冗談だからあ！！

ごめ…マジで俺が悪かつ…わ！！わわっ！！」

「覚悟っ！！」

『ちよーっと、ストラップ！！じゃなくてストップ！！』

投球モーションに入っていたユキを止めたのは、この場の誰でもな
かった。

「……………は？」

馬鹿みたいな言い間違い（100%わざとだろう）をして場に割り
込んできた声は、本多のポケットから聞こえた。

「いまのアレだよな？」

進行役のアホ」

確か生沢って名前の。

『失礼な、誰がアホですか』

「「「お前」「」」

『うぐ…見事な三重唱。』

これが噂に聞く君たちのチームワークですか。』

「で、用事がないならさっさと失せろ。

私はいま長谷川を殴るとこなんだよ」

『いやね、別に殴ってもらうのは構わないんだけど——』

「よし、じゃ遠慮なく」

『あーっ、だから待った!!』

「どっちだよ!!」

『いやね、その段ボールで殴るのは勘弁してくれないかなーというか、君達のためにもやめといった方がいいよ?』

「おい、口調戻ってるぞ」

『はっ…失礼いたしました。』

皆様方のためにもその段ボールは丁寧にお運びいただきたいのですが

「なんでよ?」

『だってそれ、皆様方のディナーの食材だから』

「戻ってる、口調戻ってる!」

『えー、もういいや、めんどくさい』

こいつ…めんどくさいって……。

『とりあえず丁寧に運んどいてね』

「つまり、俺達にディナーの食材を運ばせると」

「つまりは楽しただけかよ!!」

『そ…そんなことはございませんよ皆様!!』

決して運ぶのが面倒だとか、この際あいつらを使ってやれたとか、全然!!全く!!これっぽっちも思っていないですよ!!』

なんとバレバレな言い訳っぷり。

「へえ、そうなんだ？」

『や…あの…なんと言いますか…』

とっ、とりあえず!!丁寧にお願いしますね？

あ、それと、このミッションのみ失敗しても最後までやり通しても
らいます』

「は…?」

『いや、ですから、

途中で追跡者に捕まったらミッション失敗になりますが、ミッションは続行。

つまり、なにがあろうと厨房に食材を運んでもらいますから』

「って、結局楽しただけじゃねえか!!」

『いやいや、そんなこと——』

「あーっ。見付けましたよ先輩!！」

『あゝあ、ドンマイ!!!
とにかく運んどいてね』

「おいつ、畜生!！」

「では会長、俺もこの辺で
会長が俺のケータイを使ってるから代わりに会長のを借りる」

「おま……いつの間にそんな遠くに!!
ってか俺のケータイ!！」

いつのまにかポケットに入ってるはずのケータイがない。

「じゃ、私も。

アンタを殴るのはまたの機会にしといてやるよ」

「お前も逃げるのか!」

「別に私が逃げなくても、まひるはアンタを捕まえるでしょうけどね」

「うぐ…それは」

確かに初日にNMSとか言ってたしな…。

とは言えあれつきりアピールというアピールはない気がするけど。

「それじゃ、せいぜいがんばりな」

「うう…仕方ないな…」

とりあえず逃げるのは諦めるか。

「さて、先輩。

とりあえず危ないですから荷物を下ろしてください」

いつの間にか目の前までまひるが詰め寄っていた。

「いやもう、捕まえるなら早く捕まえてよ」

「やんつ、自分から捕まえてほしいだなんて…。
とうとう先輩も…うふふっ」

「や、違っから」

「うう…全面否定しなくても…。
と、とりあえず、荷物置いてください」

「はあ…、置いたけ…どうあ…!」

「っ…かまえたっ…!」

次の瞬間、まひるが俺の首にしがみついていた。

「ちょ…まひる…」

「ふふ…逃がしませんよ？
悩殺するんですからっ」

「いや、これは…首が……」

やばい。

悩殺と同時に絞殺される…。

「ふふっ、せんぱい！！
大好きですっ！！」

それでも――

…もう少しだけ このままでもいいかも。
なんて、思ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5845j/>

星の丘学園戦記

2011年3月20日11時19分発行